
相馬さん家のヒエラルキー。

K

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

相馬さん家のヒエラルキー！。

【Nコード】

N0216R

【作者名】

K

【あらすじ】

力を失った『元』退魔師の青年、相馬雷牙。彼の元に集う少女たちと奇妙な事件の数々。

え？ 魔術師？ 異能者？ 神に悪魔に殺人鬼？ 俺には関係ないよ、ないったら。あ、やめて、こっち来ないで。だから俺を巻き込むなああああッッ！！

現役を引退した彼と、彼を取り巻く少女たちのぬるくてゆる〜い日

常の物語が今始まる……始まったら、いいなあ……。

プロローグ

立ち尽くす。周りを見渡せばどこを見ても赤。赤。赤。

むせ返るような血の臭い。肌を焦がす炎の熱。周囲に転がる死体。死体。死体。地獄というものがあるのなら、ここはまさしく地獄だった。

もはや命あるものは存在しない。立ち尽くす少年を除いては。

少年。そう、少年だった。歳の頃なら14〜15歳くらいといったところだろうか。長い黒髪と漆黒の瞳は東洋人のものだ。いまだ幼さを残すその整った顔立ちに血と絶望に染まっている。

少年は武装していた。右手にはその体躯に不釣り合いなほど大きな拳銃が。腰には柄から鞘に至るまで漆黒の日本刀が。

そう、少年は兵士だった。戦地であるなら少年兵など珍しくもない。だが少年は兵士としての自分を見失い、ただ呆然と立ち尽くす。

戦いの中で絆を結んだ仲間たち。自分たちこそ無敵だと、最強なのだと信じてきた。恐れるものなど何もない。自分たちにできないことなど何もないと、そう、思っていた、のに。

終わりはあっさりやって来た。大規模な戦闘で負傷し、隊からはぐれてしまった少年。応急手当を済ませて戦線に戻ろうとしたとき、恐ろしいほどの爆発が視界を埋め尽くす。戦闘の中心地。自身の怪我也省みず、急いで駆けつけたときには全てが終わっていた。

もう一度周囲を見渡す。見覚えのある顔。見覚えのある腕時計。黒く煤けたドッグタグには良く知った名前が刻まれている。間違えようもない。たった数時間前には共に笑い合っていた仲間たちが、物言わぬ肉塊となつて転がっている。

人の死など飽きるほど見てきた。自身も数え切れないほどの命を手にかけて。悲しくはない。他人の命を奪うのなら、自分の命が奪われるのもまた覚悟の上だ。

だから後悔があるならばそう、『なぜ自分だけが生きているのか』。

仲間の突破口を開くために突撃し、負傷したとはいえ、なぜ戦線を離れてしまったのか。

悔恨の念が少年を押しつぶす。もはや指一本動かす気力とてありはしない。

「ほう……もはや誰も残つてはいまいと思っていたが、覗きに来てみるものだな」

ぬ。

足音が聞こえる。生存者の存在に、少年は声の方へと振り返る。

「貴様だけはまだ生きていたか……」『漆黑』よ

その声の主を視界に収め、『漆黑』と呼ばれた少年は忌々しげに舌打ちする。

「『紅蓮』、か……」

『紅蓮』と呼ばれた男は口の端を吊り上げ凄惨な笑みを浮かべる。炎を背に立つ男はその筋肉質なゴツいシルエットも相まって、まるで煉獄より這い出てきた獄吏オニのようだ。

「何をしに来た。ここにはお前の興味を引くものなんてない」

少年はそう邪険に言い放ち、踵を返す。が、

「ふ……あるだろう。『まだ一人』、残っている」

その言葉に少年の足が止まる。ゆらり、と幽鬼のようにゆっくりと振り返る少年。

「なん、だと……?」

少年の瞳が殺意に染まる。

「あまりふざけた事をぬかすなよ……俺は今、すこぶる機嫌が悪い」

静かな言葉とは裏腹に、烈火の如く燃え上がったその殺意に周囲の影がまるで生き物のように揺らめきだす。

「ならば来るがいい。仲間の仇が討てるかも知れんぞ?」

「ッ！ 貴様 ツッ！！！！！」

大地が爆ぜる。少年の姿は一瞬にして消失し、男の背後へと現れた。

まるで雷光。すでにその右手は刀の柄にかかっている。抜き手も見せぬ神速の居合いが男の首筋に吸い込まれ

「ふ……」

甲高い金属音。

必殺に思われた少年の一刀は男の手甲にあっさりとは阻まれる。

少年が雷光ならば、男は巨大な岩壁。完全に虚を衝いたはずの一撃を男は動じる事なく受け切ってみせた。その構えにはいまだ余裕さえ窺える。

男もまた、少年と同じく常軌を逸した存在だった。

「あああああああッッッッ!!!!」

少年が吼える。

周囲の影が蠢き、その密度を増してゆく。

「は、ははは、はははははははは!!!!」

男が嗤う。

両の拳に煉獄の炎が宿る。

漆黒が全てを飲み込み、紅蓮が大地を覆う。それはまるで世界の終末。ぶつかり合う二人の鬼神が何もかもを消し炭に変えてゆく。

“災厄”の名を持つ二人の激突は周囲の地形さえも変え、世界からひとつの国を消失させた。原発の事故として処理されたこの事件の真相を知る者は少ない。

あの日、天を貫いた漆黒の雷光と大地を焼き尽くした紅蓮の炎。世界のパワーバランスを握る五人のうち三人が死亡し、一人はその消息を絶った。悪夢のような結末と、そのあまりに常軌を逸した破壊の爪痕から関係者の間ではひそかにこう呼ばれるようになった。

軒先貸して母屋取られる・1

第1章「軒先貸して母屋取られる」

「……暑い」

人気のない境内で一人ボヤク。

日差しも暑い夏の午後。境内の掃除もそこそこに、俺は社務所へと退避する事にした。

全く、夏だからって毎年毎年こう律儀に蒸し暑くする必要はないと思う。

「はふう……夏はやっぱり麦茶だよなあ」

うむ、わざわざこんな暑い日に外に出る事もあるまい。今日は夕方までこのまま社務所で過ごす事にしよう。

ついこの間まで夏祭りで賑わっていた境内も、祭りが終わってしまえば全くもって静かなもので。俺は一人閑静な午後に満喫していた。

父親が他界して数年、この相馬神社を管理してきたけれどこれが実に暇だったりする。しかし俺としてはこのユルい生活を気に入っ

ていたりするわけで。一人の時間は嫌いじゃないし、何より人生にはゆとりというものが要だ。そういつた意味では神主という職業は実に性に合っている。もしかして天職かもしれない。

まあ、神社なんてものは普段から賑わうような場所ではない。ウチのようにさして大きくもない場所ならば尚更の事、滅多な事では参拝客など訪れよう筈もないのだ。

したがって、俺がサボっていようが何をしようが咎める人はいないわけだな、うむ。

「……あんたさあ、それで良いわけ？」

と、呆れた声。

見るとそこには良く知った少女が断りもなく社務所に上がり込んでいた。赤みがかった長い茶髪に整った顔立ち。どこか日本人離れしているという話をした事があつたが、母方の祖父がドイツ人だったそう。つまりはクォーターというやつだ。だからといってドイツ語が話せるわけでないのはご愛嬌。

彼女は関谷かなみ。有り体に言えば幼馴染というやつで、俺の数少ない友人であつたりする。性格に少々難はあるものの、大学の校内でも1、2を争うほど男子に人気があるのだとか。確かに美人なんだけど、みんな騙されてる気がするなあ。

「一応神主様なわけだし、もう少しシヤンとできないの？」

「祭りも終わったのにやる気出してもなあ」

夏祭りの準備とかで頑張りすぎたからな。しばらくはやる気なんて出ないって、あつはつは。

「……不良神主」

「ま、『良』ではないわな」

「自分で言っなっ」

ぺちーんっ。

……叩かれた。

「痛ひ……」

「自業自得」

そうは言っけど、自分で自分を『善良』だなんてのたまうような恥知らずよりはよほどマシではなかるっか？

「……で、今日は何さ。急に来られても茶ぐらいしか出せないぞ？」

「んむ。茶を飲みに来てやったのだよ」

臆面もなく言い放つかなみ。要するにただの冷やかしのなのか。

「よし、邪魔するんなら帰れ」

「ケチー。っていうか、邪魔ってあんた何もしてないぢゃん」

「俺の貴重な憩いの時間の邪魔だというのだ、このたわけめ」

「酷っ、あんた鬼か」

いきなり押しかけて茶を要求するようなやつに言われたくない。

「で、本当に用はないのか？ 今なら一回350円で貴女の悩みを聞き流してあげよう」

「微妙に高いな。っていうか聞き流すのかよっ！」

びしっ！ と勢いよくツッコんでくれるかなみさん。

……ノリのいい奴。

「この神社は参拝客にそんな悪質な詐欺行為を働くのか、と問いたい」

「参拝客なら賽銭を吐き出せばいい」

「この守銭奴が！」

「パンがなければケーキを吐き出せばいい」

「吐き出すの!?!」

「夏場は傷みやすいからな。きつと消費期限が切れていたんだ」

「どんな地獄絵図か！」

潰れてしまえそんな吐瀉物まみれの神社、と投げやりにつっこむ
かなみ。

「ならば吐瀉物にまみれないように賽銭を吐き出すといい」

「なぜそこに戻る」

「むしろ身ぐるみ置いていくといい」

「もはやただの強盗だよね！」

心地いいボケとつつこみの応酬。なんか楽しくなってきた。

「ほら、ジャンプしろ。電車代くらい残してやるから」

「なんでカツアゲされてんの私!？」

「パチンコ行くんだよ。さっさと出さねえか」

「やめてー。これは子供の給食費なのにー」

かなみもノツてきた。何だかんだでいいコンビだと思ふ。

「いいから出しやがれ！ 勝ったら三倍にして返してやるって言っ
てんだよー！」

「あぁっ！ お願いあなた、それだけは堪忍してー」

「うるせえっ、お前は黙って俺の言う事きいてりゃいいんだよー！」

「もう耐えられない、こんな暮らし……って、長いわー!!」

まさにもう耐えられない、と言わんばかりに力いっぱいツッコむかなみ。

む、意外に飽きるのが早いな。ただの雑談に来たものと思っただが、もしか本当に何か用があつて来たのやも知れん。

……あまり放置して拗ねられるのも厄介か？

そう思い直して話を元に戻すべく本日三回目の質問を繰り返す。

「んで、結局何なのさ？」

「んー、まあ話すとちょこっと長くなるんだけどいい？」

「……？　そういう事ならここじゃ何だし、家で聞こうか」

「冷えた麦茶とお茶菓子希望」

図々しくも茶と菓子を要求してくるかなみ。面倒だなあ……。

「茶菓子は無いが、昨日買って来た西瓜でよければ。ってか、文句は言わせん」

「んむ、良きかな良きかな。苦しゅうないぞ」

誰だよお前。

ともかくにも場所移動。

ウチの神社は小高い丘になっていて境内までは長い石段を登らねばならない。社の裏手には林が広がっていて閑静な雰囲気を出している。ちなみに誰が呼んだか、『相馬御殿』などと典雅な呼び名のついた我が家も社の裏手に在ったりする。なんでも、昔は参拝客相手に旅館として営業していたらしい。……こんな所で営業しても儲からないだろうに、と思っていたのだが当時は意外に訪れる人が多かったのだそう。俺はまだ生まれていなかったたのでその辺りの事情はよく知らないが………謎だ。

ともあれそんな我が家も今や旅館経営を断念し、俺一人が住むには広すぎる豪邸と化している。

「久しぶりに来たけど、相変わらずだっ広いわねえ………」

茶の間に着くなりそんな感想を漏らすかなみ。

「全くだ。掃除が大変なんだよ」

茶の用意をしながら軽口を叩く。

「こつて築何年くらい？ 結構古い割にはこないだの地震でも全然壊れた所とかないよね」

「や、それでも壁にヒビ入ったりいくつか歪んで開きにくくなったドアとかあるよ。まあ倒壊するほど酷くはないけど、そのうち補修しないとな」

二人分の麦茶を置きつつ対面に座る。麦茶が来た途端にシヤキツと姿勢を正すかなみ。現金な奴め。

「ウチはもう駄目っばいわー。取り壊して新しいの建ててるって」

言いながら麦茶をひと口。両手でコップを持ってチビチビと口をつける様子は女の子らしくて実に可愛らしい。

「ああやっぱりか。お前んとこのアパートもだいぶ古かったもんなあ」

先月の中頃。午前7時42分35秒、地震発生。マグニチュード7.3、震度5強という規模の大きさにも関わらず死者はわずかに2名。意外に被害は小さかったため、新聞やニュースでも大きく取り上げられる事もなく地元住民以外には既に忘れられつつある出来事ではあるが、やはりそれなりに被害は出ていたりするわけで。ご近所の山下さんのおじいちゃんが足を骨折したり、八百屋の丸八が倒壊して店をたたむ事になったり、かなみのアパートが取り壊しの憂き目にあっていたりするわけだ。

「んあー。来月までに出てけって言われてるんだけど、実はまだ行く先決まってないんだよねー」

うにゆく、と意気消沈してちやぶ台に突つ伏すかなみ。ここからだと胸元が覗き見えるのは内緒の話。今日のブラは淡い緑色、か。

「しかし来月って。またえらく急な話だな」

「なんかもう本当に危険な状態らしくて。できればすぐにでも出た方がいいってさ」

「ふーん……………ご愁傷様」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

沈黙。

「……………それだけ、なの？」

「他に一体何がある？」

「いやいや、もうちょっと相談に乗ってくれてもいいじゃん！ここは可愛い幼馴染の好感度を上げておく所ですよ？」

「えー」

可愛いとか自分で言いやがった。事実なんだけど自覚してるのがものつそいム力つくわあ。

「えー、じゃなくて」

「いえーい」

「いえーい、でもないよっ」

「ち、面倒な奴め」

「言つに事欠いてそれかつ。あんたには人情つてもんがないの？」

「ない……と言いたいが話が先に進まん。結局どうして欲しいんだお前は」

「部屋いっぱい空いてるでしょ。住・ま・せ・ろ」

「絶えつ対嫌」

心底嫌そうに言ってる。いくら何でもそれはないわ、うん。

「即答かよっ。もうちょっと考えれ」

「阿呆か。死ね」

「いや、死ねって」

もしくは人生やり直せ。

あと全然話長くない。開始3分で結論出たわ。わざわざ家に移動する必要あったのか？

「そんなもん無理に決まってるだろう。同棲する気か。犯すぞ？」

「むう……つまりは路頭に迷えと？」

「思う存分迷ってくれ」

「酷っ、あんた鬼か。つーか、実は私の事嫌いでしょう？」

「いや？ むしろ大好きですが何か？」

「っていつかもう超好きですが問題でも？」

「うーそーだー。さっき阿呆って言われたもん。死ねって言われたもん。ちくしょー、こうなったら意地でも居座り続けてやるのもやむ無しと申しますが、むしろ丸ごと乗っ取ってしまうのもまんざら悪くないかもしれないとも思う今日この頃の私なのですよーっ！！」

「やーっ！ と吼えるかなみさん。よし、いい感じにラリっている。

だが断る。断固として断る。

「まあ……あれだ。今回はご縁がなかったという事で」

「そんな不採用の常套句で誤魔化されるかあっ！」

「いや誤魔化してないし。お前不採用」

涙目で噛みついてくるかなみににべもなく言い放ち、しっしつと
追い払う。

「なお悪いわつ。何が不満だこんちくしょー」

「んー……なんて言うか、世間体？」

「普通に酷いなっ！？ キミの私に対する友情はそんなものだった
のですか？」

「え？ 誰が誰の友達だつて？」

「そこから否定なのかYO！」

なぜヒップホップ？

「まあ落ち着け。何と言われようが無理なもんは無理だ。自分でも
分かってて言うてるだろ？」

「む、冷静なツツコミ。そりゃあ常識的に考えて無茶言ってるのは
分かってるけどさ、もうちょっと相談に乗ってくれても良さそうな
もんじゃない」

不満そうに口を尖らせ拗ねるかなみ。

うむ、悪ノリが過ぎたのは認めるが。だからとて俺に何ができよ
うというのか。相談するなら俺が何とか出来る内容のものにしても
らいたいなあ。

「どちらにせよ俺の出る幕はなかるつよ。親御さんと話し合えー」

「うーん……それはー……ちょっと」

「口ごもるかなみ。」

「なんだ、両親とはまだちゃんと話せてないのか」

「む……まあ……それなりに？」

「なぜ疑問形」

とは言うものの、彼女が口ごもるのも無理からぬ事情があったの事である。その事情はいずれ機会があった時にでも語るとして、今現在かなみの両親は海外赴任中であるため彼女は独り暮らしである。親子の仲は正直に言ってあまりよろしくはない。いや、仲が悪いというのは語弊があるな。疎遠、とでも言うかお互いに距離を測りかねている感じだろうか。

「新しく部屋を借りるにしても、どの道一度話し合う必要はあるだろう？ 先延ばしにしてもいい事はないと思うが」

「そんな正論など知らぬ！ もっと男気溢れる選択肢はないのかッ

！」

「うーん……」

男気溢れる選択、ねえ……。

ルート選択肢：関谷かなみ

- 1：かなみを見捨てる。
- 2：迷惑なので警察に通報する。
- 3：住み込みのバイト（タコ部屋）を紹介する。
- 4：風俗に売り飛ばす。
- 5：後は野となれ山となれ。とりあえず犯してから考える。
- 6：　　に口無し。面倒なので口を封じる。

「待て待て待て待て！　なんだその選択肢！　どう考えてもバッド

フラグしかないじゃん!？」

理不尽な選択肢に必死で抗議するかなみ。キミにはハッピーエンドなんて用意されてないのですよ。

「だってこれ陵辱系調教SLGだし。攻略本によると、かなみルートに進むなら5番が正しい選択になってるらしいよ」

「馬鹿なツ！ とりあえず犯されるのが正しいルート選択肢だといつのですかっ!？」

「あー、でもかなみは最終的にヤンデレちゃんになっちゃうれしいので俺的にはパスだ。選択肢4で風俗に売り飛ばしてから金銭的な肉体関係を結びたいところだな」

「結局私、あんたに犯されるんじゃないの!」

「そりゃあ18禁だし。Hシーンの充実は売れ行きにも関わってくるのですよ?」

うむ。主人公としてヒロインを犯すのは当然の権利だよね?

「そんな大人の事情など訊いていない! 純愛系一般ADVへの方針変更を要求する!」

「発売日も迫ってるんだから今さらそんな事言われてもプロデューサーさんだって困るじゃないか。原画さんだって8割方イベントCG描き終わってるんだし」

適当にマニアックな話をでっち上げる俺。おそらくこの時点で大

半の読者は置いてきぼりになっている。

「そんな……すでに私の運命は決定しているというのですか……。ち、ちなみに原画さんは一体誰をつ、そして私の声優さんは一体誰がつ!?!?」

「原画はいと のいぢさん、声優は榊原ゆ さんが担当している」

「無駄に豪華なキャスティング!? それならむしろ納得してしま
いそうだ!?!」

そしてあっさり騙される馬鹿ヒロイン。

馬鹿だった……馬鹿な会話だった。

いやあ楽しいなあ。

閑話休題。

この作品は陵辱系調教SLGでもなければ純愛系一般ADVでもありません。いと のいぢさんも榊原ゆ さんも一切関係ありません。

なので悪しからず。18禁じゃないよ。

「さて、お前の部屋を探す話だったな」

「閑話休題の一言で済むなんて、小説って便利だよね……」

やかましい。

「とはいえ真面目な話、俺には力になってやれないと思うのだが。さっきも言ったように同棲の線はありえないだろ？」

「む……それはまあ、分かるけどさ」

どうしたものか、と二人して頭を抱えたところで玄関のチャイムが鳴る。

どうやら客が来たらしい。かなみにしてもそうだが、あまり交友関係が広いとは言えない俺のところにも客が来るとは珍しい事もあるものだ。

「はい、どちらさまですかー？」

と、かなみが席を立つ。

「って、何でお前が出るんだよ」

びっし。

必殺デコピン。

「うにゃっ!?!」

「お前はいいから大人しくしてろ」

「にゅ〜……くそう、覚えてるよっ」

もう忘れた。

……。

……。

「はい？ どちらさまですか？」

玄関を開けるとそこには見慣れぬ女性が立っていた。歳の頃は20代半ばといったところか。セミロングの艶やかな黒髪が印象深い。落ち着いた雰囲気綺麗なお姉さんだ。

そしてその後ろには女性の妹だろうか。髪は背中まで伸ばしてい

るが、どこことなく面影の似た少女とそれよりさらにひと回りは小さなチビっ子。くりくりとした大きな目が可愛い、利発そうなお子さんである。

「……………」

「……………」

なんだろう、すごい見られてる。別に睨まれてるわけじゃないよな。初対面だし。

……………初対、面？

あれ？ 初対面？

あれあれ？ なんだか俺、この女性の事知ってる気がするぞ？
デジャヴ？

んー……………どうだろう。「こは素直に」「どちらさまでしたっけ？」と訊くべきか、あるいは思いきって「お久しぶりですー！」と声をかけてみるべきか。

いやしかし、それはいくらなんでもリスキーなギャンブルとか外したときの気まずさを考えると迂闊な真似はできないわけだからといてもし本当に知り合いたったとしたら逆に声をかけないのは却って失礼になるのではなからうかいやいやしかし

「あの一……………雷牙さん？」

気がつけば件の女性がおずおずと声をかけてきていた。

しまった、タイムアップ!?

「あ、いや失敬……ん?」

雷牙さん? 俺の名前?

……
やっべえ、知り合いだよ。

ええー………? 誰だっけ? 俺、の、嫁?

「雷牙君。キミ、まさかとは思っけど………」

後ろの少女が俺の態度を不審に思ったかジト目で見ている。ヤバ
いやバいやバ。

「H A H A H A H A H A、いやだなあ忘れてない。忘れてないよ。
やー久しぶりー元気そうで何よりですよ」

「はあ………この、薄情もの」

わーお、盛大にため息をつかれた挙げ句にすげえ冷たい目で睨ま
れた。え、マジで誰よ? 知り合いにこんな美人姉妹いないはずだ
けど。

「うーん………」

「あの私、秋月佐夜子です。覚えて、いませんか?」

煮え切らない俺の態度に女性が助け舟を出す。

「あきつき、さよこ………………。……………っ！ 佐夜子さん！？ え、佐夜姉え！？」

そこまで来てようやく記憶の糸が繋がった。まったく申し訳ない限りではあるが、今の今まで完つ壁に忘れてたよ。

「やっと思い出した？ ボケるにはまだ早いわよ」

「そういうお前は翔子か、しよこたんなのかッ！」

「しよこたん言うな！ 中 翔子さんとは何の関係もない！！」

いや、驚きのあまりつい。だって最後に会ったの6年も前だぞ？ とつさに思い出せなくても仕方なくねえ？

この美人姉妹、秋月佐夜子さんと秋月翔子。二人は俺の従姉妹である。父方の親戚でウチと同じく神社の管理をしている。

確か天宮神社といつたか？ しかしながら両家の間にはそれほど親しい交流もなく、親父が他界したとき以来すっかり疎遠になってしまっていた。

ちなみに、俺の記憶が正しければ佐夜姉えは6歳年上だから25歳で、翔子は2歳年下だから17歳、かな？

「や、すぐに思い出せなかったのは悪かったけども。6年も音沙汰無しで、何の連絡もなしにいきなり訪ねてくるとは思わないじゃないか」

「む。それはそうだけど……………」

とは言うものの不満そうな翔子。ひと目で分らなかったのがよほど業腹らしい。無茶を言ってくる。

「まあ、それについては色々込み入った事情がありまして」

「はあ。それじゃあまあこんな所で立ち話もなんなので」

「どうぞ」と促す。

「すみません、お邪魔します」

「お邪魔しまーす」

「おじやましますー」

ん、そういえばこのチビツ子は？ さっきから会話に入ってきたのですっかり存在自体を忘れていたが。

じーっと見つめる俺の視線を察した佐夜姉えから補足説明。

「ああ、この子は娘のひなたです。6年前に一度会っているはずですよ」

「あー、そういえば赤ん坊抱いてたのは覚えてますけど」

ふむ、まあ分からなくても無理はないか。

「えと、よろしくおねがいしますね」

ペこり、と頭を下げるひなた。

「む、よろしく」

こちらもお辞儀を返す。礼儀正しいお子さんだ。佐夜姉への教育の賜物か。

でも……そつかあ、佐夜姉え結婚してたんだよなあ。従姉の子供とか実感湧かねえ。

「何難しい顔してるの？」

にゅつと横から翔子が覗き込んでくる。顔近いな……キスするよ？

「いや……な、従姉の子供ってどう接していいものかと。んー……その辺り、翔子はどうなんだ？」

「うん？ どうって何が？」

「や、その歳で姪がいるってのは」

「……叔母さんって言いたいの？」

目が怖い。そんなつもりで言ったんじゃないのに。

「深読みしすぎだ。参考までに訊いただけ」

「ならいいけど……まあ、歳の離れた妹みたいなものだから。叔母とか姪とかはあんまり気にしないようにしてるかな」

なるほど……気にならないじゃなくて気にしない、ね。つまり気にはなってるんだな。その辺りツッコんだら怒られそうだけど。

「ふーん。ま、そのうち慣れるか」

よし、俺もあんまり気にしないようにしよう。

と、俺の中で方針が決定したところで居間に到着。と、

「おかえりー。お客さん誰だったー？」

麦茶片手にテレビを見ながら、かなみがだらけた姿勢で待っていた。

ト。……………オウ、シッ

そっいや、コイツがいたの忘れてたよ。

「「「「誰？」「」「」

見事にユニゾンする4人。

ああ……………なんだか本当に面倒な事になってきた。

もう好きにしてくれ。

軒先貸して母屋取られる・2

さて。この状況、一体どうしたものか。

概況は以下の通り。

- ・6年ぶりに訪ねてきた従姉妹とその子供。
- ・居間でテレビを見ながら麦茶片手にくつろぐ幼馴染。
- ・両者の間でうろたえる俺。

「状況だけ見ると浮気現場に踏み込まれた二股男のよう。この甲斐性無しが」

とかなみ。

「その場合お前が浮気相手になるわけだが。この泥棒猫め」と俺。

「その場合私が奥さんでしょうか？ この浮気者」と佐夜姉え。

「じゃあわたしが娘ですねっ。おとーさん」

とひなた。

「しまった！ 私だけ役がない！？」

と翔子。出遅れたか、馬鹿め。

「っーかみんな順応早いな。すでにコントが成立している。

「家庭があつたって関係ない。だって愛しているんだものっ」

「すげえ、この状況で更に重ねてきやがった。

「よくもぬけぬけと、このファツキン泥棒猫。主人とウチの財産はあなたなんかには渡しませんよ」

佐夜姉えもノツてきた！ そして意外に黒い！

「おとーさん、おうちに帰ろ……」

ひなたまで！？ ハイスペックなチビツ子め！

しかしここで俺までコントに参加してしまうと收拾がつかなくなりそうだ。俺がしっかりしなければ……！！

「すまないかなみ……お前との事は……出来心、だったんだ……ッ
！」

「しっかり参加してどうするッ!！」

唯一出遅れて役のなかった翔子が激しくツッコむ。

もう2、3巡続けたかったのになあ。まあ、ツッコまれてしまったは仕方ない。

「それじゃあもう終わりにしよう。お別れだ……かなみ」

「さらに続けるな!！」

ぺちんっ。

……叩かれた。

「ちえ。せつかく楽しくなってきたのに」

「いや、いい加減自己紹介くらいさせなさいよね。どういう状況よこれ」

「だから浮気現場に妻と娘が……」

「それはもういいから」

うーむ、せつかくの流れをバツサリと断ち切られてしまった。

………役がなかったのがそんなに不満だったのかな。

「仕方ないな。じゃあお互いの紹介から。右から順番に関谷かなみ、我が不肖の幼馴染。佐夜姉えこと秋月佐夜子、従姉。その妹の秋月

翔子、従妹。そんで佐夜姉えの娘、秋月ひなた。以上っ」

「……いくらなんでも端折りすぎじゃない？」

「まあ、相関関係が分かればそれでいいだろ。自己紹介とか挨拶とか社交辞令とかは各自の判断に任せるよ」

「というか、詳しく紹介できるほど覚えてないだけだが。」

「身も蓋もない！」

「その辺のツツコミは置いて。とりあえずかなみ、お前邪魔だから帰れ」

「んー、まあ帰れと言っなら帰るけど。でも私まだ西瓜食べてないよ？」

さりげなく西瓜を要求するかなみ。さっきから帰る気配がないと思ったら、コイツ西瓜が出てくるのをずっと待ってたのか。

「……何より優先されるのが西瓜というお前の食い意地には感服するばかりだが。それはまた次の機会にといい事で」

「つまり私に死ぬと言っているのですか？」

「死ぬな。生きる」

「私から西瓜を取ったら一体何が残るといいのか」

「どんだけ食い意地張ってんだよ。西瓜はお前の構成要素なのか？」

むしろ主成分なのか？

「えと、私たちお邪魔でしたか？」

と遠慮がちに辞去しようとする佐夜姉え。ほら、お前がいつまでも駄々こねるから佐夜姉えが氣い遣ってんじゃん。

「ああいえいえ。私の方は大した用事でもないので」

大した用事だよ。死活問題だよ。俺には力になれなかったけども。

「とりあえず、西瓜食べたらずぐ帰りますから」

そしてにこやかに西瓜の催促をするかなみ。

「って結局西瓜食うまで動かないつもりなのかよ！」

「私から西瓜を取ったら一体何が残るといっのかッ！」

「一回言いやがった。」

この女、俺に恨みでもあるのか？

「ええい、帰れ帰れ。お前に食わせる西瓜はないっ！」

「まあまあ、いいじゃないですか。西瓜はみんなで食べましょう」

佐夜姉え……コイツを甘やかすといい事ないと思っよ。

いや、いいけどね。なんだか全然話が先に進んでない気がするん

だ。

はい、西瓜切れましたよ。

さっさと食ってとっとと帰れかなみ。

「はあ……それじゃあ佐夜子さんたちも部屋を借りに来たんですか？」

「ええ、実はそうなんです。も、という事はかなみさんも？」

すでに秋月一家と完全に打ち解けているかなみ。

というか、家主を置いて何勝手に話進めてんの。え、なに？ 佐夜姉えもここ住ませろって？

とりあえず話に加わるべく席に着く。皿を置いた瞬間、四方から手が伸びて西瓜をかつさらっていかれた。なんだろーね、このチームワーク。

「ふえもふおいふふあふあふえふあつふえ」

かなみが口いっぱい西瓜を頬張りながら何か言ってる。

「何言ってるか分からんわ。食つかしゃべるかどっちかにしろ」

「ふむふむ、なるほど……どうしてかなみさんに部屋を貸してあげないんですか、雷牙さん？」

「今ので分かったんスカ!？」

恐ろしい。実はテレパシー能力でも持つてるんだらうかこの人？

「いやですね。そんなものあるわけないじゃないですか」

にっこり笑う佐夜姉え。

「しっかりテレパシー使ってんじゃないスカ!!」

「冗談ですよ。なんとなくそんな顔をしていたので言ってみただけです」

「はあ……」

嘘だ。絶対嘘だ。

俺の本能が告げている。『この人には決して逆らうな』と。

「で、佐夜子さん。なんかさっき佐夜子さんたちもここに住む、みたいな話が聞こえてきたんですけど？」

「ええ、実はそうなんです。どうもウチの神社、シロアリにかじられてしまいました」

「シロアリっすか。ああ、それで害虫駆除とか神社の補修とかで家にいられなくなっただんですね？」

なるほど……秋月家もウチと同じく神社の裏手に家がある。工事中は色々危ないものな。終わるまでウチに避難してきたというわけだ。

「いえ、そうじゃありません」

「というと？」

なぜか気まずそうに目を逸らす佐夜姉え。

翔子とひなたに視線をやるとやはり同じリアクションが返ってくる。

「あー……？」

「ええ……実は……その……」

んー……なんだろー……？

すげえ落ち込んでるけど、そんなに被害甚大だったのかな。結構時間がかかりそうとか？

「雷牙さん」

「は、はい」

佐夜姉えは意を決したかのように正面から俺の目を見つめ、静かな声で告げる。

「天宮神社は無くなりました」

「はい？」

「天宮神社は無くなりました」

「いや、一回言わんでも」

なくなつた……………亡くなつた？

「それはそれはご愁傷様で」

お悔やみ申し上げます、と頭を下げる。

「いえいえそんな」

「丁寧にごうも、とお辞儀を返される。

……………。

……………。

……………。

.....。

「.....え？ 無くなった？ なんで？」

「「「「遅っ！」「」「」

全員にツッコまれた。

「いやいや、だってシロアリってもいきなり神社全部が無くなるわけじゃないじゃん。ただだけ放つたらかきにしてたんスか」

「ええ、私たちもびっくりです」

びっくりなのか。というか、びっくりの一言で済むのか。

「先月の事でした。久しぶりに本殿の裏を掃除していたところ、柱が二本、シロアリにやられているのを見つけたんです。すぐに業者を呼んで駆除してもらったのですが、長い間放置されてきた事と、神社自体の古さもあってあちこち傷んでいたんですね。一度大掛かりな改修工事しようという話が持ち上がりまして。そんな時にあの地震です.....ひとたまりもありませんでしたよ。家の方もそのあたりを受けて.....」

.....。

うーん.....？

「えと、それなら今日までどうしてたんですか？ すぐウチに来ればよかったのに」

そう言うと、今度は翔子が語り始めた。

……目尻に涙を浮かべながら。

「はじめは、私たちも頑張ってたのよ？ 家の方はまだ使える部分も残ってたし」

それはまた……なんとも危ない事するなあ。

半壊した建物で生活するなんて、崩落したらどうするんだ。

「でも、そのうちおかしな事が起こりだしたの」

突然、翔子の声のトーンが変わる。

何かに怯えるように体を震わせながら。

「おかしな事って？」

「それは……」

口ごもる翔子。

その様子にただならぬ気配を感じ、俺も気を引き締める。

「神社が倒壊してから、夜になると崩れた本殿の方から声が聞こえてくるようになったの。最初は気のせいかとも思ってたんだけど、その声は日に日に大きくなって……」

「じくり。」

誰かが生唾を飲み込む。

「声ってどんな？」

声が聞こえると言われても、それだけじゃ判断に困る。

「そ、そんなの怖くてちゃんと聞いてるわけないでしょ！」

そこでキレられても。俺が悪いのか？

「うーん……佐夜子さんはその声、聞いた事あるんですか？」

翔子の話だけではいまいち要領を得ないので、佐夜姉えに話を振ってみる。

「ええ、さすがに近付いて確かめる気にはなれませんでした。女の人の声みたくでしたね」

うん、よし。全く分かん。

判断材料がなさ過ぎる。まあ、ここで考え込んでいても始まらないか。

……。

……。

……あれ？

「……もしかして、それで家放ったらかしでこっちに逃げてきたんですか？」

「「「……………」」」

さっ、と目を逸らして黙り込む秋月一家。

……………凶星かよ。

「あ……………つと。それで叔父さんと叔母さん、それと佐夜子さんの旦那さんは？」

「逃げました」

「はい？」

「神社の修繕費用も家の再建費用も払えなくて逃げました」

「……………え」

夜逃げっすか！？ しかも佐夜姉えたちを置いて！？

えっと、コレ実はものすごい重たい話なのでは？

「……………それじゃあ、神社の方って今どうなってるんですか？」

「さあ……………？」

さあって。マジで放ったらかしですか？

「うーん……………ここで言っても状況がさっぱり分からんし、いっぺん様子見に行った方がいいかも知れんなあ」

というか、見に行かない事にはどうしようもない。

なんか色々こんがらがってきたな。えと、まずは佐夜姉えたちの住むところだよな。当面はウチに住んでもらうとして、やっぱりずれは神社の再建も考えないといけないだろうし……………そういや、再建費用ってどのくらいかかるんだろう？ よく分からんが、1000万や2000万程度じゃどうにもならん気がする。

「……………う……………」

俺が首をひねりながら考え事をしていると何やらかなみが唸りだす。

「にゃ……………つっ!!」

そして雄叫び。猫か。

「うるせえっ、なんだいきなり」

「黙らっしやい！ 地震とかオカルト現象とか再建費用とか夜逃げとか、そんな事はどうでもいいのですよ!」

「どっつでもって……………」

どれも割と重要な話題でしたよ？

「そんな事よりも！ まずする事があるでしょう!?!」

痺れを切らしたかのように強引に話の腰を折るかなみ。やおら立ち上がり、ちゃぶ台に片足を乗つけて腕組みしながらふんぞり返る。

お行儀悪いですよ、かなみ君？ ちなみに俺の位置からはパンツまる見えです。今日は緑の縞パンですか。

「……で、する事って？」

「決まってるじゃない！ 秋月一家の歓迎会よっ！！」

どどんっ！ と効果音を背負いつつ胸を張るかなみ。

「はい……………？」

何を言い出すのかこの馬鹿は。あゝ、これはあれだ。コイツ、重い話に耐え切れなくなりやがったな。

混迷極まる相馬家リビング。馬鹿はとどまる所を知らず、状況はさらにややこしくなっていく。

うーん…………カオス！

で。

居候云々の話はそつちのけで始まった『秋月一家 大歓迎会』。

主催：関谷かなみ

来賓：秋月佐夜子、秋月翔子、秋月ひなた

雑用：相馬雷牙

俺の扱いつて一体……。

そんなこんなでひたすら料理を作つては運び、作つては運ぶ。

佐夜姉えが手伝いを申し出てくれたが主賓に働かせるわけにもいかず、丁重に断る。

つーか、かなみ。お前は手伝えよ。

「あははははははー！」

……すでに出来上がってやがる。一升瓶をラツパ飲みしながら笑い転げる馬鹿。そんな飲み方してたらまた二日酔いで苦しむ事になるぞ？

「うう……にゆう……」

ひなたはおねむか。酒飲ませてないだろうな？

「はいはいひなたちゃん、寝るなら布団でねー」

「んん……すう……」

ひなたを抱えて客間に連れて行く翔子。それなりに飲んでいたはずだが足取りはしつかりしている。実はウワバミなのか？

「はあ……」

なんかもう疲れた。

なんだろーね、このグダグダ感。結局何ひとつ話が進まないままお開きに。

「大丈夫ですか？ ……どうぞ」

「あー、どうも」

佐夜姉えに差し出されたビールを受け取り口をつける。渴いた喉に炭酸が心地良い。

「すみません、急に押しかけた上にこんな……」

頭を下げる佐夜姉え。

「いいですけどね。別に親戚なんだし、遠慮しなくても」

「でも、4人も居候が増えたら大変でしょう?」

「4人つて。かなみも入ってるんですか?」

いや、なんかそれももうどうでも良くなってきたけど

「だってかなみちゃんも家がなくて困ってるって言うじゃないですか」

「そうですね……」

かなみを見る。俺の視線に気付いたか、にへへ、とだらしなく笑って手を振っている。

……まあいいか。どうせ3人も4人も大して変わらない。

やれやれ、と苦笑して手を振り返す。

「ふふっ」

そんな俺たちの様子を見てくすくすと笑う佐夜姉え。

「本当に仲良しですね。いつから付き合い始めたんですか?」

「はい?」

なんだか変な誤解が。

俺がかなみと付き合ってるって？ 冗談。あんな手のかかる女、面倒見切れるかっての。

「悪い冗談はよして下さい。あんなのただの腐れ縁です。きっと糸引くくらいグズグズに腐り切ってます」

「あらあら、そんな事言ってるのかなみちゃん怒りますよ？」

「怒りませんよ。むしろ刺されます」

出刃包丁で。もうグツサグサに。

『ならばそんな縁はスッパリ断ち切ってくれ！』とか言って。

そんな死亡フラグを立てるのは御免蒙るので本人には言わないでおく。

……命は大事に！

「まあ、仲がいいのは認めますけどね」

アイツも色々特殊だからな。本当の意味で打ち解けられる相手っていうのは中々いないらしい。

「それはそうと佐夜子さん」

「はい？」

ちよつどいい機会なので昼に聞けなかった話を訊いてみる事にする。

かなみもいるが、あの様子ならすぐに潰れるだろうしな。少々込み入った話になつても構わんだろう。

「天宮神社の『声』の話ですけど、本当に何も心当たりはないんですか？」

「……？ どのような意味ですか？」

やはり俺も相馬神社の宮司として、崩壊したという社の様子が気になるわけで。社の崩壊が原因で異変が起きているというのなら放つておくわけにはいかない。

「天宮神社で奉られていた祭神に關係しているのならちゃんとした方がいいでしょうし、詳しく話を聞かせてもらえませんか？」

「天宮神社の祭神、ですか……」

なにやら思案顔の佐夜姉え。思い当たる事でもあるのだろうか。

「佐夜子さんは何か知りませんか？」

「どうでしょうね。もともとは鎮魂のために建立された社が始まりだと聞いていますが」

「ふむ……」

「古文書の類は一緒に埋もれてしまいましたからね。今となっては当時の事を調べるは難しいと思います」

つまり現状はお手上げか。やはり一度様子を見に行ってみる必要があるかも知れんな。などと考えていると、

『ならばわしに訊くがよい。何でも答えてやるうぞ』

と、突然頭上から声がかかった。

見上げてみると巫女服姿の少女が空中で仁王立ちしていた。見たところ13〜14歳くらいで、黒髪ロングのストレート。ツリ目気味の目元が勝ち気な印象を受ける、なかなかの美少女だ。

突然の事に佐夜姉えは言葉を失い固まっている。かなみは……とうとう潰れたか。一升瓶を大事そうに抱えて寝息を立てている。

「誰、あんた？」

これといった悪意や敵意は感じない。空中に浮いていたり、半分透き通ったりしてはいるが危険はなさそうだと判断し、とりあえず声をかけてみる。

『うむ、よくぞ訊いてくれた。何を隠そう、わしは神じゃ』

ふふん、と言わんばかりにその薄っぺらい胸を張る少女。

「……………」

俺と佐夜姉え、沈黙。

「さて、それじゃあそろそろ片付けるか」

「あ、手伝います」

そして何事もなかったかのように食器を片付け始める俺たち。

『待たんか、ばかもの!!』

すこーん。

ビールの缶が俺の後頭部に直撃する。空だったのでまるで痛くはないけれど。

「なんだよー、チビツ子はもう寝る時間だぞ。遊んでないでさっさと寝ろ」

『チビツ子ではない、神じゃ!』

めげずに胸を張る自称・神様。やっぱり乳はない。

「……………」

『……………』

「……………えーと、神様?」

『咲夜と呼べ。それがわしの名よ』

「じゃあ咲夜。一体何の用だ。こっちは神様を呼んだ覚えはないん

だが」

自称であろうがなろうが、神と名のつくものにロクな奴はいない。できれば関わり合いになりたくないというのが本音だった。

『ほう……随分と落ち着いておるのだな。この国には神を信じる者など絶えて久しいというのに』

それが分かってるんなら自分で神とか名乗ってるんじゃないよ。

「……少々特殊な家系に生まれたもんでね。言っとくが、神様に対する畏敬の念なんか持ち合わせてないぞ」

そう言つと咲夜はからからと笑いながら地面に降りる。

『構わんよ。わしもそんなものに興味はない』

気持ちのいい笑みだった。俺、こいつの事わりと好きかも知れん。

ちなみにロリコン的な意味では断じてない。

「それじゃあ何のために出てきた。俺に何の用だ？」

おそらく彼女は天宮神社の関係者。

この話題、このタイミングで声をかけてきたからには何か意味があるはずなのだ。

『うむ。用があるのはお主ではなく、そちらの娘にだかな』

と、佐夜姉えに視線を向ける。やはりか。

“天宮神社の事は自分に訊け”とか言ってたし、この自称・神様が天宮神社に縁の人物である事は間違いなさそうだ。

「あの……わ、私に用ってどういふ事でしょうか」

俺の背中に隠れながらおっかなびっくり話しかける佐夜姉え。

『うむ、秋月の娘。それを訊きたいのはこちらの方よ。何度呼びかけてもまるで話を聞こうともせぬし、お主らは社を放り出して一体何をしておる』

「そ、それは……」

『社が壊れたままに捨て置けばいずれ“あやつ”の封が解けてしまう。わしの力もそろそろ限界じゃ。いつまでも抑えつけてはおけんぞ？』

「あやつ……？」

『天宮神社建立の所以となったもので、“魂喰い”と呼ばれる化物よ。わしはあやつを鎮めるために社の礎となったのじゃ』

なるほど……つまりは人身御供か。

という事はこのチビツ子神様、元は人間の少女だったわけだ。それが“魂喰い”とやらのせいで生贄として捧げられてしまったのか。

おそらく神社が崩壊してから聞こえてくる女の声というのも彼女

のものだったのだろう。

「ちなみにその“魂喰い”ってのはどういつ？」

『うむ……今から1200年ほど前になるかの。その頃はこの国にもまだ神も魔物もそこいら中に溢れておった。わしは秋月の家に生まれた巫女でな。禍祓いを生業とする家系じゃったが、あるとき一族の者から裏切り者が現れたのだ』

「裏切り者……」

『その者は禍祓いとしての使命を忘れ、魔物を自らの内に取り込み、他者の命を喰らい続ける事で仮初めの不死を手に入れた愚か者よ』

「それが……“魂喰い”か」

裏切りなどどこにでもありふれた話ではあるが、やはり聞いていて気持ちのいいものではなかった。

しかしマズいな。そんなものが表にできればエライ事になる。言ってみれば日本版の吸血鬼のようなものだ。“魂喰い”という名前からして、血ではなく魂を糧にしているのだろうか。

『わしは一族の中でも特に力が強く、また未だ乙女であったが故に人身御供として選ばれたのだ』

なんてもつたいない……こんな可愛いのに。あと2、3年もすれば誰もが放っておかなかつたであろう美少女だ。しかも処女。

佐夜姉えたちもそうだけど、秋月の家って美形の一族なのかな。

『じゃが封印の社も壊れ、もうじきわしの力も　　む、いかん
！！』

話の途中で突然咲夜の表情が強張り、一瞬その姿が揺らぐ。

「咲夜？」

「どうしたんですか……？」

『ぐ……う……なに、を……このまま、では……！？』

胸を押さえて苦しみだす咲夜。一体何が起こっている……？

『う………あ、あああああっ！？』

「咲夜っ！？」

びくん、と大きく体を震わせてその場に崩れ落ちる咲夜。

「咲夜、様……一体……？」

佐夜姉えは不安げに問いかけるが咲夜の耳には届いていないのか、
まるで反応がない。

『馬鹿な、封が解けるまでにはまだ幾ばくかの猶予があったはず……
…力づくで振り解いたというのか……！？』

咲夜はあらぬ方向を見つめ、呆然と呟く。

「おい咲夜……咲夜！」

少し大きな声で名前を呼ぶと、はっとしてこちらを見る。

『……拙いぞ。“魂喰い”の封が解けた』

ああ、そんな事だろうと思ったよ。

これだから神になんか関わるのは嫌なんだ。連中、悪気があるうとなかるうと厄介事しか持ち込まねえ。

そしてこういう場合、なぜか災厄は俺の方に降りかかる。

『奴め、わしを取り込んで封印を完全に消し去る腹積もりのようじや。こちらに向かってきておるぞ！』

ほら来た。やっぱり来た。

俺は平穩に、慎ましく暮らしていただけなのに、何でも厄介事に見舞われるのか。

「ど、どうするんですか！ そんな怪物どうやって……!!」

『わ、わしに訊くな！ そもそもお主らが社を壊れたまま放ったらかしにしなければこんな事には……!!』

すっかり取り乱した佐夜姉えと咲夜が言い争いを始める。

「あー、はいはいストップ。二人とも喧嘩は後にしろ。とりあえず家の中だと他の連中を巻き込む事になりかねん。境内に出るぞ」

二人を促し外に出る。かなみは熟睡中。翔子もひなたを客間に連れて行ってそのまま一緒に寝てしまったか？

仕方ない。寝た子が起きる前にとっとカタをつけてしまおうか。

軒先貸して母屋取られる・3

佐夜姉えと咲夜を伴って境内へ。

夜の境内には街灯もなく真っ暗な闇が広がっている。今は隣にいる咲夜がほんのり光を放っているのだからなんとなく見渡せるが、そんなか弱い光では到底闇を払うには至らない。

“魂喰い”が現れるまでの時間を使い、咲夜には人除けと遮音の結界を布いてもらう。これで境内の外にいる人間に気付かれる恐れはないだろう。

『それで、一体どうするつもりじゃ。言っておくがわしにはもうほとんど力など残っておらんぞ』

「雷牙さん……」

「まあ、何とかしてみるさ」

とりあえず相手を見てからじゃないと動きようがない。ひとまずは“魂喰い”待ちである。

テンションが一気にレッドゾーンを振り切り、抑えきれなくなった
殺意がじわじわと俺の心を黒く染め上げてゆく。

肉片一つ残さず消し炭にしてやらねば気が済まなかった。

『“魂喰い”……………』

……………サク、ク……………ヤ……………

『っ……………来るな！！』

名を呼ばれ、咲夜の顔が歪む。

“魂喰い”は元は秋月の一族だという。咲夜とも面識があったの
かも知れない。

……………サク……………ヤ……………

『やめ、ろ……………もう、やめてくれ……………』

名を呼びながらゆっくりと近付いてくる“魂喰い”に、咲夜は怯
えたように後退りする。

……………サク、ヤ……………

『やめろ……………』

サクヤ……………サクヤアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！

『やめろおおおおおおおッ！！……………』

言いながら、咲夜を背に“魂喰い”と向かい合う。

……………グルルルル……………

先ほど腕を斬り落とされて警戒しているのか、じりじりと後退る。

……………オオオオオオオオオオオオオオ……………

“魂喰い”の体が怪しく光りだした。やがて斬り落とされた腕が泡立ち、有り得ないスピードで再生してゆく。

「む……………」

「な……………ツ!？」

『……………あれが、“魂喰い”の能力。周囲の命を喰らって得た仮初めの不死じゃ』

見れば周囲の木々や草花が異常な速度で枯れ始めている。

なるほど……………つまり命あるものならば何でも捕食対象というわけか。

俺自身は呪符の守りがあるからいいが、佐夜姉えや咲夜はそうもいかない。早めに勝負を決めてしまわねば彼女らも『捕食』の影響を受けるだろう。

『こちらの事は大丈夫じゃ！ 気にせず戦え!!』

咲夜の声に、視線をそちらへ向ける。

相変わらずの能天気な声に脱力する。正直相手をすると疲れるんだが。

ぶー、またそんなつれないこと言うー。女の子には優しくして教わらなかつたのー？

知るか。いいからさっさと出て来い。

もー、せっかちななあ。分かりましたー、あとで誉めてくださいよ？

さて。『彼女』の承認も得たし、これで準備はオツケー。行くか。

前方の空間が光りだす。俺は光の中に右手を突き入れ、『ソレ』をしつかりと掴み一気に引き抜いた。

「 限定解除。第一解放 『十握剣・天羽々斬』！！！！」

光が集束し、全貌が明らかになる。

身の丈程もある刀身。輝く美しい刃はしかし、その刃先が一部欠けている。一見すれば無骨に見える鉄塊だが、その存在感は他を圧倒する。

十握剣・天羽々斬^{トツカノツルギ・アメノハバキリ}。俺は『羽霧』と呼んでいるが、元は伊邪那岐^{イザナギ}の佩刀にして、後に素戔嗚が用いて八岐大蛇を斬り殺した神剣がその正体だ。^{スサノオ ヤマトノオロチ}

刃先が欠けているのは大蛇の尾を切り裂いた時に現れた天叢雲剣^{アメノムラクモノツルギ}

に当たってしまった為である。そのせいで本来の能力の10分の1程度しか発揮できないらしいが、それでも人間レベルには過ぎた代物だ。

突如として現れた大剣に“魂喰い”の動きが止まった。

警戒しているのか、姿勢を低くして身構える。

知った事か。もはや一秒たりともその存在に我慢がならない。今すぐ滅ぼしてやる。

大地を蹴り、地面を這うようにして肩口から奴の懐へ飛び込む。

奴が俺を叩き潰さんと腕を振り上げる。が、遅い。地摺りの体勢から巻き上げるようにして羽霧を跳ね上げる。奴の背後に飛び抜ける際、ついでに胴へもう一太刀。

ギイイイイイイイイイイイイツツ!!!!!!

“魂喰い”の両腕両脚が落ち、胴が両断される。まだまだ。この程度ではすぐに再生してしまうだろう。奴を殺すなら再生が追いつかないほど徹底的に。一切の慈悲なく、一切の容赦なく。肉の一片すら残さず焼き尽くす。

俺は背後の鳥居に向かって跳び上がる。“魂喰い”はまだ動けない。

鳥居を足場にしてもう一段ジャンプ。20メートルほど上空に跳躍した俺は奴の倒れている場所を見据えると一瞬だけ力を解放する。刀身が白く輝き、バチバチと帯電を始める。

佐夜姉えと咲夜の位置を確認する。大丈夫だ、範囲を絞れば巻き込む事はないだろう。

「雷光　おっ、一閃ツツ!!」

力を解き放つ。もはや刀身は猛り狂う稲妻そのものだ。

「『鳴神　」

裁きの雷。一切を浄化する白い光と化して奴の頭上へと落ちる。

「　建御雷』ツツ!!!!」

刀身を振り下ろす。

ツツツツ!!

断末魔の声すら届かない。全てを白く染め上げ、消し去ってゆく。

その時。

ありがとう　とう　咲　夜を　頼
む

最期に、そんな声が聞こえた気がした。

『っ……………兄様っ！！！！』

駆け寄る咲夜。兄であったモノはすでになく。そこにはブスブスと煙を上げる黒い塊があるだけだ。

ああ　　アレは咲夜の兄だったのか。

今さらながらに納得する。だからといって後悔する気も、許しを請う気もさらさらないが。

「あ……………あ……………」

震える佐夜姉え。やはりショックが大きかったか。

怯えさせてしまった事は申し訳ないと思うが、俺には結局こういうやり方しか選べないんだ。

消し炭になった兄の元で泣き崩れる咲夜と、その光景を震えながら見つめる佐夜姉え。二人を残して境内を後にする。

いいんですかー？ ほっといて。

羽霧が何か言ってる。無視無視。

ちよっ、らー君、無視しないで！ おねーちゃん寂しい！

黙れ駄剣。

酷いー。おねーちゃんの事愛してないの？

刃物に性的興味はない！

くすん。私との事は遊びだったのね。

……。ああ、そうか。いつまでも出しっ放しにしてるから黙らないんだな。

あれ？ ちょっと、らー君？ 待って待って。せっかく出てきたのに……………

羽霧を手放す。刀身が光になって霧散すると同時に頭の中に鳴り響く能天気な少女（？）の声途絶えた。

いや、邪険に扱ってはいたが別に羽霧が嫌いなわけではない。むしろ大好きだ。だが、基本的に戦闘パートでしか出番のなさそうな存在だというのにあの能天気な言動は場にそぐわないにも程がある。

俺の数少ないシリアスシーンのためにも極力使わずにいこうと思っただ。

や、ホントに好きなんだよ？

自室にたどり着いた途端、糸が切れたかのようにベッドへと倒れ込む。体調は最悪。ぐるんぐるんと世界が回っている。

「あー……気持ち悪……」

これは2、3日寝込む事になるかな。

いやいやまったく。たった一発大技出したくらいでこれとは情けない。

こみ上げてくる吐き気と強烈な眩暈をこらえて今回のリバウンドを冷静に分析する。

発熱、及び内臓機能低下。内部の出血はなし。代謝機能フル回転中。復旧には数日間かかると思われる。

……この程度なら御の字か。『鳴神・建御雷』はかなり消費の激しい技ではあるが、使用魔力のほとんどを羽霧が肩代わりしてくれたおかげでこちらの負担は微々たるものだ。

『のう、寝ておるのか……？』

後ろから声がかかる。視線だけそちらに向けると咲夜が所在無げに立っていた。

「なんだ、咲夜か……どこから入った？」

『わしは実体を持たぬでな。壁なぞすり抜けてしまえば良い』

「そうか………」

『どこか、悪いのか……？』

ベッドに臥せったまま動こうとしない俺を見て、咲夜が心配そうに声を上げる。

「咲夜が気にする事じゃないよ。それより何か用か……？」

『少し見せてみる』

咲夜は俺の言葉には答えず、ベッドに腰掛けて俺の背中に手を当てる。

背中がほんのり温かい。幽霊みたいなものなのにこうして触れられるのも変な感じだが。

『っ……！ これは……！？』

俺の体の状態に気付いたか、咲夜が驚いている。

『お主……一体、どうなっておる……』

有り得ない、と呟く咲夜。

「見ての通りだよ……まあ、そんな事はどつでもいいんだ」

『良いわけがなかるうっ！ お主……このままでは死ぬぞ』

「ああ、分かってるよ。しかしまあこんな体でも5年間やってこれたんだ、まだしばらくは保つさ」

咲夜が驚くのも無理はない。

こつ見えても俺の体、5年ほど前にあつた大きな戦いでかなりガタが来ている。右脚を捻じ切られ、左眼を抉り出され、内臓や骨格にもかなりの打撃を受けた。

本来ならば死んでいてもおかしくないほどの損傷だったのだが、残った魔力を総動員して無理やり繋ぎ合わせ、何とか命をとどめているに過ぎない。ちなみに、右脚と左眼はどうにもならなかったので諦め、今は義肢で何とか誤魔化している。

それ故、先ほどのように術を使って魔力を使用してしまうと体内のバランスが崩れてこつという事になるわけだ。

なので、今の俺には全盛期のような無茶はできない。過去に作り溜めしておいた呪符と羽霧のおかげでそれなりに戦えるから魔力なしでも差し当たって困る事はないのだが。

「みんなには内緒な……」

『……しかし……』

「今さらどつしようもないからな。わざわざ混乱させる必要もない

だろう……」

『……………分かった』

渋々頷く咲夜。

「まあ……………それはともかくだ。何か用があったんじゃないのか？」

『む……………それは……………』

「恨み言なら手早く頼む。こつして意識を保つのも疲れるんだ……………」

正直、ヤバい。気を抜くと意識が飛びそうだ。

『……………いや、恨み言などではない。わしはお主に礼を言いに来たのよ』

「礼……………？」

お前の兄を殺したのは俺なのに？

その目を見るも、俺への憎悪の色はない。憑き物が落ちたようにとても透き通った瞳の色。悲しそうな、嬉しそうな。そんな、深い、深い想いを湛えた黒瞳。

見ていられない。俺を憎めばいいものを。泣き、喚いて俺を罵ればいいものを。それは残された者の当然の権利だ。

『お主、名は？』

咲夜が問う。そういえば名乗っていなかったか。

「相、馬……雷牙……」

『では雷牙よ。天宮神社が氏神として汝に感謝を。よくぞ“魂喰い”を止めてくれた。よくぞ我が兄、秋月蒼詠を止めてくれた。わしに出来る事ならば何でもしてやろう。何か望みはあるか？』

そう言っただけ俺を見つめる咲夜。その瞳はとても穏やかで。そこには神としての美しさがあった。

だから、望みがあるなら一つだけ。

「笑ってくれ。悲しみを押し隠すためでなく。痛みをこらえるためでなく。今すぐでなくていい。泣きたいだけ泣いて、気が済んだらその時にでも」

だから、神様。今まで奪われるだけだったあなたにも、いつか心から笑える日が訪れますように。

『……………あ……………』

ほろり、と涙が一筋頬をつたう。

それでいい。痛いなら痛い、悲しいなら悲しいでいいんだ。そんなもの、無理やり抑え込む必要なんてないんだから。

咲夜は自分が泣いている事に驚いているようだ。涙は止まらず、溢れ続ける。

その姿をもう少し見ていたかったけれど、そろそろ限界だ。

幽霊でも涙は出るんだな、なんて間の抜けた事を考えながら俺は意識を手放した。

「……………ん……………」

目を覚ます。

がしがしと頭を掻きながら身を起こし、体調を確かめる。

……………ほぼ平熱。内臓機能正常稼働。若干の頭痛と眩暈はあれど許容範囲内。日常生活を送るに支障なし、と。

「よしっ」

ベッドから立ち上がる。携帯を確認すると、あれから2日ほど眠っていたようだ。

ぐうう。

体が食事を求めて自己主張を始めたのでキッチンへ。

ちなみに相馬御殿には旅館であった頃の名残で大食堂がある。先日の歓迎会もここで行ったわけだが。しかし俺は長らく独り暮らしであったため、いちいち食堂に行くのが面倒になって自室にキッチンを作ってしまったのだ。風呂、トイレについても右に同じ。なので、俺の部屋には生活に必要な全てが揃っている。

閑話休題。

さて、朝飯朝飯。体調が万全ではないので今日は簡単に済ませよう。

食パンを半分に切ってマヨネーズと辛子を少々塗っておく。適当にレタスを2、3枚とスライスハム、卵を焼いて乗せる。トマト…は、切らしているみたいだな。

要するにハムタマサンド。濃いめのブラックコーヒーも淹れて部屋の中央に置いてあるちゃぶ台へ。テレビをつけると特に興味もない芸能人のスキャンダルが報道されている。

さて、それでは……

「いただきます」

『雷牙っ！ 起きておるのかっ!?!?』

ばたーんっ、と激しくドアを開けながら咲夜が入ってきた。

おーい、お前壁抜けできるんじゃないのか。

『やっと起きたか。まったく、いつまでたっても起きてこぬから佐夜子が案じておったぞ』

「ふむ……?」

佐夜姉えが? そりゃ悪い事をしたな。あとで謝っておこう。

『それで、もう起きても平気なのか……?』

「んー、咲夜も心配してくれたのか?」

『ば、ばか! ベ、別に心配なんかしてないんだからねっ!?!』

……なぜかツンデレになっていた。

「……………」

『ん、なんじゃ間違っておったか? こうすれば喜ぶとかなみが言っておったのだが』

アイツかよ! 神様に何仕込んでくれちゃってんの!?

見ると、部屋の入り口から秋月一家+かなみがこちらの様子を覗き見ていた。

「おおい、そこ何やってる。入るならさっさと入れ」

気まずそうにそろそろと入ってくる一同。

俺はにっこり笑って、

「かなみ。正座」

即座に正座するかなみ。というか土下座している。

「すみませんっしたー！」

「なんで咲夜にいらん事吹き込んだ？」

「い、いやあ。だって咲夜ちゃん可愛かったから、つい」

えへへ、と愛想笑いを浮かべる。

「……へえ？」

笑顔は崩さず、声のトーンを下げる俺。

「ひ！」

がたがたぶるぶる。

小動物のように怯えるかなみ。

「ま、まあまあ。かなみちゃんも悪気があったわけじゃなし、その
辺で」

翔子が仲裁に入る。甘いな、コイツは絶対反省なんかしてやがら
ねえ。

「翔子ちゃん。雷牙が、雷牙がいーぢーめーるー」

「よしよし、怖かったねー」

翔子に抱きつき、すんすんと泣くかなみ。頭を撫でつつそれを慰める翔子。

かなみ、年上の自覚はないのか。そして俺の朝飯をつまみ食うな。

「で、みんな咲夜の事はもう知ってるんだな」

かなみにチョークスリーパーをかけながら強引に話を進める。

うにゅー、と苦しそうにしながらもサンドイッチを食べる手が止まらないのはどうなっているのか。

『うむ、お主が眠りこけておる間にの。あらかたの説明は済んでおるわい』

「“魂喰い”の事も？」

『無論じゃ。そこが今回の肝じゃからな』

ふむ、確かに。

「話は分かった。で、咲夜はこれからどうするんだ？」

『ん？ どう、とは？』

「咲夜は元々“魂喰い”を鎮めるために天宮神社に奉ぜられていたわけだろ？ “魂喰い”がいなくなっただからもう自由にできる

んじゃないのか？」

成仏するとか。転生するとか。

『何を言っかと思えば。お主、自分で言った言葉を忘れたのか？』

「ん？　なんか言ったっけ、俺？」

よく覚えてないけど。

『まったく、まだ寝ぼけておるのか。わしははっきり覚えておるぞ。あの夜、お主がくれた熱い言葉を……』

ほう、と顔を赤らめながらため息をつく咲夜。

ぴし。

あ、なんか空間が凍りついた。

「雷牙？　何かな、『あの夜』って」

笑顔のかなみ。でもなんかドス黒いオーラが滲み出ている。

「ちょっと詳しく聞かせてもらおうか、雷牙君？」

翔子。なぜか般若の背後霊が見えるのは気のせいかな？

「これはてっていついきゅーすべきですねえ」

てっていついきゅー？　……徹底追及！？　意味分かって言っ

るのかひなた!?

「あらあら……」

苦笑する佐夜姉え。笑ってないで助けて!

「待て待て、何の事だ! 俺にはお前の言ってる事がさっぱり分からない!」

『何を言う。』キミに泣いてる顔は似合わない。笑っておくれよマイハニー』と、わしに愛の告白をしておったではないか』

「言っつてねえええ!! 勝手に脳内で都合の良いように変換するな!」

マイハニーとか。死んでも言うか。

あれ? でも内容的にはあってるのか? なんとなく気を失う前にそんな事を言ったような気もする。いや、でも愛の告白じゃないぞ。断じて。

あ、やめてみんな。そんな白い目で見ないで。違うよ? 本当に。

『その告白、謹んで受け入れよう。これから末永く、よしなに頼むぞ旦那様』

「馬鹿なっ!?!」

旦那様って。急展開すぎる!

「へえ〜……良かったじゃない。こんな可愛らしいお嫁さんができて」

凍りつくかと思うほど冷たいかなみの声。その素敵な笑顔が怖いです。

「でも意外。雷牙君って小さい子が好みだったんだ」

汚物でも見るような目で翔子が言う。

誤解だ！ 俺はロリコンじゃない！

………ない、よ？ たぶん。

「ひなたには5メートル以上距離を取ってくださいね？」

佐夜姉え！？ 待って、見捨てないで！

「……？ どういう意味ですか？」

意味が分からずきよとん、としているひなた。

キミは知らなくていい事です！

『まあ気にするな。お互い少しずつ理解してゆけば良い。夫婦めおととい
うのはそういうものじゃて』

「気にするわ！ っていうか、何だ夫婦って！？ 勝手に嫁の座に
納まるなー！」

『ふふふ、ウチの旦那様は照れ屋なのじゃな。案ずるな、わしは尽

くす質おなじの女子じゃぞ?』

やめてー。恋する乙女の目で見ないでー。

咲夜は可愛いし、割と好きな部類に入るけど。

ロリコンだとかそんな問題も後回しにしたとして……幽霊だからね……!!

幽霊を嫁にもらうとか、どんなネクロフィリアですか?

もう耐えられない。誰か、誰か

「たーすけてー!!! ドラ モー……ん……!!!」

俺の悲鳴が響き渡る。

結局我が家の居候は5人(幽霊含む)に。誰か俺の平穏な日常を返して。

やっぱり神様なんてロクなもんじゃねえ。

第1章「軒先貸して母屋取られる」〜終〜

軒先貸して母屋取られる・3 (後書き)

相馬さん家のヒエラルキー (第1章終了時点)。

1：秋月咲夜

氏神様。嫁？

2：秋月佐夜子

従姉。佐夜姉え。

3：関谷かなみ

幼馴染。縞パン(緑)。

4：秋月翔子

従妹。しよこたん。

5：相馬雷牙

主人公。家主。

6：秋月ひなた

チビツ子。

ここではヒエラルキー⇨階級序列の意味で使っています。つまり、
『

相馬さん家の階級序列^{ヒエラルキー}』なわけですね。

で、第1章終了時点での相馬家序列。主人公……（泣）。

さて、第1章も終了したところで更新ペース落とします。まあ仕事の忙しさと、気分とテンション次第？ あんまり期待はしないで下さいな。

燃える瞳の萌える妹・1 (前書き)

or z 今月は決算期。仕事忙しいのですよ。なかなか続きが書けない……

燃える瞳の萌える妹・1

第2章「燃える瞳の萌える妹」

秋月シスターズとかなみ + 神様（嫁）がウチに来て一ヶ月。

翔子とひなたの転校手続きも済み、新しい学校で二学期を迎えた。
そんな九月も半ばのある日。

『ソレ』は唐突にやってきた。

「お兄ちゃんっ」

.....はい？

「誰？」

突然ウチに訪ねてきたその少女は俺を見るなり『お兄ちゃん』と呼んだ。

.....俺？

『ほう、旦那様に妹御がおったとは初耳じゃのう。何故今まで黙っておった？』

「いや、黙ってたわけじゃないぞ。これっぽっちも心当たりがない」

うん。間違いなく記憶にない。

「でも雷牙さんに心当たりがないのならこの子は一体誰なんでしょうか？」

「まさか、余所様の子に『お兄ちゃん』と呼ばせる趣味が……？」

かなみ、お前それはあんまり洒落になってないぞ。

とりあえず俺を兄と呼ぶ少女を観察してみる。

年の頃は15、16歳くらい。栗色の長い髪をポニーテールにまとめた活発そうな雰囲気少女だ。

七分袖のシャツの上に丈の短いワンピーススカート、下にはレギンスを穿いている。レギンスって最近流行ってるのか？ うん、まあ似合っただけなんでもいいよ。

顔立ちはあまり俺とは似ていない。兄妹なんて何かの間違いじゃなからうか？

「うーん……考えても分からんから単刀直入に訊くけども、君は一体どこの誰だ？」

「小鳥遊 祭里【たかなし まつり】、お兄ちゃんの妹ですっ」

少女は祭里というらしい。でも小鳥遊の姓に聞き覚えはない。

「んー、小鳥遊……小鳥遊……？」

「心当たりは？」

「むー、やっぱりないですね……そもそも、君はなんで俺が兄だと知っているのか？」

俺ですら記憶にないのに。

「えーっと、確かこの辺に……と、あったあった」

なにやらカバンの中をゴソゴソと漁り始める。と、一通の封筒を取り出しこちらに渡してきた。

「ん、これは……？」

少女から封筒を受け取り、中に入っていた手紙を開く。

祭里ちゃんへ。

えーと、なんかごめんねー？ おかーさん駄目だ。もう駄目だわー。おとーさんも死んじゃったし、祭里ちゃん一人だけ残して逝くのも心配なんだけど………ごめん、無理！ さすがのおかーさんも病気には勝てそうもありません（・・・・・）

祭里ちゃんには悪いけどおかーさん先に逝きますww

でもね、安心して。そんな一人ぼつちな祭里ちゃんに大ニユース！ なんと祭里ちゃんには血を分けた実のおにーちゃんがいるの！

え、なんで今まで黙ってたかって？ だってそんなの恥ずかしいじゃない？ 「おかーさん実はバツイチでした」なんて言われても祭里ちゃんだって困るよね？

ん、そんなわけで後の事は雷牙くん任せます。あ、雷牙くんっていうのはおにーちゃんの名前ね。相馬雷牙。S県T市の相馬神社ってところに行けば会えるから。……多分？ 雷牙くんに会えたらこの手紙見せてあげてね！。

やほー、雷牙くーん。元気してるー？ そういうわけだから祭里ちゃんの事よろしくねー。おかーさんの分も可愛がつてあげて。あ、でもいくら可愛いからって手え出しちゃ駄・目・だ・ぞ

ぢゃ、おかーさん逝くから兄妹仲良く！

P・S・

雷牙くんのファーストキスの相手はおかーさんでした。キャッ／／／

小鳥遊初江おかーさんより 三

.....。

「……………母さん軽い！」

娘に宛てた遺言書がこれって！ いや確かにこういう人だったけれども！

つか、追伸いらねえ！ 一体なんのカミングアウトだよ！？

「……………orz」

がつくりと膝をつく俺。

「え、と。お兄ちゃん……………で、いいんだよね」

「ん？ ああ……………どうやらそうらしい、な……………」

なんかもうどうでもいいや。母さんの手紙に……………そり体力を奪われた……………。

『良かったら説明してもらえんかの？ さつきから蚊帳の外でさっぱりじゃ』

咲夜の言葉に先ほどから置いてきぼりだった皆がうんうんと頷く。

それを不思議そうに見つめる祭里。

「えーと、さつきから気になってたんだけどあの半透明の女の子は……………」

半透明な子って。

「ああ、まあ、なんと云うか……」

『嫁じゃー!』

その薄べったい胸を張って堂々と宣言する咲夜。

馬鹿じゃないのこの子？

「嫁……?」

祭里は怪訝そうに眉をひそめてこちらを見る。心なしかジト目で睨まれているような。

や、待ちなさい。兄はロリコンではないよ? 多分。

「まあ、馬鹿の言う事は放っておいて」

『む……』

「この子の事はあんまり気にしないでいい。俺にくっ憑いてる幽霊みたいなもんだ」

ちなみに誤字にあらず。

『幽霊ではない。嫁じゃと云うに』

「自称、な」

『照れずとも良い。女子を愛おしく思つのは恥ずかしい事ではないぞ?』

いや、別に照れ隠しで言ってるわけじゃないんだが。

「はあ〜……幽霊とか初めて見た」

驚きつつも納得する祭里。特に怖がる気配もない。

順応が早いのか、細かい事は気にしない性質なのか。あるいは相馬の血を引いているだけあって怪奇現象の類に心当たりがあるのかも知れぬ。……いや、まあ咲夜は半透明なだけで見た目はただの可愛らしい女の子なので怖がる要素がないというだけの話かも知れないが。

「んで、こつちのお姉さんが父方の従姉で秋月佐夜子さん。隣がその妹の翔子。このチビツ子が佐夜子さんの娘でひなた。で、これが友人代表A子さん」

「待てい、なんだA子さんって」

すかさずツッコむかなみ……もとい、A子さん。

「えー、お前もうA子でいいよ。っていうかA子じゃなかったっけ？」

「違うよ！ 何勝手に人を背景キャラみたいに言ってるの!？」

面倒だなあ。いつそもう改名すればいいのに。

「まあ背景キャラみたいっていうか背景だろ？ お前だけCGないし」

「みんなだつてないじゃん！」

「いやいや、よく見てみなさいよ。お前以外はちゃんと立ち絵表示されてるだろ？」

「え？ 嘘、どー！？」

慌ててきよろきよろと周りを見回すかなみ。

「ま、嘘だけど」

「騙された！」

騙されるお前もお前だよな。

「あの、お兄ちゃん？」

かなみを弄って遊んでいると祭里がおずおずと声をかけてくる。おっと、あんまり楽しかったもんだからつい祭里の方を放置してしまった。

「む……悪い、脱線したな。こっちは関谷かなみ。まあ言ってみれば幼馴染というやつだ」

「よろしくね、祭里ちゃん。私の事はかなみちゃんと呼ぶように」

「えと、よろしくお願いします。かなみさ……かなみちゃん」

ぺこり、と頭を下げる祭里。

うむ、素直ないい子だ。なんとなく手を伸ばし頭を撫でてみる。

「ん……………」

恥ずかしそうに頬を染めるが、嫌がっているわけではなさそうだ。

………… やばい、超可愛い。シスコンになったらどうしよう。

「はいはい、セクハラ禁止ー」

しばらくほんわかしているとかなみから横槍が入る。

「失敬な。この程度のスキンシップがセクハラになるものか」

「いやいや、最近は何がきっかけで訴えられるか分からないよー？」

にやり、と嫌な笑みを浮かべて釘を刺すかなみ。

むう………… 妹にセクハラ兄貴と呼ばれるのは嫌だなあ。

「…………で？ いい加減説明してもらわないとこっちはさっぱりなんだけど」

兄妹の距離感について悩んでいると、翔子が痺れを切らしたかのように説明を求めてくる。

「んー、どう説明したものやら…………」

だって俺自身、妹がいたなんて初耳だし。

どこから話せばいいのか。どこまで話せばいいのか。

「そうだなー、まず相馬の家について説明しておこうか」

皆なんとなくは知っているだろうが、我が家の家庭事情というものを一度ちゃんと話しておいた方がいいだろうと考え、俺は『相馬』について語り始めた。

相馬神社。

古くから続く退魔師の家系。現代においてもまだ蔓延る『魔』を祓う事を生業とする禍祓いの一族。千年を超える歴史を持ち、退魔の力を嘗々と受け継いできた現代社会における異端。それなりに由緒ある家系で、『その筋』にはそこそこの発言力を持っている……らしい。

俺も子供の頃から父にその手の知識や戦闘技術を徹底的に叩き込まれ、相馬の当主として退魔の仕事を請け負ってきた。

「……母さんはそれを受け入れる事ができなかつたんだな。俺が五歳の頃に親父と離婚して出て行つたよ。俺も子供の頃の話なんで祭りの事は良く覚えてなかつたけど」

母さんは何の力もない普通の人間だった。普通の人間にとって、魔術やら呪術やらの御伽噺のような存在を受け入れるのは容易では

ない。自分の子供がそんな殺し殺される危険な世界に足を踏み入れるのを容認できなかったのだろうと親父は語っていた。

そういえばいつだったか……親父と母さんのどちらかを選ぶ、なんて事を訊かれた事があつた気がする。俺はそれになんと答えたのか。今となつてはもう思い出せないけれど、こうして今ここにいるという事は親父……いや、相馬の家を選んだという事なのだろう。

「……………」

祭里は難しい顔で考え込んでいる。やはり突拍子もない話だったろうか？

「祭里？」

「……………ねえ、お兄ちゃん」

「ん？」

「相馬の家が普通じゃないっていうんなら、あたしも普通の人間じゃない、のかな…………？」

なにやら真剣に思い悩んでいる様子の祭里が不安げな声を上げる。

でも何故普通の家庭で育つたはずの祭里がそんな事を言い出すのかが分からない。他のみんなもどう反応していいか分からず口をつ

ぐんで様子を窺っている。

「なんでそんな風に思っただ？」

「……お兄ちゃんは普通の人間じゃないんだよね」

「ん？ ああ、まあ、そうだな」

その質問は『普通』、の意味によっても変わってくるが……いや、
どついう意味だとしても俺が普通というのはありえない話か。

「その、魔術が使えるんだよね？」

「今はほとんど使えないけどな。魔力を使うと反動で体調を崩す事になる」

とりあえずそう説明しておく。実際はもう棺桶に片足突っ込んで
るような状態だから体調を崩す、という表現はいささか語弊がある
けれど。

「……？ 魔術ってそんな危険なものなの？」

「いや、俺の場合は色々と事情があつてそうなっているだけだ。言
つてみればちょっとした呪いだな。だから俺は魔術師としては欠陥
品なのさ」

『……………っ』

俺の事情を知っている咲夜がわずかに眉をひそめる。

嘘は言っていないよな、うん。しかしなんで祭里はそんな事を聞き
たがるのか。その真意を図りかねて首を傾げる。

「……………祭里？」

「……………ちよつと見て」

意を決したように顔を上げる祭里。メモ用紙を一枚取り出すと、
それをじつと見つめる。

「……………？」

何が始まったのか、と全員がメモ用紙を注視する。

しばらくそうしていると祭里の瞳の色が鮮やかな紅へと変わり

ぼんつ。

突如としてメモ用紙が燃え上がった。

『「「「「つ！？」」「」「」』

何が起こったのか理解できずに驚く女性陣。

「……………」

気まずそうに目を伏せる祭里。

「……………ふむ。 バイロキネシス 発火能力か」

「……驚かないの？」

「んー、別に？ 確かに普通じゃないけどそんなに珍しい能力ってわけでもないし」

実際、発火能力はフィクションの世界でもよく取り上げられる題材だ。今さら驚くに値するものでもないだろう。

「だね。まあそういう事もあるでしょ、気にしない気にしない」

とかなみが続く。

『うむ。神たる我が身に比べれば、少々の異能なぞ取るに足りない瑣末事よ』

咲夜……さりげなく自分の方が凄いいみたいな事言ってるじゃねえよ。

「まあ、この家が非常識なのは今に始まった事じゃないしね」

何気に失礼な事を言う翔子。

「あらあら」

「まあまあ」

そして何だろつねこの仲良し親子は。

ま、何はともあれ満場一致でWELCOMEって事でOK？

「皆さん……」

「そういうわけだ。気にするな」

短くそう告げると祭里の目尻に涙が浮かぶ。

「あり、がとう……」

涙を拭って微笑む祭里。

うん、やっぱり女の子には笑顔でいてもらいたい。女の子を泣かせる奴はクソだ。つーか、俺の妹を泣かせる奴なんて一秒たりとも生かしておかねえ。

シスコン上等！ 妹が可愛くて何が悪い！！

……ああ、シスコンって認めちゃったよ。

「さて、それじゃあ準備をしないとね」

かなみが立ち上がり宣言する。

「は？ 準備って何の？」

そう言うとかなみはちゃぶ台の上に片足を乗つけてふんぞり返る。

それはお前の決めポーズなのか？ だからスカートでそのポーズやるとパンツ見えるんだって。もうお前パンチラ担当でいいよ。ちなみに今日はピンク。

「決まってるじゃない！ 祭里ちゃんの歓迎会よっ！！」

やっぱり馬鹿はとどまる所を知らないらしい。

というか、ただ飲みたいだけじゃねえの？ このパンチラ馬鹿は。

はい。

始まりました、『小鳥遊祭里 大歓迎会』。

主催：関谷かなみ

協賛：秋月佐夜子、秋月翔子、秋月ひなた

主賓：小鳥遊祭里

雑用：相馬雷牙

……俺、ここの家主なんだよね？ 家主だった気がする。家主…
…だっけ？

なんだろう、ここ最近我が家における俺のヒエラルキーが著しく
低下している気がするんだ。

何はともあれひたすら料理を作っては運び、作っては運ぶ。今回は
佐夜姉えが手伝ってくれたので前ほど忙しくはないけれど。

かなみ……相変わらず飲んだくれてるな。だらしく乱れた服
がはしたない。いい加減お前のパンツは見飽きたよ。

……嘘です、嘘をつきました。君はいつまでもパンチラ担当でい
て下さい。あと、俺以外の男の前ではもうちょっとガードを固めて
下さい。

いつまでもパンチラ鑑賞をしているわけにもいかないのでタオル
ケットを持ってきてかなみの膝の上にかけてやる。

かなみはそれを受け取って「えへ」と嬉しそうに微笑むと、俺
の首に腕を回して隣に座らせる。

「何だよ、絡むなこの酔っ払いめ」

「んふふー、そんな事言っちゃっていいのー？ さっき私のパンツ
見て喜んでたくせにー、このえっち」

そりゃあね、可愛い女の子のパンツが見えてるなら喜んで見ますよ？ だって男の子だもの。

「見えたのは俺の責任じゃないだろ。見られるのが嫌ならもっとうちやんと隠せつての」

さすがに長い付き合いだけあってかなみは俺の視線に気付いていたようだが、他のみんなにはあくまで「見えてしまったんだ」と不可抗力を主張しておく。

……もちろん不可抗力などではなく、ばっちりこの目に焼き付けさせていただきましたが。

「……………雷牙君の、すけべ」

翔子の目が据わっている。俺の主張は却下されたらしい。

『ふむう、旦那様よ。見たいのならわしに言ってくればいつでも見せてやるものを』

と、いきなり脱ぎ始める咲夜。

「待て待て、さっきのは不可抗力だ。別にわざと見ようとしたわけじゃない。あと咲夜、脱がなくていいから帯を解くな。かなみ、酒臭いから絡むな。離れろ」

もう誰からツッコんでいいものやら。っていうか咲夜、あんた平安時代の人なんだからその巫女服の下にパンツなんて穿いてないよね？

背中をさすりつつ、ため息をつく。

「まったく、ちょっとは加減して飲めっつの」

「うにゅ〜〜〜。じ、自分、不器用ですから……」

高 健さんか。ぽっ やなのか。

「ホント、いつまでたつても世話の焼ける奴だよお前は。俺がいなくなったらどうするつもりなんだか」

「ん〜〜？ いなくならなきゃいいじゃん。キミは一生私の面倒を見るのですよ？」

「え、何それ。プロポーズ？」

「んなことーない」

今度はタモ さんかよ。しかも似てねえ！

「キミは私の下僕なので一生私を養う義務があるのです」

「やかましい、だれが下僕か。乳揉むぞ？」

「いやん、優しくしてね／＼／＼」

「駄目だこいつ！ 完全に酔っ払ってやがる！」

「んん〜」

抱きついてすりすり額を擦りつける。猫か。あと、なんか酸っぱい臭いがする。リバーズしたばかりで胃酸の臭いがする女の子に抱きつかれても全くときめかない。

っっていうかズボンを脱がしにかかるなあ！ や、そこはマジでヤバいって、ちよっ、握っちゃ嫌あー！ マイサンがビッグダディに！？

「いやー！ 助けて祭里、翔子、咲夜、佐一夜ー子ーさん！ おーかーさーれーるー！！」

……………結局誰も助けに来てくれませんでした。どいつもこいつも生暖かい目で見守って下さいましたよ畜生。

犯される前に再びかなみ、トイレに駆け込みリバーズ。そしてそのままノックアウト。なんとか貞操は守られました。

くすん…………もうお嬢にいけない。精神的に。

燃える瞳の萌える妹・2

S I D E 『祭里』

酔い潰れたかなみちゃんを抱えてお兄ちゃんが出て行く。

あの二人はとても仲良しだ。幼馴染だって言ってたけど付き合ってるのかな？

「あの、佐夜子さん？」

「はい？ どうしたの、祭里ちゃん？」

この綺麗なお姉さんは秋月佐夜子さん。従姉なのだそうだ。ひなたちゃんのお母さんで、実質この家のみんなの保護者のような立場にいるみたい。宴会の途中で寝てしまったひなたちゃんに膝枕をしながら頭を撫でている。

「お兄ちゃんとかなみちゃんの事ですけど、あの二人って付き合ってるんですか？」

すると佐夜子さんはしばらく考え込み、

「さあ……？ その辺りどうなんですか、咲夜様？」

と隣の少女に話を振る。

『わしに訊かれてものう。本人たちは否定しておったようじゃが？』

咲夜さん……咲夜ちゃん？ 彼女はお兄ちゃんに取り憑いている幽霊だ。元々は佐夜子さんたちのいた神社の氏神様だったらしいのだが神社が倒壊してしまったためにほとんどの力を失い、今は単なる浮遊霊と大差ないのだとか。

あたしの発火能力もそうだけど、この家には割と世間一般で言うところの『普通』が通用しないみたい。幽霊なんて初めて見たけど、別におどろおどろしい外見をしているわけでもなく、夜にしか出て来れないなんて事もないようだ。

「咲夜ちゃんはそれでいいの？ うかうかしていると取られちゃうわよ？」

翔子ちゃん。あたしより一つ年上のもう一人の従姉。一番歳が近いのでこれから仲良くしていきたい。仲良くしてくれるかな。

『ふん、浮気は男の甲斐性よ。その程度の事とやかく言うほど懐の浅い女ではないぞ？』

「へえ〜。でも、浮気じゃなくて本気になっちゃったらどうするの？」

『む……』

少し意地悪を言う翔子ちゃん。でもその気持ちはよく分かる。

ちょっと泣きそうな顔で困っている咲夜ちゃんはとても可愛いのだ。

『そ、そんな事はない！ 旦那様は浮気はしてもわしを捨てたりなどせぬ！』

本当は千年以上も昔の人だというけれど、こうしてうるたえる彼女は見た目相応の少女そのものだ。お兄ちゃんのお嫁さんだと言っているけれど実際はどうなんだろう。お兄ちゃんってロリコンさんなのかな？ あたしとしてはお姉ちゃんと呼ぶなら咲夜ちゃんよりはかなみちゃんの方がいいかなあ。

「まあまあ、それじゃあ雷牙さんが戻ってきたらその辺りをはつきりさせないといけませんね」

佐夜子さん、いじめっ子の目になってる。実はSの人だったのか。お兄ちゃん逃げてー。

『そうじゃ！ 大体、旦那様が嫁たるわしに手もつけずにおるからこんな心配をせねばならんのじゃ！ 今宵こそわしの夫として立場を思い知らせてくれようぞー！』

「そうですねえ。たつぷりと搾り取ってあげるといいですよ」

ああ佐夜子さん、すごく輝いてる。ナニを搾り取るのかは訊かないけれど、またもお兄ちゃんの貞操が大ピンチの予感。でも手を出すも何も、幽霊って触れるのかな？

ちよつと気になったあたしは思わず咲夜ちゃんの頭に手を伸ばし、その感触を確かめる。

「わあ……」

『む………？』

すごい、触れる。咲夜ちゃんの綺麗な黒髪はサラサラでとても撫で心地がいい。

『どうした妹御、いきなりわしの頭なぞ撫でて。なんぞあったか？』

「はっ！ ご、ごめんなさい！ 幽霊って触れるのかなって思ったらしい……」

すぐに頭を下げ謝る。確かにいきなり人の頭を撫でるなんて失礼だったかもしれない。咲夜ちゃんは特に気にする風でもなく、笑って許してくれた。

『ははは、構わぬよ。確かに物珍しいであろうからな。じゃが、わしは少しばかり特別なのじゃよ。幽霊というものは通常実体など持つてはおらぬ。見えもしなければ触れもせぬ。一部の人間を除けばこちらからもあちらからも干渉することの適わぬ、いわば在って無きが如き存在よ。いわゆる心霊現象と呼ばれるもののほとんどは人間の思い込みに過ぎんのじゃ』

そんなものは気のせいだ、と心霊現象そのものである咲夜ちゃんが言う。

それがなんだかおかしくて、思わず笑ってしまった。

咲夜ちゃんもそれに気付いたのか、『わしの言う事ではなかったのう』と気持ちよく笑い飛ばしてくれた。

「ん、なんか盛り上がってるな。面白い事でもあったか？」
と、いつの間にかお兄ちゃんが戻って来ていた。

お兄ちゃん。ここの家主で相馬神社の神主。お母さんの手紙には血のつながった実の兄妹だって書いてあったけれど、あたしとお兄ちゃんはあんまり似ていない。魔術の事はよく分からないけれど、ああ見えて凄腕の魔術師らしい（と咲夜ちゃんが言っていた）。かなみちゃんとの夫婦漫才でなんとなくコメディークャラに見えるけれど、黙っている分にはかなりの美形だと思う。ブラコンになったらどうしよう。

「ああ、雷牙君の本命がかなみちゃんか咲夜ちゃんかで話し合ってたのよ」

翔子ちゃんが意地悪く微笑む。こっちも微妙にSなのか……お兄ちゃん、全力で逃げてー。

「む……本命も何もないだろう。別にどっちとも付き合っていないぞ」

あれ……意外にそっけないなあ。咲夜ちゃん振られた？

『うむ、わしは嫁じゃからの。別に恋人ではないぞ？』

……そういう意味じゃないと思う。

「いや、俺ロリコンの趣味はないから」

『失敬な！ わしはこれでも1200歳の成人女性じゃぞ！』

それはもはや大人とかそういうレベルを完全に超越している。

「いや死んでるし。13歳で時間止まってるだろ」

『わしの時代では13歳で結婚するなど、さして珍しい話でもないぞ?』

なんと。昔の人はみんなロリコンさんでした。

「んな無茶な。現代に平安時代の常識を持ち込むなよ」

『旦那様は……わしの事が嫌いになったのか……?』

おっと、咲夜ちゃん攻める！ 涙目 + 上目遣いでそつと手を握る。

あたしなら一発で撃沈するだろう。なんとという反則級の可愛らしさ！

「や、その、な。別に嫌いとかそういう事じゃないんだが……」

効いている、効いているぞ咲夜ちゃん！

しどろもどろなお兄ちゃん。ここでトドメの一発。

『そう、か……しかし、それは好きでもないという事じゃろう……? わしは……今まで旦那様に迷惑をかけておったのじゃな……』

すつ、と頬を流れる一筋の涙。

「う、ああ、待て、違う。咲夜の事は好きだ、大好きだ！ だから泣くな、泣かないでくれ。女の子に泣かれるのは苦手なんだよ……」

うん。第三者として見ると芝居なのは丸解りなんだけど、実際やられた方はたまったもんじゃないなー、あれ。まさに一撃必殺。女の涙は武器になるのですよ。

『本当、か……』

「ああ……本当だからもう勘弁してくれ……」

咲夜ちゃん、WIN！

「っていつか祭里！ 笑ってないで助けろよ！」

「いや、ごめん。お兄ちゃんは傍から見てる方が面白いから、つい」

佐夜子さんと翔子ちゃんがうんうんと頷いて同意してくれる。

「ひでえ。ここに俺の味方はいないのか……」

がつくりと肩を落とすお兄ちゃん。

いや、味方だよ？ なんていうか、好きな子をいじめたくなる小学生の心理？

ああ、好きって言っちゃったよ。うん、もうあたしブランクでいいや。

『何を言う。わしはいつでも旦那様の味方じゃぞ?』

「お前が何より最大の敵だよ! この疫病神ーっ!」

うわーん、と自分の部屋に逃げ帰るお兄ちゃん。

『ふ。旦那様はツンデレ、というやつなのじゃな』

そこがまた可愛いのがの、とか言いながら悦に入る咲夜ちゃん。

……お兄ちゃんのお受難はまだまだ続きそうだった。

S I D E 『祭里』了

あー、疲れた。

ベッドに倒れ込む。なんだか一気に老けた気がする。

ああ、そういえば宴会の後片付けしてないや。でも今戻ったらまた女性陣に弄られるのは確実だ。もうしばらく時間を置いてからにしよう。

こんこんっ。

ん、ノックの音？ 佐夜姉えかな。

かなみと翔子はノックなんかしないし、咲夜は壁抜けで勝手に入ってくる。ひなたはもう寝てるし、ノックなんてするのは佐夜姉えくらいなものなのだ。

「開いてますよー」

「えっと、お邪魔します」

「ん、祭里？ どうした？」

入ってきたのはマイシスター祭里。

「その、今日はあんまりお兄ちゃんと話できなかったから」

「そっか……………ほい」

とりあえずクッションを渡して座らせると、祭里は落ち着かなさげにそわそわと部屋を見渡す。

「そんなに心配しなくても盗撮なんてしてないぞ？」

「や、そんな心配はしてないから」

「じゃ、盗聴か？」

「何でさっ!？」

いやだってそんなに挙動不審な態度を取られると、ねえ？

「はっ。ま、まさか……………だ、駄目だぞ祭里！俺たちは血の繋がった兄妹なんだっ！」

「それも違うから!？」

祭里は力いっぱいツッコんだ後、盛大にため息をつく。

「もう……………あんまり馬鹿な事ばかり言っていると、バカ兄って呼ぶよ？」

「俺は別にそれでもいいけどね。自覚はあるし」

「あるんだ……………」

そりゃあもう。どこに出しても恥ずかしいお馬鹿さんですよ。

あ、別に勉強ができないって意味じゃないよ？
成績良くても馬鹿な人は馬鹿だし。

大事な事なので二回言います。頭悪くないよ！ 馬鹿だけど！

……どう考えても頭の足りない発言だった。

「それで、どうした？ 何か話があったんじゃないのか？」

「う、ん……………」

「……………」

「……………」

しばらく沈黙が続くがなかなか踏ん切りがつかないらしく、ちらちらとこちらの顔を窺ってはまた目を伏せる。

とはいえ、祭里は知らない土地に来たばかりでいまだ不安を残しているであろう。あまり急かすのもよくない。ここは彼女の心の準備ができるまで根気よく待つ事にしよう。

……………。

……………。

……………。

.....。

.....長っ。

「ごめん無理。なんとも不甲斐ない兄貴で申し訳ないがこれ以上の沈黙に耐えられそうにもありません。悪いがこちらから話し掛けさせてもらおう事にしよう。」

「祭里」

「.....えっ、ひゃい!？」

突然話し掛けられて声が裏返る祭里。焦りすぎ。

「どうだ、ウチに来てみて。やっていけそうか？」

「あ.....うん、そうだね。始めは不安だったけどみんな優しくしてくれるし、なんか安心しちゃった」

「そっか.....みんなちょっと変わってるけどいい子ばかりだからな。すぐに馴染めるさ」

「うん.....あたし、ここに来て良かった」

そう言って微笑む祭里の瞳にはいまだ陰がある。話したい本題は別にあるものの、なかなか切り出すきっかけを掴めないでいるといったところか。

「……………あの、お兄ちゃん、あのね……………」

「……………お前の、発火能力の事か？」

「…っ！」

おそらくはその話をしに来たのだろう。気にするな、とは言ったもののやはり自分の事だけに気になってしまうのは仕方ない。

「母さんは……………その力の事、何て言ってた？」

「……………よくは分からないけど、人前では使わない方がいいって」

「ふむ……………」

まあ、そうなるわな。明らかに人とは一線を画した能力は異物として排斥の対象となる。

「お兄ちゃん……………この力って、何なのかな」

「超能力の事か？」

「……………やっぱりこれ、超能力、なの？」

普通の家庭で育った祭里にはずっと不安だっただろう。他人とは違う自分、意味も分からず異能の力を与えられて混乱しなかったはずもない。

「うむ……………お前のは分類的にはパイロキネシスっていう割と有名な能力だな」

「パイロ、キネシス……」

まあ、睨み付けただけで燃え上がるなんて話は聞いた事ないけど、そういう事もあるんだろうさ。超能力なんてそれこそ人の数だけ種類があるんだから。

「なんであたし、こんな事ができるんだらう……」

「祭里は正式な訓練を受けていないとはいえ、相馬の血を引いているからな。高い魔力資質を持っていたんだらう」

「……？」

俺の言う事が理解できずに首を傾げる祭里。

「んー、つまりな。超能力っていうのは一種の魔力暴走なんだわ。先天的に魔術師として高い資質を持っている人間が体内に溜め込んだ魔力を排出する際に起こる現象が超能力なんだ」

「えー……と……？」

俺も専門分野じゃないので詳しい話はしてやれないけれど、昔得た知識を引っ張り出してできるだけ分かりやすく説明する。

「ん、と。魔術の才能があるのに魔術を知らずに育った人っていうのは、無意識に魔力を精製して体内に溜め込んでいく事がたまにあるんだが、あんまり溜め込みすぎると暴発してしまう危険性があるんだ。だから肉体の防衛反応として、溜め込んだ魔力を何らかの形で体外に排出させようとするんだな」

そしてその魔力は発散する際に何らかの異常現象を引き起こす。それは物理的に破壊力を持ったものであったり、精神に影響を及ぼすものであったり、様々だ。

「それが、超能力？」

「ああ。発散方法は人によって違うけれど、その人間に最も適した方法を体の方で勝手に確立してしまうんだ。お前の場合熱量変換……いや、熱集束なのかな。言ってみれば我流、天然の魔術って事になるか」

「……じゃあ、ちゃんと勉強すればあたしにも魔術が使えるの？」

「無理だな。もう完全に発火能力用の魔力変換システムが出来上がってる。今から別の魔術を教えても大した力は出せないよ」

まあ炎の魔術に限って言えば、ちゃんと勉強すればそれなりのものを身につけられるだろうけどそれは黙っておく。わざわざ異端の側に引き込むつもりもない。

「そっか……」

「ん、もしかして魔術師になりたかったのか？」

「や、そうじゃないけど。お兄ちゃんが魔術師だって聞いてどんなのかちよつと気になっただけ」

「ま、やめとけ。ロクなもんじゃないから」

俺の魔術は敵を殺すためだけのものだからな。たとえ発火能力の事がなくとも教えるつもりなどなかった。

「ねえお兄ちゃん……あたし、これからどうすればいいのかな……」

不安げに呟く祭里に肩をすくめてみせる。

「好きにすればいいさ」

「え？」

「やりたいようにやれ。まあ母さんの言った通り、あんまり目立たない方がいいのは確かだけどな。でもその力が必要だと思うなら迷わず使え。もしそれでどこかから文句でも言われたら俺がそいつらをぶっ飛ばしてやるから」

「お兄ちゃん……」

「誰が何と言おうと恥じる事はない、堂々としてろ。祭里には兄ちゃんがついてる」

ああ、我ながらなんとというシスコン。別にいいんだけどさ、これから先がちよっと心配。せいぜい変態兄貴と呼ばれないように気をつけよう。

「お兄ちゃん……ありがとう」

「惚れるなよ？」

「……ばか」

と言いつつ、頬を染めているのは何故だろう。

妹ルートのフラグが立ってしまったのだろうか。近親相姦はバツドルートだと思っよ？

「まあ何にせよ、これからよろしくな。妹よ」

「うん、よろしくねお兄ちゃんっ！」

満面の笑みを浮かべて俺の胸にダイブする祭里。

うん、あれだ。仲のいい兄妹のスキンシップ。多分まだセーフ。

……………大丈夫、だよな？

内心では戦々恐々としながら妹を受け止める俺。

神様……………どうか妹がノーマルでありますように。

その瞬間、脳裏に咲夜が微妙な笑顔でサムズアップしている映像が浮かんで消えた。

「……………」

……………神様っってお前かよ！！

第2章「燃える瞳の萌える妹」〈終〉

燃える瞳の萌える妹・2（後書き）

相馬さん家のヒエラルキー（第2章終了時点）

1：秋月咲夜

氏神様。嫁（自称）

2：秋月佐夜子

従姉。保護者。S。

3：関谷かなみ

幼馴染。パンチラ担当。

4：秋月翔子

従妹。微S。

5：相馬雷牙

主人公。家主（？）シスコン。

6：小鳥遊祭里

妹。ポニテ。ブラコン疑惑。

7：秋月ひなた

チビツ子。今回出番なし。

出たね、妹。実はこの作品の中で一番の問題児。第2章の時点では
まだまともなのになあ……。。

翼 TRIWING ・ 1 (前書き)

まさかの職場異動。新しい事覚えるの面倒くさいよ……。また忙しくなってきたやつたい O T L

翼 TRIWING ・ 1

第3章「翼 TRIWING」

妹、祭里が我が家にやって来てからはや一ヶ月が過ぎようとしていた。

10月下旬。秋真つ盛りである。

「……………くはあ……………」

境内を竹箒で掃きながらあくびを漏らす。

『大きなあくびじゃのう、旦那様よ』

「ん、咲夜か。おはよう……………」

声の主は天宮神社の氏神様にして俺の嫁（自称）、咲夜だった。

『うむ、おはよう。昨夜は激しかったからの、寝不足になるのも無理はない』

頬を赤らめつつ嘘八百を並べ立てるチビツ子神様。

「やめろ、勝手に話を捏造するな。前章との間に関係を持った事にしようとするのは反則だ」

『よいではないか。文章に載らなければ18禁指定を受ける事もあるまい』

「そういう問題じゃねえっ！ お前最近エロ発言がエスカレートしてきたぞ！！」

『ふ。エロ神様と呼ぶがよい』

「呼ばねえよっ！？」

どこか誇らしげにその薄っぺらい胸を張る咲夜。

どんな神様だ。自重しろ13歳（享年）。

「咲夜ちゃん、朝から飛ばしてるなあ……」

「お前も止める、かなみ。このままではこの小説が18禁指定を受ける日も遠くない」

「それはそれで需要があるんじゃない？ むしろ読者のみんなは咲夜ちゃんのあられもない姿を期待しているに違いないわ！」

それは読者の方々に失礼だ！ それに最近はいわゆる禁法も厳しいんだぞ！！

ああ、駄目だこいつら。まるで事態を收拾する気がない。

「こついつ時は我が家の良心、秋月シスターズに助けてもらっしか！」

「あ、私はノータッチで。巻き込まないでね」

冷たく言い放つ翔子。彼女は低血圧なので寝起きは機嫌が悪い。

「く、その反応はある程度予測していた。だが本命はまだ残されている！」

さあ、画面の前のみんなも一緒に呼んでみよう。せーの……

「佐一夜ー子ーさん！ たーすーけーてー！！」

頼れる僕らのお姉さん。

みんな大好き、秋月佐夜子お姉さんだよー。

「あらあら、みんな駄目よ？ 雷牙さんが困っているでしょう？」

『そんな事はない。旦那様は照れておるだけじゃよ』

「違いよ！ ドン引きしてんだよ！」

「咲夜様？ さすがにやり過ぎではないかと。自重して下さいさらないのなら台詞と出番減らしますよ？」

佐夜姉え黒い！ そして怖い！

あなたは作者に対して一体どれほどの影響力を持っているのか！？

「……………聞きたいデスカ？」

「断じて否！」

ヤバい、今は命の危険を感じたぞ。この話題はタブーだ。

他のみんなも隅っこの方でガタガタと震えている。

「ほら、咲夜も早く謝って！」

なんか佐夜姉えの後ろから黒いモノが出てきてる！ よく分からないけどアレは駄目だ、飲み込まれたら二度と帰って来れないような気がする！

『う、うむ……そうじゃな、やり過ぎはよくないな』

神様が巫女さんに屈服していた。

でも微妙に反省してない。イントネーションがおかしいぞ。

「咲夜様？」

「ジュジュジュジュ」。

「いやー！！ 誰か！ 誰か止めて！ このままじゃ世界が崩壊するー！！」

『打ち切り』という名の世界の終焉がすぐそこに！！

『すみませんごめんなさいゆるしてくださいもうしませんからたーすーけーてー……』

咲夜 ああっつ！？

ああっ！ もう許してあげて！

一応ヒロインの一人なんだし、出番の剥奪だけは！！

……。

……。

……。

『ひっく……ぐすっ……ひん……』

あの黒い空間で一体何があったのか。

恐ろしくて訊く気にもなれないが、何とか無事に戻ってこられたようである。

「咲夜様？　今回はこれで許してさし上げますけど、次は本当に出番減らしますよ？」

『はい……ごめんなさい……すん……』

別に俺は悪くないんだけど、なんだかいたたまれなくなったので咲夜の頭をそつと撫でてやる。

「これでもう安心ですよ、雷牙さん？」

「はは……そうですね。ありがとうございます……」

その天使のような笑顔がむしろ恐怖をあおる。

本日の教訓

佐夜子さんに逆らうな。小説的に殺される。

あ、祭里とひなた。まったく出てこなかったけど大丈夫かな？
特にひなたは前章台詞すらもらえなかったし。作者の方、その辺どうなの？

色々ありましたが皆さん無事に生還しました。小説的に。

朝の掃除も終わって朝食。大食堂でわいわいと騒ぐいつもの光景。

かなみ、翔子、祭里、ひなたは学校があるので我が家の朝食は6時半からである。いささか早すぎる気もするのだが、女性は色々準備に時間がかかるらしい。

俺は別に大学へは進学しなかったのでテレビを見ながらゆっくと食事を味わう事ができるわけだが。

さて、今日のニュースは、と……。

おとといから行方不明になっていたS県T市の学生、佐藤多佳子さんが遺体となって発見された事件ですが発見現場付近に血痕はなく、殺害現場は別にあると……

テレビでは近頃この辺りで問題になっている連続殺人事件の報道をしていた。

「んー、最近この手の事件多いよな。これで何件目だっけ？」

「確か5件目だったと思う。早く捕まらないかな。ウチの近くだから登下校も気が休まらないよ……」

翔子が不安げに呟く。

ここしばらく、女性ばかりが行方不明になり数日後には遺体で見られるという事件が頻発している。被害者の遺体からは暴行の痕跡と薬物の反応が見られ、警察は女性への乱暴が目的の暴行傷害致死事件として捜査を進めている。ただし、一切の目撃証言が得られず犯人はいまだに捕まっていない。

「そうだなあ……しばらくは祭里と一緒に帰るといいよ。祭里、もし危ない目に遭ったら燃やして構わないからな」

「任せてっ。翔子ちゃんはあたしが守るよ」

自信たっぷりに頷く祭里。

「うっ、祭里ちゃん。先に帰っちゃ嫌だよ？」

祭里に抱きついて頬ずりする翔子。もうすっかり仲良しさんである。

「あはは、大丈夫大丈夫。ちゃんと部活が終わるまで待ってるから」

うん、こっちは大丈夫そうだ。祭里の発火能力があれば並の暴漢なんて相手にもならんからな。まあ、あまり人前で使うわけにはいかないかもしれないが緊急事態なら仕方なからう。事後処理はこちらで何とでもできる。

「ひなたは……」

「あ、だいじょーぶです。いまは集団登下校するようになってるのでひとりで帰ることはないのです。それに集合場所にはおかーさんがいっしょに来てくれることになっていますから」

「そっか。それなら安心だな」

「はい、あんしんですっ」

さすがに集合行動中を狙うほど犯人も馬鹿じゃなからう。

そしてひなた、今回はちゃんと台詞がもらえましたね。生きててよかった。小説的に。

「なら、後はかなみか。どうする？ 俺が送っていいこうか？」

「ん……遠慮しとく。なんか悪いし。大丈夫だって、ちゃんと明るいうちに帰るようにするからさ」

うーん、でも最近日は日が暮れるのも早いし心配だなあ。

俺が浮かない顔をしていると、

「平気平気。私が強いのが知ってるでしょ？」

……まあ以前に護身術として体術の基本は伝えてあるし、そこいらの不良程度なら余裕でいなせるレベルではあるのだが。

でも今回の事件、なんかキナ臭いんだよな。

「んー……やっぱり心配だな。“TW” 持って行くか？」

「いや、あれ高張るし。心配しなくてもちゃんと帰ってくるよ？」

大丈夫だから、と微笑むかなみ。

本当だな？ 帰ってこなかったら泣くよ？ 泣き叫ぶよ？

「雷牙さん雷牙さん」

くいくい、と袖を引つ張られる感覚に目を向けるとひなたが首を傾げていた。

「TWってなんですか？」

ん？ ああ、そういうはまだ見せた事なかったな。

……まあ、俺の口から話す事でもないか。

どうする？ とかなみに目配せすると困った顔で見つめ返す。やれやれ、まだこだわってるのか。いい加減そのトラウマも何とかしないといけないんだが……。

「あー……そうだな、TWっていうのはT（強い）W（輪ゴム）の略だ。ものすごく大きな輪ゴムで人ひとりくらいは簡単にぶっ飛ばせるんだぞ」

とりあえずかなみは気が進まないようなので適当に嘘について誤魔化す。我ながらセンスのなさに絶望した。

「す、すごいです！」

俺の嘘にひなたが目を輝かせている。信じちゃったよ………すげえ罪悪感。

『そ、それを使えば人間大砲とかもできるかの！？』

咲夜も信じた！？ 人間大砲やりたいのか！？

でもこの場合、どちらかというところゴムゴ……んんっ、げほんげほ

ん。

「またいい加減な事を……」

「まあ、お兄ちゃんだからねー」

俺の適当な発言に翔子と祭里が呆れている。俺だってTW（強い輪ゴム）なんて苦しい誤魔化し方しなくなかったやい。

「……それはそうと君ら時間は大丈夫なのか？ もう7時過ぎてるけど」

そう言つと学生たちの動きがピタ、と止まる。

「……」

ばたばたばたばたっ！！

急いで朝食を片付け、自分の部屋に飛び込む四人。

うーん、男の俺からすれば登校の準備なんて10分もあれば余裕なんだけどな。

「女の子って大変なんだなあ……」

完全に他人事である。

『ふうむ。わしの時代は学校なぞなかった故、ああいうのは少し羨ましいのう……』

忙しく動きまわる皆の様子を見ながら寂しげに呟く咲夜の頭を撫でる。

「ん、そか。何なら今度誰かに体貸してもらって登校してみたらどうだ？」

咲夜は幽霊だしな。やってやれない事はなかるう。

『興味はあるがやめておこう。いらぬ混乱は招くべきではなかるうよ』

そう言っただけ俺に身を寄せる咲夜。

『わしには旦那様がいてくれればそれでよい』

腕を首に絡める。

……んー？

『のう、旦那様。わしらはわしらで楽しもうではないか……』

唇が近付く。吐息がかかる。

……ふむ。

「で、佐夜子さん。どうします、これ？ まだ反省が足りてないみたいですけど」

びた。

すまん咲夜。仮にも主人公として出番を剥奪されるわけにはいか
んのだ。

今だから言うけどお前の事嫌いじゃなかった、Z E

後ろで聞こえる悲鳴は気にしない。気にならないよ。

一度自室に戻って着替えた俺は玄関でかなみを待っていた。一応
カバンにT Wを詰めて持っていく事にする。まあ、多分使う事はな
いだろうけど。

それよりもあのあと咲夜がどうなったのか心配ではあるのだが…
…いや、やめておこう。触らぬ神に祟りなしと言っし、な。

「あれ、雷牙？ どうしたの？」

玄関で待っていた俺を見て目をぱちくりさせるかなみ。

「ん……来たか。やっぱり大学まで一緒に行こう。嫌だっというならこっそりストーキングするぞ」

そう言うのかなみはしょうがないなあ、と苦笑する。

「じゃあ私は行くから。ちゃんとストーキングしてね？」

「え、何であえてそっちを選んだ？」

今のしょうがないなあ、は何だったの？

「だって大学まで一緒に行ったらなんか彼氏に送り迎えさせてるみたいに見えるじゃん」

そんなの照れるじゃない？ とにこやかに拒絶するかなみ。

ふむ……まあ誤解されたくないというのならそれも仕方あるまい。

俺と一緒に歩くのが嫌、という意味ではないと思いたい。マジ凹む。

「んー、そうか……じゃあ仕方ないな、こっそり後をつけるから気にせず行ってくれ。あと、帰る時間はメールで連絡するように。またストーキングするから」

「いや、帰りはいいいよ。そんな心配しなくても大丈夫だって」

「メールしなかったらストーキング中に撮った盗撮映像をネットにバラまくぞ」

なんとってパンチラ担当だし。きっとネットで大人気。

「あー、はいはい。変態行為もほどほどにね。もう時間ないから行くよ」

と俺の手を引いて歩き出す。

「あれ、かなみ？」

「ん？」

「手を繋いだままだとストーキングできませんか？」

「んー。まあ、盗撮されたくないし」

いや、しませんよ？

君のパンチラは俺の脳内フォルダにのみ保存が許されているのです。

「ほら、行くよ？」

手を繋いだまま歩き出すかなみ。

まあ、かなみがそれでいいと言うなら俺としては拒む理由もないけれど。

「でも雷牙って結構心配性だったんだね」

駅へと向かう道の途中、かなみは突然そんな事を言い出した。

「ん？　なんで？」

「だってわざわざ大学まで送り迎えとか、普通ないよ？」

「ああ、どうせ暇だったからな。あとウチにいるの怖かったし」

先ほどの咲夜と佐夜姉へのやり取りを話してやる。

……膝が震えているのはきつと気のせい。

「……そ、それって咲夜ちゃんは大丈夫なのかな……？」

「俺に訊かないでくれ……下手をすともう出番ないかも……」

「」
「」
「」

沈黙が降りる。

「ま、まあ佐夜子さんもそこまではしらないと思う、よ？」

「そ、そうだよな。俺も帰ったら許してもらえるように頼んでみる

よ

「だねー。咲夜ちゃんいなくなったら寂しいし」

と、咲夜の身を案じるかなみ。

そういや、かなみは咲夜とは始めから随分と仲が良かったよな。見かけによらず人見知りするかなみにしては珍しい。

「……なあ、かなみ。お前、咲夜の事どう思う?」

「んー? 好きだよ? 可愛いし、面白いし」

「ふむ……このロリコンめ」

「否定はしない」

しないのかよ。なんでそこで胸を張るのか?

「え、なに? かなみって実は百合の人?」

「……………」

何その沈黙。

本当にそうだったら引くよ? ドン引くよ?

「……………んー……いやー、違う。と思うっ、けど?」

自信なさげだ! え、マジで?

「……………いや、ここはひとつはつきりさせておこうじゃないか。アంత、あたいと咲夜のどっちが好きなのさ!」

もうテンションがおかしくなってきたが気にしない。かなみの百合疑惑に比べれば些細な事である。

「いや、どっちも大好きだよ？」

平然と答えるかなみ。

んー、それは友達としての『大好き』だと思う。でもちょっとドキドキしてしまうのは悲しい男の性さがなのか。

「佐夜子さんも、翔子ちゃんも、祭里ちゃんも、ひなたちゃんも、みんな大好きだよ？ 誰が一番、とか訊かれると困るけど」

「あー、はいはい。俺もみんなの事は好きだよー」

「初めてを捧げてもいいと思う」

「そこまでかっ!？」

性の対象としての『大好き』なのか!？

まさか百合じゃなくて両刀使いだっただとは……!!

「だって友達だし。家族だし」

だからそうなってもいいや、と笑う。

ふむー。友達や家族とそういう関係を結ぶのはどうかと思つが、まあ分からなくはない。

かなみは人に依存する傾向があるからな。孤独に耐えられないくせに他人と向き合う事に臆病で。だからこそ今の『家族』との繋がり何より大切にしている。

だけど、それなら。

「なあ、かなみ。本当にみんなの事を家族だと思ってるなら、話さないといけない事があるんじゃないのか？」

少し真面目な声で言ってみる。

「ん……」

俺の言いたい事を察して困ったように目を伏せるかなみ。

「……そんなにみんなの事が信用できないか？」

「そうじゃないよ！ そうじゃないけど……」

やっぱり怖い、と呟く。仕方のない奴だ。

繋いだ手を放して頭を撫でてやる。

「……やれやれ。まあ、踏ん切りがいたらでいいさ。別に急ぐ必要もない。だから……いつかちゃんと話してやれよ？」

「……………うん」

そこからはお互い無言の時間が続き、二人の間に微妙な空気が漂う。

そうこうしている内にいつの間にか駅前にたどり着いた。

かなみは不意に振り返り、

「ここまででいいや。大学は駅からすぐだし」

やんわりと俺の付き添いを辞去する。先ほどのやり取りで若干気まずくなっていた事だし、俺もあえて引き止めようとはしなかった。

「……そうか、じゃあここで。気をつけて行けよ」

「わかってるって、心配性だなあ」

「知らない人について行っちゃ駄目なんだぞ？」

「小学生か私はっ」

うん、やっぱり俺たちはこういう馬鹿な関係がいい。かなみの沈んだ顔なんて見たくなかった。

「あ、そだ。雷牙？」

「ん？」

「私、帰ったらみんなに言うよ。家族なんだし、どうせいつかバレる事だしね」

「……無理しなくていいんだぞ？」

「してないよ、大丈夫。……………ありがとう」

そう言っただけ俺の頬に軽くキスすると、改札をくぐり駆けていく。

……………かなみ。人通りの多い駅前ですういう事するのはさすがに勘弁してくれ。周りの視線が痛すぎる。

俺は赤面したまま急ぎ足でその場を離れる。

別にほっぺたにキスくらいでうろたえるほど子供でもないけれど、今の不意打ちは反則だ。不覚にも見惚れてしまった。可愛いじゃねえか、ちくしょう。

「あ、しまった」

せっかく持ってきたのに、かなみにTWを渡すの忘れてた。まったく、浮かれすぎだ。しっかりしろ、俺。

てててっ、てててっ、てーてー！

「ん？ メールか」

突然『曜サスペンス劇場』のメロディーが鳴る。この音に設定しているのは一人だけだ。気は進まないがメールを開くと、

今から『SUNNY LIGHT』に会い。

の一文だけ。

「……相変わらずそっけないメールなこと。愛想つてもんを知らないのかね、あのおっさんは」

やだなあ。絶対面倒な事に巻き込まれる。

さっきまでの浮ついたテンションも急転直下。グラフにするとほぼ90度。まさに断崖絶壁である。

とはいえ、無視したら無視したで後々厄介な事になるのは目に見える。

俺は若干鬱になりながら待ち合わせ場所に向かうのだった。

翼 TRIWING ・ 2 (前書き)

遅筆で申し訳ない。まあ、あんまり期待せずにおいて下さるとありがたいですm (´`´´) m

翼 TRIWING ・ 2

喫茶『SUNNY LIGHT』。

閑静な住宅街にある何の変哲もない喫茶店。特に目立つほど小洒落た店という事もなく薄汚れているわけでもない、普通の見た目の普通の喫茶店。

ただし特筆すべきはマスターの料理の腕。コーヒーもさることながら、ここで出される料理は俺的ランキングでトップに君臨している。さらに値段もリーズナブル。

そんな俺の密かなお気に入り空間で不機嫌そうなおーラを全身から放っている男が一人。俺の待ち合わせ相手、神宮 康三郎刑事（32・独身）である。

薄汚れたコートにボサボサの髪、そして長らく剃っていないであろう無精ヒゲ。浮浪者として公園に横たわっていても違和感のない風体だが、その切れ長の鋭い目が一般人である事を否定する。

「どもつす」

「遅い」

「失敬」

ち、と舌打ちを一つ。

舌打ちしたいのはこちらの方だ。いきなり呼び出しておいてこんな態度をとられたのでは毒の一つも吐きたくなるというもの。大体

この男、いつもいつも何故だか俺に敵意にも似た視線を向けてくる。あれは持って生まれた目つきの悪さではなく純然たる意志をもって俺を敵視しているのだ。そのうち一度殺し合っておくべきかもしれない。

「ご注文は何になりますかー？」

ウェイトレスの千鶴さんが注文を取りに来る。40代半ばのマスターと並ぶとまるで親子のように見えるが実は夫婦。18歳の離れたびつくり年の差夫婦である。やるなあ、マスター。

「あ、モカブレンドとカレーピラフお願いします」

朝飯からまださほど時間も経っていないが軽食を注文する。この店に来て料理を頼まないなんて有り得ない。

「はい。モカブレンドとカレーピラフですねー」

さらさらと伝票に記入する千鶴さん。

「……………」

神宮刑事が無言でカップを差し出す。

「あ、コーヒーおかわりですね？ 少々お待ちくださいー」

伝票を持ってパタパタとマスターの元へ駆けてゆく千鶴さん。

「……………相変わらず無愛想なこと。向かい合っているだけで鬱になりそうだ」

「お前がそんな繊細な神経を持ち合わせているものか。さっさと座れ」

横柄な態度に若干イラつきながらも言われるままに席に着く。

「で、何すか」

「ふん……用件だけ手短に言う。最近ここいらで起こっている連続
婦女暴行殺害事件、お前が何とかしろ」

と、いきなりわけの分からない事を言ってきた。

「は？ 何言ってるの？ それはアンタらの仕事でしょうが。俺が
手を貸す意味がわからんのですか？」

「報酬は200、条件は生け捕り。生きてさえいれば手足の1、2
本ちぎれていたところで問題はなし」

「こっちの抗議は無視ですか」

「そんなものを聞いてやる価値があるとでも？」

「……………」

……………「コイツ。」

いつもの事とはいえ、いちいち癪に障る男だな。本当に殺すか？

二人の間に剣呑な空気が漂い始める。と、そこに……………

「お待たせしましたー。モカブレンドとカレーピラフ、それとキリマンジャロのおかわりですっ」

千鶴さん登場。神宮刑事も店の中で事を荒立てる気はないのか、息を吐いて俺への敵意を薄める。

こちらとしても突っかかってこないなら相手をしてやる義理はない。

「じゅっくりどうぞー」

煌めくような営業スマイルを残し、千鶴さんが去っていく。

ああ、癒されるなあ。

「……………犯人はおそらくお前と同類だ。まず普通の人間では有り得ない」

「……………というと？」

千鶴さんの笑顔にほんわかしていた俺を無視して突然語りだす神宮刑事。仕方ないのでとりあえず聞くだけ聞いてやる事にする。

「公には報道されていないが、遺体に不審な点があつてな。犯人に『吸血鬼』なんてあだ名をつける馬鹿まで現れる始末だ」

「ふーん。吸血鬼、ねえ……………」

つまり遺体から血が抜かれていたのか。ニュースでは発見現場か

ら血痕が出なかつたって言ってたけど、そもそも血液自体がなかつたわけだ。

「訊くが。『吸血鬼』ってのは実在するのか？」

「……まあ、実在する事はするけども、日本じゃ土が合わないからまず出会う事はないと思うぞ。それに『吸血鬼』とは言っても食事なら丸ごと食うから遺体が残る事もない」

以前一度だけ殺り合った事があるけど、連中人間の事なんぞただの餌くらいにしか見てないからな。そもそも婦女暴行なんてのもありえない。劣等種如きと肌を合わせるなんて、とか言いそうだ。無論、ソイツは俺がきっちり始末してやったが。

「じゃあ今回の犯人は普通の人間なのか？」

「さて、な。少なくとも吸血鬼じゃないだろうけど、普通の人間ってわけでもなかるうよ」

眉をひそめる神宮刑事を尻目にカレーピラフをかき込む。うむ、やっぱりマスターの料理は最高だな。

神宮刑事はいまいち緊張感のない俺を睨んでいたが、やがてため息をつくと席を立つ。

「ともかく今回の件はお前が片付ける。期限は一週間だ」

「ま、気が向いたらな」

ひらひらと手を振る俺をひと睨みし、神宮刑事は店を後にした。

……いま、会計済ませてなかったよな？　なんか、嫌な予感がする。

俺もあまりゆっくりしているわけにもいかないの、食事を済ませて代金を払い店を出る。やっぱり神宮の野郎、俺にコーヒー代押し付けてやがった。俺、アイツ嫌いだ。

まあいい。コーヒー代は今度取り立てるとして、俺もさっさと仕事を済ませるかね。

SIDE 『かなみ』

「さて……どうしよっかなー」

予想外に空いた時間を持って余した私は一人ごちる。

本来なら夕方まで詰まっていたはずの大学の講義は午前中で終わってしまった。午後の講義は教授の都合で休講なのだそう。

このまま家に帰ってゆっくりするもよし、少し暇を潰してから帰るもよし、と午後からの予定を決めあぐねていると、

「関谷さん、これから何か予定ある？」

同じゼミの樋口さんが話しかけてきた。樋口さんとはよく選択科目がかぶるので彼女も午後からは休講なのだろう。

「んー、予定というほどのものは特にないけど。なんで？」

「今から休講組のみんなで遊びに行こうかって話になってるんだけど、関谷さんもどうかなって」

「えーっと……」

少し考える。

みんなで遊びに行くのも楽しそうだけど、絶対帰るの遅くなるし。

明るいうちに帰るって雷牙と約束しちゃったしなあ……。。

うん、やっぱりウチのみんなを心配させるわけにもいかない。申し訳ないけれど、今回は断る事にしよう。

「その、ごめんね？ 今日ちょっと……」

「え？ でも予定ないって……」

「ん……そうなんだけどさ、あんまり遅くまでは付き合えないんだ。みんなきつと夜中まで遊びたおす気でしょ？」

「たぶんねー。んー、そっかあ。関谷さんが来ないと男連中が残念がる

「えーっ!? 何、かなみちゃん来ねえの!? ちょっとくらいいいじゃん、一緒に遊ばーよー」

っ、もう！ 関谷さんは都合があるって言うてるでしょ！ 我がまま言ってるじゃないわよっ!!」

樋口さんの後ろから現れて会話に割り込んできたこの金髪ロングの軽薄そうな男は石田という何かにつけて私を誘ってくるチャラ男くんだ。私が友達と遊びに行こうとするといつもコイツがくっついてくる。はつきり言ってる鬱陶しい事この上ない。気軽にかなみちゃんとか呼ぶな。

「なー、いーだろー？ 絶対一緒に遊んだ方が面白いって！」

馴れ馴れしく肩に手を回す石田。

私はその手首を取って体を離すとそのまま関節を極めて捻り上げる。

「いだだだだだ！　ちょ、ギブ！　かなみちゃんギブ！」

「いい加減学習したらどうなの？　セクハラで訴えるよ？」

仕方ないので手を放す。

石田は手首を振り振り、またあの軽薄な笑みを浮かべる。

「相変わらず容赦ねえなー、かなみちゃんは。ま、可愛いから許すけど」

黙れ、お前に許してもらわなくたって全然構わない。

「馬鹿石田！　関谷さんに謝りな！　アンタそんなだから嫌われるんだよ！」

樋口さんが石田の後頭部をはたく。

「ってーな。可愛くない子はすっこんでろよ。今は俺がかなみちゃんと話してんだろ？　それとも何、お前俺に気があるの？　でも俺お前と付き合う気ないから。ありえないからー」

ひゃひゃひゃ、と笑う石田。樋口さんは俯いて肩を震わせている。

……よし、コイツを殺そう。

「なー、かなみちゃん。みんなで一緒に遊べないならさー、俺たち二人だけぶはあっ!？」

性懲りもなくすり寄ってきた石田を無言で殴る。ちなみに雷牙直伝の浸透勁。

腹を押さえて蹲る石田。そのまま逝ってよし。

「せ、関谷さん？」

目を丸くして驚く樋口さん。しまった、やっちゃったよ。

「あー……ごめん、やりすぎた。多分2、3日はご飯食べられなくなるけど、内臓は壊れてないと思うから」

多分聞こえてない。泡を吹いて気絶している。

……あれ。なんか、人が集まってきた、ような……？

「……………よしっ。樋口さん、逃げよう」

「え？ ええ〜？」

樋口さんの手を引いてその場から走り去る。当然ながら石田は置き去りで。

女の敵の事なんて知った事ではない。ちょっと振り返ると数人の女性が石田を足蹴にしていた。ざまあ。

ある程度離れたところで立ち止まり、樋口さんの手を放す。

「は、失敗した……」

がつくりと肩を落とす私。

「は……はあ……は……せ、関谷さん……」

「あ、ごめんね走らせて。大丈夫？」

「はあ……は、大丈夫」

息を整える樋口さん。彼女にも悪い事をしてしまった。

「でも、せ、関谷さん、凄いな、ね……」

「ほえ、何が？」

「だって、全然、息切れしてないし、石田の事、一発でのしちゃうし」

「あ……あれは、その、ね？」

うむむ……さっきは頭に血が上ってつい大人げない事をしてしまったが、冷静になって思い返すとなんととも気恥ずかしい。認めたくはないものですな、若さゆえの過ちというものを。

「ぶ……あ、あはははは！」

突然笑い出す樋口さん。ん、なんかツボに入った？

「えと、樋口さん？」

「ご、ごめん。なんか、石田の殴られたときの顔思い出して……
…ぶっ」

口を押さえてぶるぶると震えている。

「やー、あれはやりすぎたわー。やっぱり弱いものイジメは良くないよね、うん」

「それ、石田に言ってやったら？ アイツ、無駄にプライド高いからきつと傷つくよー？」

うーん。樋口さん、よっぽど腹に据えかねてたんだな！

ま、私も石田のプライドなんかどうだっていいけど。

「でもこれからどうしよっか。今みんなの所に戻ったらきつと色々訊かれるよねえ」

大分目立ってしまったからきつと顔も覚えられてるし。

「うーん……」

考え込む樋口さん。なんか悪い事しちゃったかな。

「えっと……良かったら、私たちだけでどこか遊びに行く？」

「え、でも関谷さん……いいの？」

「うん、なんか私のせいで巻き込んだじゃったし。そんなに遅くならなければ平気だから」

「ん……気にしなくてもいいのに。私もすっかりしたし」

逆に申し訳なさそうな顔をする樋口さん。しかし騒ぎを起こした張本人として、このまま何の埋め合わせもなしというわけにはいかない。

「ひーぐーちさーん。あーそびーましょー」

20世紀 年っぽく言ってみる。

「……………?」

不思議そうな顔で首を傾げる樋口さん。

通じてなかった！ 凄い恥ずかしい！

わーん！ 雷牙ー、助けてー！ 今こそ君のツッコミが必要な時ですよ！

「関谷さん、今の、何？」

「あー、いや、今のなし。とりあえず歩きながら考えよう」

「うん、じゃあ行っ」

私の手を引いて歩き出す樋口さん。

まあ、ちょっと遊ぶくらいならいいよね？

うん、大丈夫。明るいうちに帰るし。だからごめん、雷牙。メルするのはもうちょっと待っててね。

S I D E 『かなみ』 了

神宮刑事から仕事を押し付けられてしまったのでまずは家に電話で報告しておく。携帯を取り出し自宅へ、と。

ぶるるるる。ぶるるるる。ぶるるるる。ぶつ。

『もしもし、相馬です』

佐夜姉えの声。朝の出来事を思い出し、思わず背筋が伸びる。

「あ、佐夜子さんですか？ 雷牙です」

『雷牙さん？ どうかしましたか？』

「いえ、大した事じゃないんですけどね。かなみを送ったついでにちよつと所用を済ませてしまおうと思ひまして。お昼はこっちで勝手に食べますから用意しなくていいですよ」

用事の内容は言わないでおく。特に隠すほどの事でもないけれど、一応は警察の機密情報というやつだ。

『そうですか。雷牙さんも気をつけて下さいね？ あと、かなみちゃんを迎えに行くのも忘れられないようにしてあげて下さい』

「了解です。あ、それと……」

『はい？』

「咲夜はどうなりました？」

『

……』

え、沈黙長いよ？ 大丈夫だよ？ 生きてるよね？ 小説的に。

お願い、大丈夫って言って！

「……あの、佐夜子さん？」

『

……』

沈黙が痛い！

『……大……丈夫……デスヨ？』

だからなんでそんな怖い言い方するの！？

なんだか佐夜姉えのキャラがどんどん黒くなっていく。

「そ………そうですか。じ、じゃあ家の方はよろしくお願いします…

……」

『ええ………それじゃあ………』

ぶつ。つー。つー。つー。

「……………」

咲夜。俺にはお前の無事を祈る事しかできん。

どうか生き残ってくれ。小説的に。

……………。

……………。

……………。

よし、行くう。

今は咲夜の身を案じても仕方ない。俺は思考を切り替える事にした。

まずは情報収集だ。俺は携帯で『その男』の番号を呼び出す。

ぶるる……ぶつ。

『おつ、なんだ？』

取るの早っ！ 1コール鳴り終わる前に出たぞ？

「ああ、おれ俺。雷牙。銀ちゃん、今時間空いてる？」

『む……今は待て。5分後にかけて直す』

「了解」

ぶつ。

一度電話を切る。

……すげえ簡潔。相変わらず男前だな。

電話の相手は銀ちゃんこと門倉 銀蔵（38）。この近辺を縄張りとする指定暴力団佐伯組の若頭である。

何故そんな人種と繋がりがあるのかと問われると少々説明に困るのだが、別にとりわけ犯罪組織と仲良しというわけでもなく、単に成り行きで知り合っただけである。

今回のように神宮刑事からの依頼でとある殺人鬼を追っている途中、たまたま死にかけている銀ちゃんを発見。そのまま放っておくわけにもいかず手当てをしたわけだが……当然ながらその状況下で出会った銀ちゃんが事件とは無関係などというわけもなく、彼の傷は件の殺人鬼によって負わされたものだった。

しかし命を取り留めたはいいが、銀ちゃんは「落とし前をつける」と言っただけで聞かず、やむなく俺は銀ちゃんを伴って殺人鬼に挑む事に。それ以来、神宮刑事からの依頼があった時には何かと力を貸してく

れるようになったのだ。

てれて〜 てれて〜

ぼんやりしながら銀ちゃんとの出会いを思い出していると、携帯から『極道の たち』のメロディーが鳴り出す。ちなみにこの着メロは銀ちゃんからの要望だ。

ぴ。

「はい、もしもし」

『ああ、俺だ。悪かったな、少し立て込んでいた』

「や、それは構わないけど。もういいのか？」

『ああ。で、何だ』

「また神宮のおっさんからの依頼だね。今話題になってる連続婦女暴行殺人事件。アレ何とかしろってさ」

「こちらも銀ちゃんにならって簡潔に用件を伝える。俺がやっても銀ちゃんほど締まらないのはやはり年季の違いなのか。」

『あん？ そりゃあ警察の仕事だろ。なんでお前に回ってくるんだ』

「俺に訊かれても。まあ、俺としてもこの街で好き勝手されるのは面白くないし。で、銀ちゃん何か知らない？」

『……1時間待て。潜伏場所まで調べてやる』

「さんきゅ。費用は50くらいでいい？」

「とりあえず報酬の4分の1の50万円……じゃ少ないかな？」

力を貸してくれるとはいえ、そこはそれ。人を使つての搜索なのでタダというわけにはいかない。友達ならばなおのこと、特に金銭的な部分はきっちりしておくべきだ。親しき仲にも礼儀あり、である。

『十分だ。あと今度美味しい酒でも持ってこい』

「了解。俺のとおきを出してやるよ」

『ふ。じゃあな』

ぶつ。

いや、ホント男前。マジ惚れるわ。

おさで、それじゃあ銀ちゃん
の報告が来るまでゆっくり待たせても
らうかね。

翼 TRIWING ・ 3 (前書き)

全然時間取れない……もう査察とか無くなればいいのに) - - - (

翼 TRIWING ・ 3

SIDE 『かなみ』

「ん……………」

……………はて？

周囲を見渡す。

ここはどこだろう？ がらんとした広い空間。ひび割れた壁や床。部屋の片隅には錆びた鉄骨が積み上げられている。窓ガラスはくすんでいて外の様子を窺う事はできない。隣には椅子にロープでぐるぐる巻きにされた樋口さんが……………。

「っ、痛……………！」

頭が痛む。しかも体が動かない。ああ、私もぐるぐる巻きだ。

ぼんやりした頭では考えがまとまらない。確か私は樋口さんと一緒に遊んでいたはず。雑誌に乗ってたケーキ屋さんに行って、冬服見に行つて、その後カラオケに……………

。

おかしい。途中から記憶がぶつつりと途絶えている。で……………なんでこないかにもな廃墟に？

「んっ、……………っ！」

両手両足、緩まないようにしっかりと結ばれている。自力で解くのは無理っぽい。

だんだんと頭がはっきりしてきた。これ、もしかして最近話題の連続婦女暴行殺害事件ではなからうか。

それに思い至って顔から血の気が引いていくのが分かる。

どうしよう。どうしよう。どうしよう。嫌な動悸が止まらない。冷たい汗が頬を伝う。早くここから逃げ出さなければ。今は周りに誰もいない。でも犯人が戻ってきたら……………。

「ん……………ん……………」

隣の樋口さんが目を覚ます。

「ん……………あれ？……………関谷、さん……………？」

「樋口さん……………私たち、ヤバいかも」

「え？……………あ、れ？」

まだ意識がはっきりしていないらしい。自分の状態が分かっているようにないようだ。

「樋口さん、落ち着いて聞いてね。私たちは今……………」

がらららら。

私の声を遮って入り口のドア……シャッター？ が開く音がする。思わず音の方へと視線を向けると、そこには何か、不吉なものが……

「やあ。目が覚めたかい、二人とも」

背筋が凍る。

気さくな台詞とは裏腹に陰鬱でねちっこい嫌な声。不健康そうな青白い肌と生気のない虚ろな瞳。その右手には赤黒い何かがべったりとこびりついている。それが何かなんて、分かりたくもない。なのに、理解してしまう。

男の右手にこびりついた血液はまだ乾ききっていない。つまり私たちの前にいた『誰か』は、つい先ほど『済まされて』しまったのだろう。

震える私を見て、男の口元が三日月のように歪む。なんて、醜い笑顔。

怖気がする。嫌だ。アレは、違う。私たちとは違う、何か別の生き物だ。

「いやあ、今日は一度に二人も手に入るなんてツイていたよ。一人は僕好みのとても美しい人だし。さあ、どうやって楽しもうか？」

「ひ……！」

樋口さんが息を呑む。さすがに状況を理解したか、完全に目が覚

めたようだ。

「や……嫌だ、来ないで！ 来ないでよ！！」

そう言つと男はにい、と心底愉しそうに嗤う。

「そんなに怖がらないで欲しいな。大丈夫、すぐに気持ちよくなれるよ」

と、懐から一本のアンプルと注射器を取り出し樋口さんに近付いていく。

「な……何！？ 何なの！？ やめて、こっち来ないで！！」

「樋口さん！！」

「まあまあ、そう堅くならないで。平気平気、僕も使っているものだから」

縛られて抵抗できない樋口さんの腕に、ゆっくりと針が埋没してゆく。

「あ……あ、そんな……」

嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。何かしなければいけないのに、恐怖で頭が回らない。

注射器の中身が注入される。しばらくすると樋口さんが小刻みに震え出した。

「あ……………ああ……………ひ……………は……………あ、あああつ……………」

樋口さんの目が虚ろになっていく。やがて一際大きく震えると、がつくりとうなだれて沈黙する。

「樋口、さん……………?」

「……………あ……………う……………」

反応はない。口から泡を吹いて失禁している。

どう見たって普通じゃない、樋口さんが死んでしまう!?

「おや、おかしいな? ここまで劇的な効果はないはずだけれど。僕とした事が量を間違えてしまったかな? たっぷり楽しんでから血をもらうつもりだったけれど仕方ないね。このままいただく事にしようか」

そう言っつて男は樋口さんの首筋で大きく口を開く。その鋭い犬歯は『歯』というよりはむしろ『牙』とも呼ぶべき凶悪さを思わせる。

「やめて! やめなさいよ!! なんてこんな事するの!!」

私の悲鳴に男はこちらを向く。とにかく今はアイツの注意をこちらに引きつけなくては。これ以上何かされれば樋口さんの命に関わる。

「どうしてかって? 簡単な事さ。ヘロインを打つと血の舌触りがとても良くなるんだよ。僕は『吸血鬼』だからね、女性の生き血が

大好きなんだ」

「吸血、鬼……？」

「血は僕の力になるんだ。見てごらん」

男は部屋の端まで歩いて行くとその片隅に積んであった鉄骨を片手で軽々と持ち上げ、こちらに放ってみせた。

轟音と共に私の隣に鉄骨が突き刺さる。

「あ……あぁ……」

あまりに現実感を欠いた光景に絶句するしかない。

吸血鬼。人の生き血をすする化け物。この男に人の言葉は通じない。人間はただの餌。餌の命乞いに耳を貸す馬鹿がどこにいる。助からない。助けられない。

「君は後でゆつくりと相手をしてあげるよ。大丈夫、今度は薬の量を間違えたりしないから楽しみにしているといい」

再び男が樋口さんに近付く。

それを。

「なさいよ……」

「うん？ 何か言ったかい？」

「 いい加減にきなさいよ！ この変態！！」

「 つつ！？」

私の“力”が男を吹き飛ばす。

見えない車に跳ねられたかのように弾け飛んだ男は二度ほどバウンドし、窓を突き破って外へと投げ出された。

サイコキネシス
念動力。それが私の能力。みんなに言い出せずにいた秘密。トラウマ

この力のせいで私は両親から拒絶され、他人と関わる事に臆病になった。

とはいえ、私の力は『ある一つ物体に対して一方向のベクトルの力を加える』という単純なもので、念動力者としてはあまり強くない……らしい。

一対象に一方向の力しか発生させられないのであまり応用は利かない。地面に押し付けて潰そうとしても横に避ければ簡単に脱出できてしまう。瞬間的に側面からのベクトルを発生させ、吹き飛ばすだけで精一杯だ。

男はすぐに戻ってくる。今ので興味の対象は私へと移ったようだ。が、これからどうする……？

「へえ……なかなか面白い手品だね、お嬢さん。今のは少しびっくりしたけど、でもそれだけだ。それも」

「 つつ！」

男の言葉を遮ってもう一度吹き飛ばそうと力を行使する。しかし、ぱんつ。

風船が割れるような軽い破裂音を立てるだけで男は平然とその場に踏みとどまっていた。

「え……っ!?!」

「それもこうして魔力の障壁を張っていれば僕には届かない。残念だったね?」

そんな……最悪でも近寄らせさえしなければ何とかかなると思っていたのに……!

「ああ、楽しみだよ。君のように美しく、力のある女性の血は一体どんな味がするんだろうね。考えるだけでも震えが来るよ……」

そう言っただけで男はそのいきり立った男性の象徴を取り出した。

「ひ……っ!?!」

「でもその前にゆっくり楽しもう。大丈夫、優しくするからね」

男は陰湿な笑みを浮かべ、ゆっくりと近付いてくる。

嫌だ。来ないで。こんなの、嘘だ。

何度力を行使しようとしてとことく弾かれる。男はその血まみれの右手をのばし

「や、だ。こんなの嫌だ、嫌ああああっ！！ 助けて雷牙、雷牙
あああっっ！！！！！！」

抑えていた恐怖が堰を切り、絶望の悲鳴を上げる。決して届くはずのない叫びが廃墟に響き、男の嗜虐的な笑みがさらに醜く歪む。

その時。

「おう。呼んだか、かなみ？」

聞き慣れた、幼馴染の声

SIDE 『かなみ』了

「　　おう。呼んだか、かなみ？」

景気づけにシャッターを蹴り飛ばす。所々に錆びの浮かぶ鉄の扉はけたたましい音を立てながら派手に吹き飛んだ。

中の様子を観察してみると、椅子にぐるぐる巻きにされたかなみともう一人の女の子。女の子の方は口から泡を吹いて失禁しながら気絶している。息はあるようだが早く手当てをしないとマズいかもしれない。

そしてかなみの前で下半身を露出させている変態男。かなみを見ると、まだ衣服は乱れていないので何もされてはいないようだが、その顔は恐怖からか血の気を失い涙で頬を濡らしている。

。

「ツツ!? な……んだ……おま、え………?」

男が苦しそうに喘ぐ。足がガクガクと震え、大きく見開かれたその目が恐怖に揺れている。

蛇に睨まれた蛙。この程度の殺気で身動き一つ取れないのか、三下め。

「お前こそ何だ。誰が俺の身内に手を出していいと言った。誰が俺の身内を泣かしていいと言った。お前　　そんなに死にたいのか?」

「ひいつ!?!」

「らい、が………?」

かなみの元へ歩き出す。

「く………来るな!」

俺の行く手を遮り、変態が何か喚いている。

「邪魔だ」

「がつ!？」

顔面に軽く裏拳を叩き込み、変態を部屋の隅まで吹き飛ばす。

「相馬雷牙の名に於いて汝に命ず。我が敵を縛る戒めの楔を」

「く、あああつっ!？」

さらに捕縛用の呪符、『風戒縛』を使って変態を縛り上げる。これで数分は沈黙させられるだろう。

……………変態を縛り上げる、と言ってもSM的な意味ではない。断じてない。

「さて、と。大丈夫か？ まったく、何でこんな所で捕まってるんだお前は」

ロープは相当きつく結ばれているようだ。解くのは大変そうだったので、そこらに散らばっているガラス片を使ってロープを切つてやる。

「雷牙あ……………う……………ひつく……………怖かった、よお……………」

恐怖から解放されて何か変なスイッチでも入ったのか、泣きながら俺に抱きついてくるかなみ。俺はその背中をぼんぼんと叩きながら、

「よしよし、分かったからちょっとだけ離れてくれ。隣の女の子がヤバそうだ」

「っ！ そうだ、樋口さんっ！ どうしよう雷牙！ さっきあの男に薬を打たれて……！」

「薬？」

「ヘロインだって言ってた、けど……」

「ん……ちょっと待ってる」

女の子のロープを切り、床に寝かせて脈を取る。

ん……多少乱れてはいるけど脈はしっかりしてるな。別に過剰撮^{オーバー}取で死にかけているわけじゃないのか。これはヘロインのもたらし^スた強烈な快感で激しく“イッた”だけだな。素人にいきなり静脈注射なんて無茶をするからこうなるんだ。

「雷牙……？」

「大丈夫、気絶してるだけだ。数時間もすれば薬も抜けるよ」

「ホントに？ 死まない？」

「ああ。いきなりヘロインなんて上級者向けの麻薬を打たれたから体の方がびっくりしたんだな。命に別状はないよ」

「そっか……良かったあ……」

とりあえずの危険がないと知って深い安堵の息をつくかなみ。

「あ……それはそうと、雷牙は何でここに？」

「ん？ ああ、それはまた後で話そう。とりあえず今は
後ろを振り返る。そろそろ時間切れだ。」

「ぐうううっ！ ああああああっつ！……！」

変態が力任せに『風戒縛』の戒めを振りほどき、ゆっくりと立ち上がる。その顔は屈辱に歪み、その憤怒を表すかのように脈打つ血管が浮き出ている。

ふむ……俺がカタをつけるのは簡単だが……

「よし。かなみ、アレはお前がやれ」

「へ……………？ って、ええ！？」

信じられない、といった風にこちらを見るかなみ。

「ほら、これやるから」

と、TWをカバンから取り出してかなみに手渡す。

「あ、これ……………」

「散々怖い思いをさせられたんだ。お返しに思いつ切りぶっ飛ばしてやれ」

「……………うんっ！」

TWを受け取り、しつかりと頷くかなみ。

「ふざけるなァッ!!」

怒り狂った変態が地面を蹴り、獣じみた速度で俺へと迫る。が、

「トライウィング
TRIWING!!」

「なっ!?! ぐあああっ!?!」

突如として飛来した6枚の“羽根”が変態を取り囲み、光弾を放つ。

TW TRIWING。俺が以前かなみの護身用に作った感応同調型デバイス。純度の高い水晶を核に、かなみの血で刻印する事により彼女の弱い念動力でも操作できるように調整した中距離支援型の兵装である。

大中小3対の“羽根”はそれぞれにトリッキーな機動で相手を攪乱しながら、全方位から攻撃を浴びせかける。歌うように舞い続けるそれはかなみの奏でる破滅の輪舞曲ロンド。その輪に捕らわれた哀れな虫ケラを容赦なく穿ち続ける。

「こんな、もの、で……っ!?!」

変態の目が驚きに見開かれる。TWの光弾は魔力障壁で辛うじて防いでいたが、懐に飛び込んできていたかなみには気付いていなかったらしい。

詰み、だ。

「絶、招　　！」

かなみが力強く大地を踏みしめ、叫ぶ。

「通！　天！　炮ツツ！！」

震脚によつて生み出された爆発的な推進力を余す所なく拳に乗せた強烈な一撃。八極拳の奥義、八大招式　　立地通天炮。

天をも穿たんばかりに突き上げた拳は障壁を易々と砕き割り、首から上が吹き飛ぶかと思うほどの一撃が男の顔面を捉えた。

「か……は……」

小さく呻き、崩れ落ちる変態。

かなみは追い討ちとばかりにそのアゴを蹴り上げ、浮き上がったところを肩口から体当たり。

「すつ飛べ！！」

派手に飛んでいく変態。生つ白いもやしのような体が部屋の隅に積んであつた資材の山にぶち当たり、なだれ込む鉄骨に埋もれていった。

「……………ふう……………」

ひとつ息を吐いて、こちらを振り向くかなみ。

「ふえ~~~~っ、怖かったよ~~~~」

かなみは小走りで俺の所まで戻ってくると、そのままの勢いで俺に抱きつき、ひんひんと泣き始める。

「よしよし、頑張ったな。えらいぞ」

「雷牙~~~~」

うーん。よっぽど怖い思いをしたらしいな。

俺の胸で泣くかなみの頭を苦笑しながら撫でていると、

「ま……まだ、だ。こんな、もので、僕は倒れ、ないよ……」

変態が鉄骨を片手に立ち上がる。いや、呆れた生命力だ。まるでゴキブリだな。

「……………ッ！」

きつ、と変態を睨みつけるかなみを手で制す。

「……………雷牙？」

「いいよ、もう面倒臭いから俺がやる。お前は下がってる。あと、できればあんまり見るな」

いい加減その不景気なツラも見飽きてきた所だ。一気にカタをつけてやる。

「は、はははははは！ やられないよ！ 僕は『吸血鬼』なんだから！！」

変態が吼える。怒りで理性のタガが外れたか、俺の殺気にも怯む様子はない。

「は、『吸血鬼』？ 笑わせるなよ『紛い物』。お前は他人の血液を燃料に魔力で強化しただけの人間だろう。その程度の異形で『吸血鬼』などとおこがましいにも程がある」

『本物』と対峙した事のある俺にとっては一笑に付すべき戯言。

『吸血鬼』はまさしく人類にとっての天敵。夜を統べる月の民。異形の中の異形。目の前の哀れな紛い物とは似ても似つかない。

「貴様ああああッッ！！！！！」

変態は大きく振りかぶり、渾身の力をもって鉄骨を投擲する。

ヤツの強化された筋力で撃ち出された巨大な鉄塊は人間の肉体など容易く押し潰してしまっただろう。

そう、まともに食らえば、だが。

「 たわけ」

迫る鉄骨。だが馬鹿正直に受け止めてやる必要などない。直撃する寸前、その底面を蹴りつけ天井へと力チ上げる。落ちてきた鉄骨を片手で受け止め、

「は？」

「返すぞ？」

ヤツの投擲の数倍はあろうかという速度で投げ返す。

一条の矢と化して飛来した鉄骨は変態の脚を粉碎し、完膚なきまでに破壊した。

「ぎっ！ あああああああああああああああああああ
ツツツツ！！！！！」

避ける暇もなく両脚を潰されてその場に倒れ伏す変態。たとえ『吸血鬼』を僭称する身であろうと、これだけのダメージから瞬時に回復するのは不可能だろう。

俺は情けない呻き声をあげる変態に侮蔑の視線を向けながらゆっくりと歩を進める。

「ひ……！ や、やめろ……！ もう戦えない、降参する！ だか
ら……！」

変態は両手を上げて降参の意を示す。が、

ぐしゃ。

「うあああああああああッッ！？」

右手を蹴り潰す。骨が肉を突き破り、手首が半ば千切れかかっている。

「う……ああ……もう、ゆるして、くれ……」

「う。」

「ひ……っ」

局部を踏む。このまま踏み抜けばヤツの生殖機能は永遠に失われるだろう。

「お前はそうやって命乞いをした者をどう扱った？　なら、俺の答えも分かるよな？」

「や、やめ………！！！」

ツツ！！！！！！

思い切り踏み込む。強烈な震脚によって建物がビリビリと振動し、床に亀裂が走る。

「なんてな」

踏み抜いたのはヤツの股間の数センチ手前。

さすがに男としてアレを踏み潰すのは気が引ける。というか、こちらも精神的にダメージを受けるので勘弁して欲しい。女の子には永遠に理解できない男の事情というやつだ。

「
」

変態は白目をむいて気絶した。ふん、腰抜けめ。

完全に相手が沈黙した事を確認し、俺は携帯で神宮刑事に連絡を取る。

ぶるるるる。ぶるるるる。ぶるるるる。ぶつ。

『何だ』

「犯人を無力化した。場所は俺の携帯をGPSで調べろ。それと一般人の少女二名を保護。一人はヘロインを静脈注射されて昏倒しているが命に別状はない。が、一応救急車の手配を頼む」

『分かった。俺が行くまで動くな』

「了解」

ぴ。

なんて素っ気ない。通話時間15秒で。同じ簡潔さでも銀ちゃんと違ってまるで愛想というものが無い。まあいいけど。俺あのおっさん嫌いだし。

「あの、雷牙？」

「ん？」

「今の、どこに電話してたの？」

「ああ、警察にな。神宮って知り合いのおっさんがいるんだけど、たまにこういう始末を頼まれる事があるんだよ」

そうして神宮のおっさんが来るまで暇だったので、神宮刑事と銀ちゃんの事をかいつまんで説明してやった。かなみは驚いていたが俺がここに現れた理由を納得したようだ。

「そっか……雷牙が現れた時は私の幻覚かと思っちゃったよ。ちょっとタイミング良すぎじゃない？」

「ああ、俺も思った。ちょうど一番おいしいタイミングだったな」

まさに俺！ 参・上！ な感じ。最初からクライマックスだったと言ってもいい。

……え？ 『仮面 イダー電王』はもう古いつて？ うるさいよ。

「でも雷牙が戦ってるのと初めて見た。ちょっとチビるかと思いましたがよ」

と、気絶した変態の方へ視線をやって身震いする。

「大丈夫、チビっても俺はお前の事嫌いになったりしないぞ？」

「いや、そんなとこ受け入れられても困るけど」

とっておきの笑顔でサムズアップする俺に若干引きながらツッコむかなみ。

うむ、別に嫌いにはならないけれど新たな境地に目覚めてしまいたい。そうなので俺もできれば遠慮しておきたい。

「で、俺の事が怖くなったか？」

「ん、どうだろ……ちょっとは怖い、かな。鉄骨片手で振り回したりするし」

「あのくらいは頑張って筋肉鍛えれば誰でもできるよ」

「無ー理ー！ どんな鍛え方すればそんな事になるのよ！」

「……毎日血尿出るくらい阿呆ほど鍛えて3ヶ月くらい死なずにいられたら？」

「死ぬわ！ 間違いなく死ぬから！」

「いや、俺生きてますよ？」

「……………非常識」

「失敬な！」

とか馬鹿なやり取りをしている間に、遠くからサイレンの音が近付いてくる。お……救急車来たかな？

「ん、来たっばいな。かなみ、樋口さん運ぶの手伝ってくれ」

「ああ、うん。分かった。でも……………」

「ん？」

「樋口さん失禁してる……目が覚めたらきつと恥ずかしい思いするだろうなあ……」

と、心配そうに呟く。

まあ、女の子だからな。

「こればかりは、な。俺らにやどつにもできん」

着替えなんて持ってないし。残念ながら俺に女の子の下着を持ち歩く趣味はない。

「うん……」

浮かない顔で頷くかなみ。

「警察だ！ どこにいる相馬！」

「おおーい、神宮のおっさん。こっちだこっちー！」

騒がしく駆け込んできた警察にぶんぶんと手を振って呼びかける。すぐに気付き、部下を引き連れて近付いてくる神宮刑事。

「犯人は」

「奥で伸びてる。それより救急車は？」

「すぐに来る。状態は？」

「さっき報告した通り、ヘロインを打たれて一時的なショック症状を起こしてる。命に別状はないだろうが手当ては急いでやってくれ」

神宮刑事はちらりと女の子の方を見る。ひと目で危険はないと判断したか、それ以上は興味を示さず部下の刑事に命じて変態の捕縛に取りかかる。

おのれ、また無視か。手当てを急げと言っに。

神宮刑事の態度に若干イラつきはしたものの、すぐに救急隊が来たのでとりあえずこの場は良しとする。……覚えとけよ、畜生。

「保護した一般人は二人だったな。もう一人の方は話が聞けるのか？」

「ああ……かなみ、ちょっと」

救急車に運ばれていく友人を心配そうに眺めなるかなみを手招きする。

「……お前の知り合いか」

「幼馴染だ。下手な真似をするなら殺すぞ？」

「被害者に証言をもらっただけだ。おかしい事はしない」

「いいだろう。かなみ、こちら神宮康三郎刑事。お前に話を聞きたいそうだ」

「あ、うん。えっと、関谷かなみです」

頭を下げるかなみに、神宮刑事も軽く会釈を返す。

「すまないが署に同行を願おう。時間がかかるかも知れん、家族の方に連絡をしておいてもらえるか」

「あ、はい。でも……」

「何か？」

「その、樋口さんに付き添って病院まで行っちゃ駄目ですか？ 目を覚ましたときに説明してあげないと、きつと混乱すると思うので」

「そちらは問題ない。両親にはすぐに連絡させるし、付き添いにはうちの署から一人出す。説明もそちらから行くだろう」

「そう、ですか……分かりました、行きます」

かなみはそれでも樋口さんの方を気にしていたが、自分のわがままを通すわけにもいかず渋々ながら頷いた。

「おっさん、俺も行くぞ。かなみもその方がいいだろ？」

「うん。今一人にされるのはちょっと……」

「そういつわけだ。問題あるか？」

「ふん……好きにしろ」

何だろっね、この吐き捨てるかのような態度。かなみには普通の対応してたのに。

「雷牙」

「ん？」

「ありがとう」

ぎゅっ、と俺の手を握り礼を言うかなみ。

可愛いなあ。人前じゃなかったら思わず抱き締めていたかも知れん。

しばらくほんわかしたあと佐夜姉えに電話で事の次第を連絡し、かなみと一緒にパトカーに乗り込む。

どうでもいいけどカツ井くらいは出るんだろっね、神宮のおっさんよ。

コーヒー代の恨み晴らさでおくべきか。

……結局、解放されたのは夜の10時。もう真っ暗です。

「……………なんでかなみはカツ井おごってもらったのに俺は自腹切らされたんだ？」

「えっと……………神宮さんと仲悪いの？」

超悪いよ畜生。

「つかあのおっさん、俺に一体何の恨みが？俺の方から突っかった事ってなかったはずだけど？」

「神社の前までパトカーで送ってくれたけど、なんかそれも後でガソリン代とか請求されそう。」

「まあいいさ。とりあえず帰ろう。みんな心配してる」

「うん、そうだね」

境内へと続く長い階段を上る。ようやくこれで長い一日も終わり。帰ったら温かい風呂にゆっくり浸かってこの疲れを癒やす事にしよう。今日は自室の小さい風呂じゃなく、大浴場で手足を伸ばすというのも悪くない。

そんな事をぼんやりと考えていると、

「あ、そうだ。忘れてた」

と、先に上っていたかなみが急に振り返り、

「？ どうしたかな」

軽い衝撃。何故かぶつかってきたかなみを受け止め、何が起ったのかを胡乱な頭で考える。

「ん……………む……………っ」

吐息がかかる程に顔が近い。というか、この唇に重ねられた柔らかい感触は……………？

……………なん、で？

「ん……………はあ……………」

唇が離れる。

「……………はいい？」

「や、はは。やっぱり照れるねー、じつじつの」

さっぱりした口調で言う。暗くてよく分からないけど多分赤面している。

きっと俺もトマトみたいに赤い。夜中で良かった。こんな顔見られたら死ぬ。恥ずかし死ぬ。

……………どんな死に方だ。

「えーと、かなみさん？」

「ん？ 何かね、雷牙君？」

「今の、何さ？」

「まー気にしない気にしない」

「気にするよ！ つーかこのまま放置されたら夜も眠れない！」

きっと夜中に思い出しては恥ずかしさのあまりベッドの上を転げる事になるだろう。場合によっては近所迷惑も考えず奇声を発する事にもなりかねない。きゃー！

「んん……………まー、あれだ。今日は色々迷惑かけちゃったし、そのお礼？」

「お礼って……」

「あとちよつとしたおまじない。私、これからみんなに私の力の事話さないといけないしね」

景気づけに一発、と笑ってみせる。

男らしい、いやむしろ漢らしいな。ってか、

「馬鹿ー！ そんなんで女の子が唇を安売りするんじゃないやありません！！ そもそも、お前の力の事だってウチのみんななら受け入れてくれるに決まってるだろーが！」

祭里だって発火能力を明かした時はあっさり受け入れられたし。景気づけも何も、そんな気合いを入れなきゃいけないような事は何もない。

「分かつてはいるんだけどさ。これは私のトラウマだから、なかなかね。あと、別に安売りしたわけじゃないよ。お礼とか景気づけとかはまあ、ただの口実だから」

そう言って照れくさそうに微笑むかなみ。

「む……う……」

それは、解釈に困るな。誤解してもいいですか？ わざわざ口実を作ってまで俺とキスしたかったのだと、そう思ってもいいんですか？

かなみはただ微笑むばかりで俺の困惑に答えをくれるつもりはな
いらしい。

なんとなく目を逸らす。くそう、顔に上った血が引かない。

かなみは俺の手を引いてさっさと歩き出す。

「ほら、行くよ?」

「わ、ちよつ。かなみ、待てつて!」

「待たない」

まったく、やってくれる。そんないい笑顔で言われたんじゃ文句
の一つもつけられないじゃないか。

やれやれ、と苦笑しながら俺はかなみの後を追うのだった。

余談ではあるが。

赤面しながら手を繋いで帰宅した俺たちが死にたくなるほど冷や
かされたのは言つまでもない。

これ何の羞恥プレイ!?

第3章「翼 TRIWING」終

翼 TRIWING ・ 3 (後書き)

相馬さん家のヒエラルキー (第3章終了時点)。

1 : 秋月 佐夜子

支配者。黒。

2 : 関谷 かなみ

異能 (念動力)。キス魔？

3 : 秋月 翔子

低血圧。祭里と仲良し。

4 : 相馬 雷牙

警察の狗？ 俺参上。

5 : 秋月 ひなた

無事生還。台詞あり。

6 : 小鳥遊 祭里

今回影薄くない？

7 : 秋月 咲夜

お仕置き中……。

わあ、かなみさん。スキンシップ過剰ですよ。一応メインヒロインの一人として軽くデレさせてみました。

あと佐夜子さん。キャラの方向性がなんか怪しく……

いい日肉の日(前書き)

やべえ、スマートフォン使いにくいぞ……文字打ちにもものっそい時間がかかる……OTL

いい日肉の日

番外編「いい日肉の日」

「……………く、ふふ……………」

含み笑いが漏れる。笑いが抑えられない。抑える必要すら感じない。

「ふ、ふふ、ふふふふふふふふふふふふ」

ついに来た。待ち望んでいたこの日が。今しがた届いたブーツにより、必要な準備はすべて整ったと言っている。これがどうして抑えられようか。

「な、なんだろう。お兄ちゃんの体から気持ち悪いオーラが立ちのぼっている……………」

さすがはマイシスター祭里。いち早く気付いたか。つか、気持ち悪いって言うな。

「なんか悪いものでも食べたんじゃない？」

翔子め、相変わらず口の悪い小娘が。だが許そう……………今の俺にとっては貴様の暴言なぞ取るに足りない些末事よ。

周りがドン引きしているのにもかかわらず俯いて含み笑いを続け

る俺。傍から見れば相当怪しい。

「あの、雷牙さ」

「がばっ！ と突然顔を上げ、雄叫びを上げる。」

「貴様らあああっっ！！ 今日が何の日か言ってみるおおっっ！！！」

「わひゃああっ！？」

心配して声をかけようとしたひなたが驚いてひっくり返る。白いパンツが丸見えになっているがさすがに俺も小学生のパンツには興味がないのでスルー。パンチラはかなみの担当である。

「……今どき北の拳ネタって。もう最近の子は分からないんじゃないかな」

即座にツッコめたかなみはきつと俺と同類である。

ちなみに元ネタは三男のジャ様。「俺の名を言ってみるお！！！」というアレです。

『で？ 今日は何か特別な日なのか？』

「誰かの誕生日だっけ？」

翔子が周囲を見渡すも皆一様に首を振る。

「雷牙さん？ 一体今日は何の日なんですか？」

雷鳴を背負い、それを取り出す。

「こ、これはあああつ!? あ、あの伝説の高級牛肉、『松坂牛』
っ!? な、なんてきめ細やかな霜降りっ! こ、こんなモノを一
体どこで!?!」

ふ。さすがはかなみさん、分かっているらしい。だがお前一人
がコントに参加しても意味はないのだ!

「控えーいい! 『松坂牛』様の御前である! 皆の者、頭が高
あーい! 控えおろーう!」

「くくくくは、ははーあ!」「くくく」

即座にひれ伏す一同。よしよし。

『う………すまぬ………ノリ遅れた………』

うるたえる咲夜。まあ昔の人なので『松坂牛』とか言われても分
からないのかも知れん。

別に咲夜をいじめる事が目的ではないので頭をぽふぽふと撫でな
がら大丈夫、とアイコンタクト。咲夜は安堵のため息をつく。

「さて。今現在我らの軍には決戦兵器『MATSUSAKA』が配
備されているわけだが、作戦行動を開始する前にその運用方法につ
いての作戦会議フリーフィンクを行いたいと思う。関谷かなみ3等空佐、何か意見
はあるか?」

回りくどい言い方だが、要約すると『これどうやって食べる?』

という意味である。

とりあえずコントの概要を掴んでもらうため、俺とは一番付き合
いが長く息の合わせやすいかなみを指名する。ちなみに階級が自衛
隊仕様なのは気分である。深く考えないように。

「准将閣下！ 自分は『オペレーション・スキヤキ』を提案するで
あります!!」

「ふむ、理由は？」

「は！ 決戦兵器『MATSU SAKA』を有効に運用するため
は周囲に布陣する支援部隊の充実が必至であると自分は判断しまし
た！ その観点から鍋、それも今や世界に名だたる日本の鍋の象徴、
SUKIYAKIが最適かと」

要約すると『肉だけじゃなく野菜も食え』と。

「ふむ、他に意見のある者はいるか？」

「はい！」

元氣よく祭里が手を上げる。

「小鳥遊祭里1等陸尉、発言を許可する」

「は！ 自分は『オペレーション・ヤキニク』を提案いたします！」

「理由は？」

「は！ 決戦兵器『MATSUSAKA』本来の性能を遺憾なく発揮するためには支援部隊はむしろ足手まとい、あえて後方に陣を下げ、その最大限の威力を望めるのではないかと」

要約すると『うまい肉は塩で食べ』と。え？ 焼き肉はタレだつて？ うん、気にしたら負け。

「ふむ、いいだろう。他には？」

翔子を見る。ぶんぶんと首を振り、『無理！』とコントを拒絶する。

ひなたも同様。指名されたらどうしようとビクビクしている。

「では他に意見もないようなので採決を下す。双方の意見を吟味した結果、小鳥遊1尉の提案を採用する事にした！」

「ありがとうございます！」

「なっ、何故でありますか准将閣下！」

「反論は許さん。上官の命令は絶対だ！」

「は！ 失礼しました！」

びしっ！ と敬礼するかなみ。

ノリノリだな。こいつのこういうところ大好きだ。

俺は佐夜姉えの前で敬礼し、

「聞いての通りであります、秋月佐夜子幕僚長！ 作戦の許可を！」

「……………私は、焼き肉よりしゃぶしゃぶの方が好みですよ？」

「……………はい。じゃあそれで」

『「」「」「」「」「」「」』

今、きつとみんなの心が一つになった。

『だったら今までのコントいらねえじゃん』、と。

ええ、俺が佐夜姉えに逆らえるはずありません。みんなでおいしくしゃぶしゃぶをいただきましたよ？ 何か問題でも？

炎の悪魔と祝福の神風・1（前書き）

ああ終わる……盆休みが終わってしまふ……

炎の悪魔と祝福の神風・1

第4章「炎の悪魔と祝福の神風」

12月。一年の終わり。冬休みやクリスマスを目前に控え、街全体がウキウキと心躍る時期である。我が相馬神社においては新年を迎える準備で忙しく立ち回る巫女さんの姿がそこかしこで見える事ができる。

俺は本殿の掃除をしながらみんなの様子をぼんやりと眺め、

「いやあ、今年は人手があって助かるなあ。巫女さんがいると華があるし。眼福眼福」

「こら、神主様が巫女さんをそういう目で見ちゃ駄目ですよ」

と、翔子にたしなめられる。

「巫女さん萌えだっていいじゃない、だって男の子だもの！」

「相 みつをか！ セクハラで訴えるよ？」

「だってウチの女の子ってみんな可愛いじゃないか。可愛い女の子が可愛い格好をしてるんだから目の保養をして何が悪いというのか
！！」

「なんだろう。そこまで開き直られるとなんか正論のような気もし

てきた……」

うん、騙されてる騙されてる。

でも真面目な話、ウチって美人率高すぎるよね。つか、100%
？ これなんてエロゲですか？

『そうか、やはり旦那様は巫女さん萌えだったのじゃな』

ぴと、と背中にくっついてくる咲夜。一体どこから現れた。

「や、別に巫女さんだからというわけではないのだが。ともかく離れなさい」

君がやるとまんま背後霊になっちゃうから。

『嫌じゃ、どうしてそんな事を言う。わしはこんなにも旦那様を愛しておるといつの日に』

ぎゅう、とさらに身体を押し付けてくる。

「……………」

……………待て待て、違うよ？ うん、違う。俺はロリコンじゃないんだ。違うったら。だからこんなチビ子に抱きつかれたところで薄べったい胸の感触にドキドキしたりするはずが……………はずが……………は、ず……………あるに決まってるだる馬鹿ー！

だって柔らかいんだもん！ 幽霊のクセになんかほんのり温かいし！ それにいつも適当にあしらっているとはいえ、咲夜は超がつ

くほどの美少女なのだ。くそ、頑張れ俺の理性！

『旦那様……わしが嫌いか……？』

んなわけあるか！ 大好きだよ畜生！！

「……………咲夜。あんまり度が過ぎるとまた佐夜姉えにお仕置きされるぞ」

苦し紛れに放った俺の言葉に咲夜の体がビクツ、と強張る。

『だ、大丈夫じゃ。エロ方面に走らなければ佐夜子とて文句は言わぬはず。このまま純愛路線でいけば出番を減らされる事もない……………と、思っ』

いまいち自信なさげだ。

そうか、エロ神様は封印なのか。良かった良かった。ちよつとスキンシップ過剰な気もするけど、とりあえず18禁指定を受ける心配はなくなるわけだな。

「雷牙君、愛されてるねえ」

うるせえ、翔子！ ニヤニヤしてんじやないよ！

『無論じゃ、わしは旦那様の妻じゃからの。誰よりも旦那様を愛しておるよ』

「咲夜……………」

そして咲夜は上目遣いで俺を見つめ、

『じゃから旦那様。わしと夫婦の契りを……』

「やっぱエロ方面じゃねえかつつ!!」

ぺちーんっ。

咲夜の頭を軽くはたく。

危ない危ない。もう少しで流されてしまつところだった。

『何故じゃっ!? たとえ純愛路線であろうつと愛し合う男女が最終的に行き着く場所は一つじゃろつっ!?』

「だからそうなたらこの小説が18禁指定を受けるってんだよ!」

『く……なんと理不尽な。ソフ倫などこの世から無くなればいいのか……!』

「だからそういう危険な発言をするなど……ん?」

なんか……周りの空気が重くなってきたような……?

あ、ヤバい。ここにいたら巻き込まれる。

ふと見れば翔子はさっさと部屋の隅っこに退避している。

「咲夜様……第3章であれほど言いましたのに、またこんな事をし

いつ!?!」

「ごめんなそいって。嘸んどるがな。

「あゝ、あの……佐夜子、さん……?」

意を決して声を掛ける。ぐりん、と首をこちらに向ける佐夜姉え。

「……………何力?」

「「ひつ!?!」」

怖い! マジ怖い!! でもここで退いたら本当に咲夜の出番がなくなってしまう!

……………本心言えば、もう頭から布団をかぶって丸くなってしまいたい。震えながら腕に抱きつく翔子がいなければあっさりと逃げ出していただろう。

折れそうになる心を必死に押し止め、俺は咲夜の弁護を試みる。

「や……その……咲夜も悪気があった事ではないと思うので、今回は勘弁してあげるわけにはいかない、でしょう、か……………」

佐夜姉えの眼力にすっかり萎縮し、だんだんと尻すぼみになっていく俺の声。

すまん咲夜。やっぱり俺には佐夜姉えを止めるなんて荷が重すぎたみたいだ。

未だに精神的ショックから回復しきっていない翔子がおかしな声をあげる。

「？　どうかした？」

「う、ううん、なんでも……」

そして何故か俺に視線を向けて、

（雷牙君、助けて！）

（すまん、無理だ！）

（即答っ！？）

アイコンタクト終了。先程のやり取りで気力を使い果たした俺に
もう一度佐夜姉えを止める力はない。

っていうか、昼の準備を手伝わされるだけの話なんだから別に止める必要ねえじゃん。まあ、怖いのは分かるけど。

「それじゃあまた後で。行くわよ、翔子」

「う、うん……」

（雷牙君の薄情者……！！）

最後に恨みがましい視線を残し、翔子は佐夜姉えに引きずられて
いった。

.....
.....

『はあ〜。た、助かった〜』

「いやもうホント自重してくれ。あの黒い佐夜姉えは怖すぎるんだ
よ」

『うむ、すまなかったな。わしを庇ってくれたときには感激のあま
り思わず泣きそうになったわ』

「俺は恐怖でチビるかと思ったよ……」

『やはりわしの夫は旦那様しかおらぬ。改めて惚れ直したぞ』

「そりやどうも。俺も咲夜の事は好きだけどロリコンになる気はな
いからな」

いや、最近色々ヤバいけど。たまに流されそうになるけど。

『そうは言われてもわしはこれ以上成長できんからのう。ま、その
辺の嗜好はおいおい矯正していくとしてじゃ。旦那様よ、一つ頼み
があるのじゃが』

突然真面目な顔になる咲夜。

「ん、頼み？ 俺にできる事なら構わんが。何だ？」

『なに、そう難しい話ではないよ。ほれ、ここにな、軽く口付けてくれればそれでよい』

そう言っつて自分の唇をちよいちよい、と指差す咲夜。

「……………は？」

一瞬、脳が理解を拒む。What's? クチツケ……………KU
TIDUKE?

『じゃから口付けじゃよ。接吻。キス』

「いや、言い直さんでもそれは分かったけど……………なんで？」

いつものエロ発言とは少し雰囲気が違う……………ような気がする。
どうやら真面目に言っているようだ……………多分？

『うむ。やはりな、旦那様とは正式に契約を結んでおきたいのじゃ。これまで散々考えてきた事じゃが、今のままでわしにできる事はあまりに少ない。じゃが旦那様がわしと契約し、わしを現世に留める寄り代となっつてくれればわしも往年の力を取り戻し、旦那様の力になる事ができるじゃろう』

「ふむ……………しかしなんでキスなんだ？」

『古来より東洋・西洋を問わず口付けや性交といった性的行為は呪

術的、あるいは神秘的な意味合いを強く持つておる。それは自分と相手の魂の距離を近付ける一番手っ取り早い方法じゃからな。しち面倒な方陣やら秘薬やらを用意する必要がない分楽なんじゃよ』

「もしかして最近ずつと俺に迫ってきてたのは……」

『もちろん旦那様を愛すればこそじゃ。契約の事はおまけじゃな。とはいえ、結局わしでは旦那様を口説き落とせなんだが』

そう言つて咲夜は少し悲しげに目を伏せる。

「咲夜……」

『なに、心配せずともそれ以上の事は誓つてせぬよ。……………』

……………今度こそ佐夜子に消されてしまふからのう』

うん、消されそつだ。俺も一緒に。

先程の恐怖からか、苦笑するその頬が若干引きつっている。

「……………しかし、現世に留める寄り代つて？ 今もここに留まってい
るじゃないか。契約すると何が変わるんだ？」

『うむ。天宮神社が崩壊した事でわしを彼の地に縛り付ける楔が抜けてしもつた。おかげでわしは自由になる事ができたがそれと同時に現世との繋がりを失い、力のほとんどを存在の維持に割かねばならぬようになつたのじゃ。今のわしはただここにあるというだけの浮遊霊と変わらぬ存在。じゃが旦那様がわしを繋ぎ止める楔となつてくれれば再び神として力を振るう事もできよう』

「ふむ……」

『どつじゃ、旦那様。わしと契約してはもらえんか？』

……。

「その前に一つ訊くけど、存在の維持に力を使ってるって事はこのままだといずれ力尽きて消える事になるのか？」

『む？ いや、ただ存在するだけならば現状維持は可能じゃが……』

つまり、このままでも別に咲夜がいなくなったりするわけではない、と。

「……そつか。なら、契約はしない」

『旦那様っ！？』

断られるとは思っていなかったのだろう。驚きながらも非難じみた視線を向けてくる咲夜。

「別に力なんて使えなくても構わないよ。お前は今まで通り、ただ一緒にいてくれればそれでいい」

強い力を持つ者はそれだけ危険を呼び込みやすい。まして神の力ともなればそれだけで狙われる理由としては十分すぎる。

咲夜は我が家のマスコットキャラとして側にいてくれればいい。
荒事は俺の領分だ。

『しかし旦那様の体では……』

「俺が死んだらその時はかなみか祭里と契約して守ってやってくれ。少なくとも俺が生きている間の事は俺が何とかするさ」

『っ……………』

「だから、な。頼むよ。俺は咲夜の事が大好きだから、危険な事に巻き込みたくないんだ」

沈痛な面持ちで俯く咲夜の頭をそつと撫でる。

『旦那様よ……それはわしも同じ事じゃ。旦那様を愛すればこそ力になりたい。どうかわしの想いも分かってはもらえぬか……？』

「分かってはいるつもりだよ。だからこれは俺のわがまま、ただの自己満足だ。咲夜のためなんかじゃない。俺は俺のために、お前とは契約しない」

『この……馬鹿者がっ……………！』

咲夜の目尻に涙が浮かぶ。

ああ、泣かせてしまったな……。

咲夜の泣いてる顔は見たくなかったからその小さな体を抱きしめて、あやすようにポンポンと背中を叩く。

「ありがとな咲夜。それと、泣かせてごめん」

『旦那様……』

……。

しばらくそっぴていると、

かたん。

「ん？」

なんか、部屋の入り口から物音が。

「あ、ああああああなた……一体何やってるのよ……」

見ればかなみが俺たちを指差してわなわなと震えている。

『「」……「」』

よし、状況を整理しよう。概況は以下の通り。

- ・部屋には俺と咲夜の二人きり。
- ・涙で頬を濡らす咲夜。

・その体をしっかりと抱きしめる俺。体格差があるため、見ようによつては覆いかぶさっているように見えなくもない。

.....
ヤバい、言い訳できねえ。

「わ、わ。む、むりやりですか？」

ひなた！ いつの間に！？ つーか、意味分かってるのか！？

「.....お兄ちゃん」

ま、祭里さん？ 声が怖いよ？ あと、何だろう。なんだか佐夜姉えにも似たドス黒い何かがにじみ出てきてる。それって佐夜姉えにも似たドス黒い何かがにじみ出てきてる。それって佐夜姉えの固有スキルじゃないの？

「きゃーっ！ お巡りさん！！ 助けてー！！ ロリコンが！ 性犯罪者がここにいますー！！ 今まさにいたいけな少女がその毒牙にいー！！！！！」

「ちょ、かなみ！ 何叫んでくれちゃってんの！？ そんなわけないでしょうよっ！？ もうちよつと冷静に見てものを言えー！！」

「ただただってささ咲夜ちゃんがおお怯えて泣いてるじゃない！！ ろ、ロリコンはともかく、むむ無理やり事に及ぶだなんて.....」

…ッ!！」

落ち着け！ 本気でドン引くな!!

「お兄ちゃん……信じてたのに……お兄ちゃんはシスコンだって信じてたのに!! いつかあたしと幸せな家庭を築くんだって信じてたのにっ!!」

「うおおい!! 何恐ろしい事口走ってんの!? むしろそのカミングアウトに俺の方がドン引くわ!!」

以前からブラコン疑惑はあったが、まさか近親相姦願望を持っていたとは!!

認めません。お兄ちゃん断じて認めませんよ。

「お兄ちゃんッ!！」

「何さ!?!」

「咲夜ちゃんほどじゃないにしても、あたしだって立派なひんぬーキャラなのにどうして駄目なのっ!?!」

「実の妹だからだよ!! あと俺はひんぬー教信者じゃねえっつ!!」

女の子の胸にサイズで優劣をつけるなどおこがましい事だ。きよぬーだとかひんぬーだとかにこだわる輩には声を大にして言いたい。乳に貴賤なし、と。

「うーそーだー！ 咲夜ちゃんもかなみちゃんもひんぬーなのに！
メインヒロインが二人ともひんぬーなのに！！ どうしてあたし
だけ仲間外れにするの！？」

馬鹿ー！ 今まで咲夜以外、各キャラクターの胸の大きさにはあ
えて言及してこなかったのにここでカミングアウトしちゃ駄目だろ
！！ ほら、かなみなんか orz こんななってるじゃん！！

い、いかん。このままでは收拾がつかないぞ。く、今の状況では
俺までお仕置きを食らうかも知れんが仕方ない。

俺は天に向かってまっすぐ手を伸ばし指をパチン、と鳴らす。

「佐ー夜ー子ーさーん！！ HELP MEEEEEEEEEE！！」

「はい？ 呼びましたか？」

「おうちっ！？」

あっさり来た！？ もっと黒いの想像してたのに！！ いや、そ
れはいい。今は何より……

「助けて佐夜子さん！ なんかおかしな誤解が広がってる！」

「はあ………？ それはまあ後に置いて、とりあえずお昼にしま
せんか？」

「え、あれ………お昼？」

「わーい、おひるごはんー」

ひなたが佐夜姉えに抱き付く。

……………何故だろう。俺たちと佐夜姉えたち親子のノリに若干の温度差がある気がするの。

「あらあら。それじゃあみんな手を洗って食堂に来て下さいね？」

「いや、あの……………」

「来・て・く・だ・さ・い・ね？」

『「「「はい「「『

黒いオーラを纏いはじめた佐夜姉えに逆らえるはずもない。俺たちは一も二もなく頷くしかなかった。

……………とりあえず助かった、のだろうか？

「あー……雷牙ー？ 私の玉子焼き食べるー？」

かなみが俺の機嫌を取りにすり寄ってくる。

「……………」

結局あの後、咲夜本人の口から誤解である事が説明されたので俺は無罪放免となった。俺の弁解に聞く耳を持たなかったかなみと祭里が先程より何かと寄ってくるが俺はふて腐れたまま相手にしない。

「お、お兄ちゃん。あ、あたしは信じてたよ？ お兄ちゃんは生粋の妹萌え患者だって」

びしっ！

未だに妄言を垂れ流す祭里に無言でデコピンしてやる。

「わうっ！？」

「黙れ変態」

「も、もっといぢめて……………」

「むしる言ばれたっ！？」

キャラ崩壊も甚だしい！ 何で頬を染めてうっとりしてんの！？

せっかく咲夜がエロキャラから更生しようかという時に新たな変

態がー！

「らーいーがー、いい加減許してよー。構ってくれないと寂しいんだってー」

ぎゅむー、と俺の腕に抱き付くかなみ。

うむ……もう今更隠しても仕方ないけどやっぱり胸はない。いや、さすがに咲夜よりは幾分ふくよかな感触があるけれど。

「お兄ーちゃん、あたしも謝るからー。お詫びにあたしの初めてあげるからー」

「だからそれが反省してないって」

ぴんぽーん。

話の途中で突然玄関のチャイムが鳴る。

「……あら？ お客様みたいですね」

と、佐夜姉えが出て行く。心なしか黒いオーラがにじみ出ていたところを見ると、もう少し遅ければ祭里がお仕置き時空へ飛ばされていたのかも知れない。

「……ともかく騒ぐな。客人に我が家の恥を晒す趣味はない」

「うう、お兄ちゃんのいけず」

くすん、と下手くそな泣き真似をする我が愚妹。

「愚妹つて。何だかあたしの評価が右肩下がりになってるよ?」

「人の心を読むな愚妹。兄ちゃんは登場初期の祭里を愛していた」

当初は普通に普通なただの可愛い妹だったはずなのに一体どこで間違えたのか。ああ、あの頃が懐かしい。

「あたし初期からブラコンだったよ? ちゃんと読み返してみて」

「少なくとも近親相姦願望は持っていなかっただろうに」

「そこはほら、そろそろ慣れてきた頃だしキャラ崩壊してもいいかなーって」

「だーまーね。お前は危険な発言が多すぎるぞ。一度佐夜子さんにお仕置きしてもらえ」

「お仕置きなら……佐夜子さんよりもお兄ちゃんの方が……」

はあはあ。

『お仕置き』という単語に反応して息を荒げる祭里。

駄目だコイツ! 変態ゲージの上昇を止められない!

『あー、わしはここまで酷くなかった……よな?』

「関わっちゃ駄目よ咲夜ちゃん! 姉さんが戻ってきたときに巻き込まれる!」

そして時は動き出す。

あまりの恐怖に記憶が曖昧になっているが、どうやらお仕置きを食らったのは祭里一人のようだ。口には大きなバツテンマークのついたマスクを付けられている。なるほど、ああやって台詞減らすんだ。この小説は俺の一人称だから、俺が描写しなかつたらホントに出番なくなるんだな。

他のみんなも恐怖から一言も発する事なく固まっている。

「それで雷牙さん。お客様をお連れしたんですけど」

「客、ですか？」

「ええ、居間にも上がってもらいましたけれど」

「そうですね、すぐに行きます。……祭里、しばらくそっやって反省してる」

ブンブンと首を振る祭里。『構って！』と全身で訴えかけてくる。

「まあ大人しくしてなくてもいいけど。その場合、俺もつお前の事

描写しないよ？」

非情な俺の言葉に祭里が涙目でプルプルと震える。これで少しは大人しくなるといいのだが……って。

何故服を脱ぐ……っ！ いかん、これ以上は危険だ！

「じゃあ俺は行くから。後はよろしく」

俺は服を脱ぎだした祭里の描写を放棄し居間に向かう事にする。

そこまでして出番が欲しいか。祭里……恐ろしい子。

「佐夜子さん、再教育をお願いします。もう俺の手には負えません」

背後で祭里をす巻きにして縛り上げている頼もしい佐夜姉えの姿に一縷の望みを託し、俺は食堂を後にした。

炎の悪魔と祝福の神風・2（前書き）

ふふふ、休日出勤とか何の嫌がらせだ。時間外労働20時間越えち
やうんだZE……OTL

炎の悪魔と祝福の神風・2

「……で、客つてのはアンタか」

居間では神宮刑事が相変わらずの不機嫌オーラを全身から放ちながら俺を待っていた。

「……いいから座れ。さつさと用件を済ませるぞ」

「なんでアンタが席を勧めてんだよ。ここは俺の家だぞ」

「黙れ」

「……………」

コイツ、いつもいつもほとんど会話が成立しねえ。話を通じないわけではなく、俺との意思疎通を完全に拒絶していやがるのだ。一応俺にだって基本的人権ぐらいは保障されてるんだぞ。その辺りどう思ってるのさ国家権力？

いちいちこちらが気を遣って会話を試みるのもムカついてきたので話だけ聞いてさつさと追い出してやる事にする。

「で、用件つてのは何だよ」

「これを見る」

と、懐から一枚の写真を取り出し俺の方へと放る。

「……何これ。どっかのロックミュージシャン？」

そこに写っていたのは彫りの深い顔立ちに燃えるような真紅の髪の毛。細身の長身はひ弱というよりはむしろ豹のようなしなやかさを感じさせる。そして服装は全身黒一色。黒のスラックスにインナーとロングコート。さらには黒のサングラスと徹底しており、唯一の色彩を持つその真紅の髪が闇の中で燃える炎のように鮮烈に映える。

「暁 緋炎【あかつき ひえん】。数年前から警察の追っている殺人鬼だ。公には発表されていないが全国で指名手配されている。何度か追い詰めた事もあるがその度に建物に火を放って逃亡されるため、警察でも手を出しあぐねている状態だな」

「ただの放火犯じゃねえの？」

「断じて違う。奴に殺された被害者はことごとくが焼死体で発見される。わずかに生き残った目撃者曰く、『炎の悪魔』だそうだ」

「炎の悪魔、ねえ……」

それがただの比喻表現でないとすると、犯人は祭里と同じような発火能力の持ち主という事だろうか。全く、厄介な。

「最近、同様の手口で殺された焼死体がこの近くで3件ほど発見されている。今は報道規制をかけているが、いつまでも隠し通せるものでもない」

「で、事が公になる前に俺に何とかしろって？」

「報酬は500、条件は生死問わず。期限は2日だ」

……毎度の事ながら有無を言わせないのな。拒否権って知ってる？
まあ断らないんだけどさ。

「潜伏場所はわかってるのか？」

2日というからにはすでに居場所を掴んでいるだろう。いくらなんでも猶予期間が短すぎる。

「郊外の廃工場群だ。一応包囲はしてあるが、手が出せん」

つまり、俺に始末をつけろと。つか、丸投げかよ。

「現場には俺も同行する。準備ができたなら声を掛ける」

「はあ………了解………」

やる気のない返事をして俺は席を立つ。

それにしても今回は神宮のおっさんも一緒なのか。気が重いなあ。

『気付いておったのか……』

「まあな。で、何の用だ？」

『うむ……旦那様よ、すまぬが先程の話は聞かせてもらった』

「どうやら盗み聞きしていたらしい。まあ幽霊に壁など無意味なのは分かっていた事だが。」

「んで？」

『話を聞く限りでは、旦那様はまた危険な相手と戦う事になるのじやろう？ 関わりのない事ならば放っておけばよいものを、何故わざわざそんな危険な事に関わろうとする？』

「んー。だって自分の街で殺人鬼がうろついてたら安心して生活できないだろ？」

「言ってみればゴキブリと同じ事だ。見かけた以上は潰さねば気が済まない。」

『しかし旦那様ほどの実力があればそこいらの殺人鬼などに易々と後れを取る事もあるまいに』

「何を不安に思う事がある、と咲夜は言う。」

「俺はそれでもウチのみんなは違っただろう」

「俺一人の事で済むのなら別に放置しておいて構わないのだが、相

手は一般人にも害を及ぼす殺人鬼だ。すでに幽霊な咲夜はともかくかなみや祭里、戦闘能力を持たない他のみんなが巻き込まれないとも限らない以上これを見過ごす事はできない。

『む……それは……』

口ごもる咲夜。

俺はにやり、と笑って。

「それにな、この街は俺の縄張りだ。こんな小さな街に殺人鬼なんて、俺一人で十分なんだよ」

『……旦那様は殺人鬼なのか？』

「まあな。一般人を手に掛けた事はまだないけど」

俺が相手にするのは人としての枠から外れた連中だけだ。今まで殺した数を思えば殺人鬼という言葉すら生ぬるい。

「で、話はそれだけなのか？」

『……いや、本題は別にある』

「……………」

『わしも連れて行け、旦那様よ』

まあ、言うとは思ってたけど。予想通りの答えに俺は密かに嘆息する。

「一応訊くけど、なんでだ？」

『今のわしでも障壁くらいは張れる。剣を執って戦う事はできないまでも、いくらかは旦那様の役に立てるじやろう』

「いや、しかしな……」

『旦那様が危険な目に遭うと分かっている大人しく留守番などしてられるか。旦那様が何と言おうとわしは付いて行くぞ』

文句あるか、と開き直る咲夜。

「あのな、なんで俺がお前と契約するのを断ったか分かってるか？」

『分かってはおるが、納得したわけではないわ』

契約を断った事をまだ根に持っているのか、不機嫌そうに答える。

「むう……そんなに心配せんでもいざとなったら羽霧を喚べばいいし。危険な事なんて何も無いって」

あの能天気な剣はあれでも神代の神様、伊都之尾羽張神であり十握剣・天羽々斬である。はつきり言って反則極まりないが、彼女がついていれば滅多な事などまず起こり得ない。

『危険がないというならわしが付いて行っても構わんじやろ？』

今度は咲夜がにやりと笑う。

「……………」

『決まりじゃな』

ああもう、仕方ないなあ。

俺は深いため息をつく。やられた、くそ。

「はあ……分かったよ。付いて来るなら姿は消しておけ。いちいち神宮のおっさんに説明するのも面倒だから」

『うむ、任せろ。旦那様の邪魔にはならん』

やれやれ。まあ、咲夜一人くらいならいいか。

そう思い直し、神宮刑事の下へ向かおうとしたその時。

「雷牙っ！ また神宮さんの依頼だつて？ 私も手伝う！」

ばたーん、と騒がしくドアを開けてかなみが入ってくる。お前もかよ！

「いきなり来て何言ってやがる！ 却下だ却下！」

「何でさー!？」

「わざわざ危険な場所に連れて行く意味が分からんわ」

こっちは咲夜だけでも頭を抱えたいってのに、これ以上話をややこしくしてくれるな。頼むから。

「私だつてTRIWING持つて行けば戦えるもん！」

なおも食い下がるかなみ。なんでそこまでして殺人鬼討伐なんかについて行きたいかねえ。

「お前な……これは遊びじゃないんだぞ？　ここから先は頭のイカした殺人鬼同士の殺し合いだ。たとえ戦う力があつたつてお前の出る幕なんてないんだよ」

「だけど……！」

「かなみ、俺はそんな事のためにTWを渡したわけじゃないんだぞ？　お前なら分かつてくれてるもんだと思つてたが」

それは図らずも異能者として生きる事になつてしまつたかなみが、その理不尽な暴力に屈する事のないようにと作つた守護の翼、守りのための力だ。こんなつまらない争い事に用いるためでは、断じてない。

「分かつてるよ……だから言つてるの。私は君を守りたいから。……いつも守つてもらつてばかりだけど、君の方が私より全然強いけど……」

それでも守りたいの、と真つ直ぐに俺を見つめてかなみは言う。

「……………」

「……………」

「.....はあ」

これでもう何度目のため息だろう。ため息をつくと幸せが逃げるというのなら、きっと俺のハピネスゲージはとっくにエンプティである。

そして自覚はあるのだが.....弱いな、俺。どうにもこの子らの頼みを断りきれない。また佐夜姉えに頼ろうかな。ホント最近頼りっぱなしで申し訳ない限りではあるのだが。

「雷牙.....」

「あゝもう！ 分かった、分かったよ！ 好きにすりゃいいだろ！ ただし佐夜子さんと神宮のおっさんに断ってからじゃないと連れて行かないからな！」

と、言うてから気付いた。咲夜の時もこうやって断れば良かったんじゃない。あの2人がそう簡単にOK出すわけないし。

で。

「好きにしる。俺は知らん」

「雷牙さん、ちゃんと2人を守ってあげて下さいね？」

OK出ちゃった！ 何でさー！？

後ろでかなみと咲夜がハイタッチ。え、なにこれ？ 四面楚歌？

「おいおい、神宮のおっさんよ。一般人は巻き込まないのが信条じやなかったのかい？」

「幽霊に異能者。どこが一般人だ」

悪びれもせずにバツサリとこちらの抗議を斬り捨てる神宮刑事。

ぐ……………もつとも。

くそ、神宮のおっさんは駄目か。なら、

「佐夜子さんも！ 何とか言っつけてやって下さいよ！」

「2人とも？ あんまり遅くならないように帰ってくるんですよ？」

『「はい」』

的外れな佐夜姉えの言葉にユニゾンして答える仲良し2人。誰がそんな事を言えと。

「……………もお、嫌だこの人ら」

だうー、と滝のような涙を流してうなだれる俺。

いいや、もう勝手にすればいいじゃない。あたいは知らないよ？

郊外　　廃工場群。

打ち捨てられた廃墟の群れ。ところどころひび割れた壁面。剥がれ落ちた塗装と伸びるに任せた丈の長い雑草。ここはすでに終わりを迎えた抜け殻だ。だが

「あれは……」

俺たちが神宮刑事の車でたどり着いた時、朽ち果てたはずの工場には「火が入って」いた。

神宮刑事は入り口付近にいた若い刑事に詰め寄る。

「どういう事だッ!! 俺たちが来るまで待機していると言っておいたはずだろうが!!」

「そ……それが警視庁からやって来た赤城警部の命令で……」

「あんの馬鹿っ!! 今すぐ全員下がらせろ!!!!」

神宮刑事の叱責が飛ぶ。若い刑事は無線で撤退命令を伝えるべく、慌てて車の方へ駆けていった。

「やれやれ、面倒な事になったな。おい神宮のおっさん! 警視庁の人間が来てるなんて聞いてないぞ」

「こつちだつて予想外だ! あのボンボンに知られると絶対に先走るのが分かっていたからこの事は箝口令を布いていたはずなんだが……」

くしゃくしゃと苛立たしそうに頭を搔きむしる神宮刑事。

「まったく。俺の事はあまり外の人間に知られたくないんだがな……」

「言ってる場合か! 行くぞ!! 工藤はここで署に連絡! 消防と救急の手配もだ!!」

そう言つて工藤と呼ばれた若い刑事を残し走り出す。

やむなく俺たちも後に続く。仕方ない、ここからは俺も少し気合を入れようか。

「咲夜！　かなみとおっさんに障壁を！　俺の事はいいから自分たちの事だけに集中しろ！！」

『了解した！』

「かなみ、TWを出しておけ！　いつでも対応できるように警戒は怠るなよ！」

「わ、分かった！」

2人の返事を聞くと俺は走る速度を上げる。

「先に行く！　お前らは生存者の救助を優先しろ！！」

3人が頷くのを確認すると一気に加速。ぐんぐんと差が開いてゆく。

「ち、これだから神宮のおっさんが持つてくる仕事は嫌なんだ！　いつもいつもロクな事がねえ！」

愚痴りながら廃墟の中を駆け抜ける。

向かうは煉獄。銃声と爆音の鳴り響く惨劇の中心地へ。

では突破できないようだ。

「ひ……！ 来るな、来るなあ……！」

がち。がち。がち。

弾倉を撃ちつくしてもなお恐怖に駆られた刑事は引き鉄を引き続ける。

「なあ、おっちゃん。もう、ええかな？」

殺してもいいか、と男が問う。

「あ……あ……」

絶望に震える刑事。

目前に迫った炎の死神をなすすべなくただ見つめる。

「ほな、な。わりかし楽しめたで」

男が右手をかざす。

哀れに震える生け贄の命を燃やし尽くそうと炎が

「はいストップ。それはやりすぎなんじゃないかな」

さすがにこれ以上様子見というわけにもいかず、男の背後から声をかける。男はさほど驚いた様子もなくこちらへと振り返った。

「んー？ なんや兄ちゃん。こんなとこで遊んでたら火傷すんで。子供は早よ帰り」

「そういうわけにもいかないんだわ。俺はアンタを殺しに来たんだな」

「……へえ？」

男が愉しげに目を細める。まるで新しい玩具を手にした子供のようだ。

「兄ちゃん、強いんか？」

「さて、な。それは試してみない事にはなんと も！」

言い終わるかどうかのタイミングで地面を蹴り、一足で男の左側に飛び込んだ俺は左手のジェリコ941を乱射する。あくまで牽制、ダメージなど望むべくもない。

飛び抜ける際に右手で腰を抜かしている刑事の襟首を掴んで引き寄せる。

「なああっ！？」

そしてそのまま跳躍し大きく距離を取ると右手を放し刑事を下ろす。

「……さっさと立ってここから逃げろ。そんな所で転がっていられたら邪魔だ」

「き……君は一体、何なんだ……」

「神宮のおっさんにも訊けよ。俺は忙しいんだ」

刑事を背に男と向かい合う。

「兄ちゃん、面白いやつだな。これでもうしばらくは遊べそうや」

当然の事ながら俺の放った銃弾は一発も通らず、障壁に阻まれて蒸発した。

全く、神宮のおっさんめ。こんな能力があるなんて聞いてないぞ。これならジェリコじゃなくてデザートイーグルを持って来るんだっ
た。

「別に遊んでやる気はないけど。そんなに戦うのが楽しいか？」

バトルジャンキー

戦闘狂め。これじゃあ迂闊に接近戦はできないな。かといって銃弾は届かず、持って来た呪符は回復と防御がメインだ。一体どうしろと。

「戦う？ 阿呆な事言うたらいかんわ。誰も俺には触れられへんし、誰も俺には届かへん。俺はな、戦うのが好きなんやない。弱いもんいじめが好きなんや」

「……最悪だな」

「よつ言われるわ」

スト 自覚はあるらしい。なるほど……戦闘狂じゃなくてただの加虐嗜
サディ

好者だったか。

「それはそうと、おっちゃん。こんな子供一人残して自分だけ逃げようとするんは大人としてどうなんよ？」

「ひいっ!？」

見ると、先ほどの刑事がそろそろと入り口の方へ逃げ出そうとしていた。声をかけられると脱兎の如く走り出す。

「あーあー。あれが天下の警察様かいな。少年ほっぽり出して逃げよったで」

「別に構わんだろう。俺が逃げろって言ったんだし、実際邪魔だしな。それと、俺は19歳だ。一応まだ少年だけど、子供って呼ばれるほど若くもないぞ」

「ほーん。まだ17、8歳くらいかと思っただわ。いや、すまんの」

悪い悪い、と手を合わせる。

「……別に大した違いじゃないだろ、それ」

1、2歳違っくらいで変わらんと思っただが。

「いやいや、成長期の1、2歳は大きいでー？　うちの妹も2年会わんかったら胸のサイズがAからDになっとなっただからなー。思わずその場で押し倒して開通させてしもたわ。後で思いっきし泣かれたけど」

「……変態め」

「それもよう言われる」

言われるのか。

いや、そう言えばウチにも一人変態がいたな。近親相姦って普通の事なのか？ 俺がおかしいのか？ 違うよね、法律で禁止されるくらいだし。

「さて、ほんじゃあ

」

男がにやりと笑い、空気が変わる。

「 始めよか、弱いもんいじめ」

唐突に男の体が掻き消える。いや、違う。完全にこちらの予測を上回る速度で俺の背後へと回り込んだのか。

「 ツー！」

慌てて振り返ったその視線の先には、

「……上手いこと避けや」

男の両手から吹き上がる紅蓮の、炎が

炎の悪魔と祝福の神風・3 (前書き)

はい、富樫よりも更新遅いKです。

いや、ね。実はうちのPCがあぼーんしましてデータが全部飛びました。書き直すのは非常に時間がかかるのですよ) . . . (;

炎の悪魔と祝福の神風・3

SIDE 『咲夜』

先に駆けて行った旦那様を追って走る。途中発見した負傷者たちを避難させながらなのでなかなか追いつかない。

先程から気ばかりが急くものの生存者を見捨てて先に進むわけにもいかず、わしはイラつき始めていた。

『く……馬鹿者共がつ！ 自分たちでは敵わぬ相手だと何故理解できんだ！』

「咲夜ちゃん……」

「下の人間にとって上の人間の命令は絶対だからな。悪いのは自分の功績のために部下をこんな場所に送り込んだ間抜けな上司だ」

そしてその間抜けな上司を止められなかった自分の責任でもある、と神宮某が苦々しく吐き捨てる。

『今は責任の所在などどうでも良いわ！ 早く旦那様の下へ急ぐぞ！』

一刻も早く。一秒でも疾く。

あの“魂喰い”をもあっさり而降した旦那様に敵う者などそうそ

ういるとは思えない。しかし、これだけの破壊をたった一人で行う怪物が相手ならば旦那様とて万が一という事もあるのではないか？

「。　　やん？」

不吉な想像が脳裏に浮かぶ。決して旦那様の事を信頼していないわけではないが、それでもやはり側に付いていられないのは不安だった。

「　　ちゃん……咲夜ちゃん！」

かなみに大きな声で呼ばれて我に返る。

『あ……ああ、何じゃ？』

「落ち着いて咲夜ちゃん。そんなに心配しなくても雷牙なら簡単にやられたりしないって」

『ッ……！　　そのような事は、言われずとも分かっておるわ！』

「っ、さ、咲夜ちゃん？」

『あ……いや、すまぬ。分かってはおるつもりなのじゃが……』

かなみに当たってしまった。申し訳ない事をしたとは思いつつも胸の焦燥は募るばかり。どうにも嫌な予感がしてならなかった。

(旦那様……わしが行くまでどうか持ちこたえていてくれ……)

側にいられさえすれば相手が何であろうと守ってみせる。いざと

なればその場で契約してしまえばよい。本来の力が発揮できるのならはこの世のあらゆる災厄をも退けてみせよう。

「ん……？ あれは……」

神宮某が何かに気付き、足を止める。見れば前方から走ってくる人影があった。神宮某は拳銃を構え、かなみがトライウィングを前方に展開する。わしも障壁の出力を上げて臨戦態勢を取る。

「ひ……ひい……た、助けてくれ……っ！」

「……………赤城？」

「……………お知り合いですか？」

「ああ。アイツが勝手な真似をした馬鹿上司だ。……………赤城イツッ……」

と、激昂した神宮某は男の胸倉を掴み上げた。

「何故勝手に動いた！ お前は自分が何をしたのか分かっているのか……」

「じ、神宮……！ わ、私は暁 緋炎の逮捕のために来たんだ！なのに私には何の報告もせず、か、勝手な事をしていたのはお前たちの方じゃないか……」

「この件は俺に一任されていた……！ お前の役割は逮捕する事ではなく事後処理だと最初に説明されていただろうが……！ 何故俺たちが着くのを待てなかった……」

「く……う、うるさい！ 私は上司だぞ！ 何故お前の指示を仰ぐ必要がある……！ 私は逮捕できると判断したからそうしただけだ！！」

「その結果がこれか！！ 一体何人死んだと思っていやがる！！」

「私のせいではない……！！ あんな化物が相手だなんて私は聞いていなかった！！」

「　　ッ！！」

がすっ、という鈍い音が響く。

「ぐあっ！？」

神宮某が殴ったのか、悲鳴を上げて男が倒れていた。さらに拳を振り上げ、

「この馬鹿が！！ そんな事だから　　」

『いい加減にせんかッッッ！！！！！！！！』

「……………」

黙り込む二人。わしに言わせればどちらも馬鹿者じゃ！

『そんな事で言い争っておる場合か！！ 今は生存者の救助と旦那様の援護が最優先じゃろくに！！』

「っ……………ああ、その通りだ。すまん」

神宮某は齒嚙みしながらも素直に謝り、男を解放する。

「な……………なんなんだ、あの少女は……………」

『たわけ、わしの事なぞどうでも良いわ。それよりお主、拳銃と日本刀で武装した少年に会わんだか？』

「あ……………？ あ、ああ……………確かにその少年なら見た。あの化物の前に立って私に逃げろ、と……………」

こやつ、そう言われてあっさり逃げ出してきたのか。いや、それはいい。どうせ足手まといになるだけだ。

ともかく、旦那様はこの先に

その時、大きく大気を震わせて爆音が轟く。これまでよりも一際大きな爆発。間違いない、あそこで旦那様が戦っている……………！

「っ！ 咲夜ちゃん、急ごう！！」

『うむ！』

かなみに頷き走り出す。

「赤城……………戻ったら辞表を書け。お前に刑事は無理だ」

そう言い残し、神宮某も後に続く。赤城某は途方に暮れたように呆然と立ち尽くしていた。

『良いのか？ 放っておいて』

「構わん。どのみち付いて来たところで役には立たんし、アイツの身の振り方まで面倒を見てやる義理もない」

『……………』

まあ、それはわしには関係のない事か。組織内の確執になど興味もない。

今はただ全速で旦那様の下に。

視線の先で轟々と燃え上がる『戦場』へと向かう。

S I D E 『咲夜』 了

……油断した。

何とか直撃は避けられたが右の義足がヤバい事になっている。

背後に回り込まれた時、咄嗟に右の後ろ回し蹴りを放ち距離を開ける事はできたが、高熱の障壁に触れた義足が俺の生身の部分をジリジリと焼いているのだ。

特殊な合金で作ってあるのでさすがに瞬間的な接触で溶ける事はないものの、熱を持った金属に触れている生身の部分はそうはいかない。

……ぶつちゃけ、ものつすげえ熱つちいいいいんだよ！！

「く……はははははは！！ 兄ちゃんやるなあ、なんやその脚？ 面白いもん持つとるやんけ。蹴り飛ばされるなんて初めてやぞ」

愉しそうに笑う男の右腕は俺の蹴りを受けてあらぬ方向へ曲がっている。

ダメージとしては向こうの方が大きいが、機動力という点ではこちらが不利。我慢はできるが長期戦になれば体力の消費も激しくなるだろう。

あの障壁を何とかしない事にはジリ貧だ。まったく神宮のおっさ

んめ、面倒な相手を押し付けてくれたものだな。

「ボーっとしてたらあかんで。あっさり終わったらつまらんやろ？」

男の足元が爆ぜる。先程は面食らったが冷静になって見れば仕組みとしては簡単。あの男は発火能力で自分の足元を爆破し、それを推進力に変えているのだろう。まあ、タネが知れたところで対策など立てようもないのだが。

男は一瞬にして俺との距離を詰めると炎を放つ。

俺は左に飛び退いて回避すると振り返りざま国綱を抜刀し、一閃。

さすがにこれを障壁で受け止める気にはならなかったが、男はまた足元を爆破して大きく間合いを開ける。

「つとと、物騒なもん持つとるやん。知つとるか兄ちゃん、日本には銃刀法つちゆう法律があるんやで」

「ああ。ついでに言うとお人殺しは犯罪だ」

「はは。せやな、知つとるわ」

「あと、近親相姦もアウト」

「興奮するで？」

「変態に基本的人権はいらないと思う」

「酷い事言いなや！ 偉い人かて言うてるやろ？」 『変態だっってい

いじゃない、だって人間だもの』って」

相 みつをかよ。そのネタはすでに章の冒頭で俺が済ませたわ。

「って言うかアンタ人間だったの？」

「いや見れば分かるやん。一体何に見えてたんや？」

「てつきり変態ロックミュージシャンかと」

「え、それは変態とロックミュージシャンのどっちを人として認めてへんのや？」

「答えはWebで」

最近はまだこのタイプのCM、あんまり見なくなったよねー。

「じつつ気になる！ って、なんつでやねん！！」

「ばあああああんっ！！」

……………なんでツツコミを入れるのにわざわざ背後を爆破して演出効果を入れる必要があるのだろう？

しかも派手なりアクションを取ったせいで折れた右腕をさらに痛めてる。コイツ馬鹿だ！

「はあ……………はあ……………やるな兄ちゃん、今のは効いたで……………」

ひとしきり痛がったあとでそんな台詞を吐く。ヤバい、コイツ面

白い。ノリだけで生きてるようなこの感じ、俺と同類の匂いがする……！　もしかしたら友達になれるかも知れん。

……いやいや、冷静になれよ俺。いくら面白くてもコイツは敵だ。私情を挟むわけにはいかない。

「……さて、それじゃあ休憩はそろそろ終わりにしようか」

内心の動揺をポーカーフェイスで押し隠し、無理やりシリアス路線へと軌道修正を試みる。いい加減右脚の熱も引いてきたし、そろそろバトルを再開してもいいだろう。

「ご休憩は終わりか？　次はご宿泊か？」

しかし空気を読まずボケ続ける男。いやなんでやねん。

「ラブホかよ！　アンタ男でもイけるのか!？」

「兄ちゃん。俺、割と名器やで？」

「気持ち悪い事言ってるじゃねえ！　しかもアンタが受けなのかよ……！」

頬を赤らめるな！　マジで洒落になってねえ!!

「やれやれ、振られてもうたらしやあないな。お前を犯して俺もイクうう!!」

それを言うならお前を殺して俺も死ぬ、じゃねえの？

俺の周りって何でこんな変態ばかりなんだろ……。――。

「や、冗談やで？ ホンマにドン引きせんとして」

「もう死んでいいよ、変態」

「酷い！ さっきまであんなに激しくツッコんだりツッコまれたりした仲やないの！」

「嫌な言い方してんじゃねええっ！！」

よし、コイツを殺そう。今殺そう。すぐ殺そう。

かたん。

その時、入り口の方から物音が。

「ん？」

「あ、あああああんた……。いい一体何やってるのよ……」

見ればかなみが俺たちを指差しわなわなと震えている。

『だ……。旦那様よ……。ま、まさかそういう趣味だったのか？ だからわしには一度も手を出してくれなんだのか……。？』

「……………趣味は、人それぞれだ」

あれー？ なんかこのパターン、章の最初の方でやった気がするぞー？ 天井？

「待て待て待て待て！ 変態はアイツだけだ！！ 俺ノーマル！！
女の子大好き！！」

なにげに神宮のおっさんのリアクションが一番傷ついた。

なに理解を示してくれちゃってんの？ さすがに男色の趣味はな
いよ！！ それだったらまだロリコンの方がマシだ！！

「ははははは。いやー、えらい賑やかになってきたなー。……………
……………で、みんな殺してええんか？」

「いや、お前が死ぬ。これ以上その耳障りな声を響かせるな」

言うや否や、神宮刑事のニューナンブM50が火を噴く。

じゅっ。

正確に眉間と心臓を射抜くはずの鉛玉は、しかし届く事なく蒸発
する。

「ち、変態め。おい相馬！ アレはどうなってやがる！」

「なんで俺にキレんのさ？ その辺の情報はむしろ警察が把握して
ないといけないんじゃないの？」

「ふん、役立たずが。もういい！」

だからなんで俺にキレるんだろう？

勝手にキレて俺を無視する神宮のおっさん。今度は右手で引き金を引きつつ左手が撃鉄を連続でコックし、残弾を全て撃ち尽くす。寸分違わず同じ軌道を描く銃弾。同一点に弾を集中し、障壁を突破するつもりか。3連続でピンポイントショットを繰り返すなんてちよつとした神業を見せてくれる。

……しかし神宮のおっさんよ。西部劇じゃないんだからファニングなんて古臭い技使ってんじゃないよ。アンタの銃、ダブルアクションでしように。

じゅつ。

しかも案の定通じてないし。

「ち、ド変態が」

おっさんの銃の通じない相手は変態なのか？

「 アンタはあんまり楽しめそうにないなー。邪魔やからアンタから先殺そか」

突如として男の体が跳ねる。その爆発的な加速に3人の反応が遅れる。

「く つー!？」

「悪いなおっちゃん。俺アンタみたいなナイスミドル、嫌いやねん」

一瞬にして神宮刑事の懐に飛び込んだ男は左手を伸ばし

「俺を前によそ見か？ ナメるのもいい加減にしとけよ」

「何 つく、あああつ！？」

すんでのところで男の髪をつかんでそのまま後ろに投げ飛ばす。

ぞぞあああつ！

男は体勢を崩しながらも倒れる事なく踏みとどまった。

「っ痛ー……なんつー無茶苦茶な。ハゲたらどないしてくれんねや……」

後頭部をさすりつつボヤク男。

「しまった……引きちぎっておけばよかったか」

「怖っ！ マジ勘弁して。俺まだこの歳でハゲたない」

「ふん……どのみちハゲるのは時間の問題だ。頭頂部、ちょっと薄いぞ」

「嘘ん！？ え、マジな話！？ ちょ、ちょお待ってや！」

言いながら頭頂部をまさぐり始める。

うん、馬鹿だ。

『だ、旦那様……その腕……』

「雷、牙……………?」

「……………馬鹿がッ!」

みんなが俺の左手を見て愕然としている。

先程男の障壁を無視して直接手を触れたために重度の火傷を負っていた。耐熱・防弾性に優れたザイロン繊維を編み込んだロングコートを羽織っているので腕の方は大した事はないが、指先の方の感覚がない。致命的、というわけではないが少なくともこの戦いの中でもう左手は使えないだろう。

「まあ、向こうも右腕潰れてるし。後で治療用の呪符使うから平気だ」

『じゃが……………』

「それよりおっさん、足手まといだ。ここはいいからアンタは刑事たちの統括に当たれ。かなみと咲夜もそっち手伝ってくれ。コイツは俺一人で十分だ」

「……………分かった、任せる。終わったら呼べ」

神宮刑事はそう告げると振り返る事なく走り去る。その辺りの決断の早さはさすがと言っべきか。

『わしは嫌じゃ! ここで一緒に戦っぞ!』

しかし神宮刑事の後を追う事なくこの場に留まる馬鹿が2人。

「……………」

無言で頷き、咲夜に同意を示すかなみ。

「お前らな……………」

「騙されたー！ーっ！！ おいこら兄ちゃん、ハゲてへんやないか！ むしろふっさふさやないか！ つまらん嘘ついてんなや、俺本気でハゲてんのかと思て心配したやる！！」

俺の言葉を遮って男が叫ぶ。おのれ、空気の読めない奴め。ホントにハゲればいいのに。

「別にハゲでもツラでもいいよ。興味ないし」

「くううう、なんちゅー冷たい兄ちゃんや。ツンデレか、ツンでデレなんか！」

「いや、アンタにデレる予定はないぞ。ツン100%だ」

「じゃあそつちのお嬢ちゃんであええわ。今から俺とヤれへんか？俺、テクにはちょっと自信」

「 TRIWING! 」

変態が台詞を言い終わる前にTWの一斉射撃が始まる。聞く耳もたぬ、とばかりに乱射される光弾の嵐。

「おおわっ！ たっ！ あぶなっ!?!」

慌てて避けるところを見ると、男の障壁ではかなみの光弾を防ぐ事はできないらしい。

対物理限定の攻性防御か。となると、俺よりはかなみの方が相性がよさそうだ。とりあえずいつでも割って入れるように注意しながら少し様子を見る事にする。

「~~~~っ危ないなー、そんな恥ずかしがらんでええやん。お嬢ちゃん処女か？」

「黙れ」

短く吐き捨てるかなみ。ん、なんか怒ってる？ そんな下ネタ嫌いだったっけ？

「んー？ お嬢ちゃんもツンデレか？ むしろヤンデレか？」

「うるさい。アンタ……何やってくれてんのよ……………」

かなみの肩がわなわなと震えている。

「？ 何が？」

「私の！ 雷牙に！！ 一体何したって言うてんのよッッ！！！！」

「ちょ、あぶっ！ 痛っ！ いただだだっ！！」

下手な鉄砲も数撃ちや当たる、と言わんばかりのヤケクソじみたTWの乱射攻撃。狙いもクソもあったものじゃない。男は避けきれず、何発か食らっているが大したダメージはなさそうだ。

頭に血が上って力が分散してしまっているのか？ あれじゃあ決定打にはならないぞ。

「……アイツなんであんなにキレてんの？」

隣にいる咲夜に訊いてみる。

『そりゃあ旦那様を傷つけられたからじゃろう。愛じゃな』

「そんな阿呆な。ちょっと火傷したくらいであそこまでキレないだろ？」

『やれやれ。旦那様は自分の怪我に無頓着すぎるぞ。例えばかなみや祭里がそんな怪我をさせられたら旦那様はどうする？』

言われて、怪我をさせられたかなみと祭里を想像してみる。

……………。

「怪我させた相手はまず間違はなく八つ裂きだな。人としての原形も留めないほどの挽肉にする」

俺の身内に害を及ぼす輩は誰であろうと皆殺した。

迷わず答える俺に咲夜が若干引いている。

『つむ……まあ、そういう事じゃ。察してやれ』

うーん。まあ、理解はしたけどそういう暴力的解決法は俺の領分

なんだが。

しかも『私の雷牙』とか言われたし。ちょっとドキドキ。

「ええ加減にしいや、お嬢ちゃん。あんまりオイタが過ぎるとお兄さんも怒るで？」

相変わらずデタラメな機動。ノーモーションで加速、制動、転換を繰り返す男の動きにTWがついていけず次第に引き離されてゆく。

完全にTWの包囲を抜けた男は一気に突っ込んできた。だがその瞬間を待っていたかのように、それまでバラバラに動いていた6枚の“羽根”がかなみの前方に集中展開する。

「な　　っ!？」

「　　BUSTER CANNON!!!!!!」

光が集束し、爆撃じみた轟音と共に放たれる破滅の咆吼。

全ての砲門を集中させた最大砲撃……！ 先程までの雑な攻撃はこれに繋げるための布石だったか！

「　　ッッ!!!!!!」

光の奔流が男を飲み込み吹き飛ばす。

かなみはもうもうと土煙を上げる先をじっと見つめていたが、やがて勝利を確信したかこちらに振り向いてVサイン。

「びくとりーっ！」

「馬鹿、気を抜くな！ まだ生きてる！！！」

かなりダメージはあったはずだが男の闘気は未だ衰えていない。

全力でかなみの下へ駆け寄る。土煙の中から飛び出してくる人影。かなみはまだ気付いていない。間に合うか……！！？

ギリギリのところではかなみの手を掴み、後ろの咲夜へと投げ飛ばす。

「ほえ？ わあああっ！？」

『かなみっ！？』

かなみを受け止めた後、こちらに向かって咲夜が駆ける。

「は、甘い兄ちゃん……甘すぎて胸焼けするわ！！！」

一気に膨れ上がる熱。

「 やっべえ」

その獰猛な笑みを睨みつけながら。

俺の視界は紅に染まった

。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0216r/>

相馬さん家のヒエラルキー。

2012年1月4日09時46分発行